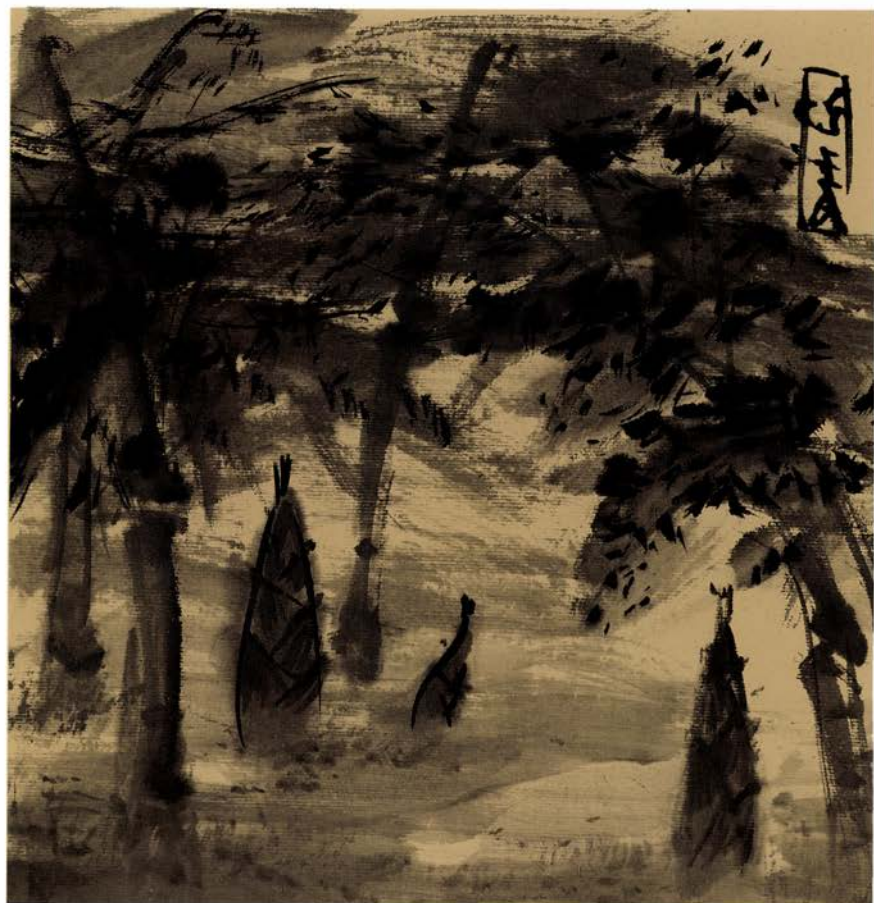


川柳端

平成八年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八二八号



日川協加盟

No. 828

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 3/4頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月25日

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

定本 西尾 栞句集

B6判・248頁・クロス装製本
頒価 3000円（〒380円）

発行 川柳塔社

西尾栞一周忌句会

西尾栞名譽主幹の一周忌にあたり、左記により追悼句会を開きます。こぞってご参加ください。

とき 5月11日（土）午前11時開場

ところ 八尾グランドホテル（元ジパング日本海）

〔八尾市八尾木北5丁目101〕
電話（0729）9413591

交通便 近鉄八尾駅下車・送迎バスがあります

兼題と選者（各題2句・午後1時締切）

〔帽子〕 宮西 弥生 選

〔頓智〕 小林 由多香 選

〔ステッキ〕 小松原 爽介 選

〔温顔〕 藤本 静港子 選

〔宝〕 岩井 三窓 選

〔孝行〕 橘高 薫風 選

会費 2000円（定本西尾栞句集）贈呈）

懇親宴 4000円（同会場で開催・予約制）

宿泊 朝食とも7000円（申込は川柳塔社事務所へ）

川柳塔社

今年の旅

橘高 薫風

麻生路郎先生生涯一冊の句集『旅人』は芭蕉の「奥の細道」の「月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人なり」から命名されたと言ふ。先生の旅の句は

山中温泉

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

など、私の好きな句であるが、旅人そのものの意味は、この世の日常の生活を旅と観じての旅人であらう。

西尾栗先生も旅をこよなく好まれた。

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

盃に島の唄ありひとり旅

いかに旅を上手に楽しめたかはしばしばお伴をした私の知るところである。

ひとり旅よし、夫婦の旅もその年代によりさまざまな味を残してなつかしく、川柳仲間との旅もこれまた殊の外たのしい。近頃は日川協の大会や国民文化祭の催しも多く、この種の旅をしばしば持つことが出来る。

春の雲旅に出でよということく

去る三月三十一日鳥取県川柳大会に出た。日帰りの慌しい旅であつたが、仲間たちの顔を見るだけでうれしい。四月初旬には高知へ、下旬には弘前へ花見の会に誘われて出席する予定にしている。この川柳塔五月号の出る頃には、それらの旅は終っていることだろうが、今年は私にとって旅の多い年となるに違いない。

五月にはいずも川柳会創立七十周年記念大会がある。六月は日川協主催の第二十回全日本川柳熊本大会、八月は鳥取の茗人忌の句会、九月には弓削川柳社主催の西日本川柳大会、竹原川柳会創立四十年記念大会と国民文化祭とやま'96の川柳大会（大沢野町）がそれぞれ開催され

る。十一月はNHK学園の全国大会があり、十二月はきやらぼく忘年句会が米子で開かれる。どの大会にも出席してその地のお仲間と交歓するつもりでいる。また、他の地方の句会にも機会を求めて出席したく思っている。

それは、来る五月十一日（土）の西尾栗一周忌句会、十月十九日（土）に予定している第二回川柳塔まつり、更には来年五月頃に開催の麻生路郎三十三回忌・麻生霞乃十七回忌・西尾栗三回忌の川柳大会へのご参加をお願いする旅でもある。

中島生々庵先生の年忌の外れているのは心残りだが、ご先祖の御霊に川柳塔の現実を見ていただくホップ・ステップ・ジャンプの三つの催しの成功を期して、各地の同人誌友各位の絶大なご支援を、今から切にお願い申し上げる次第です。

ああたイタニック号をば美学とし
呂川律川もふたりで一つなり
よい桜小歩危の吊り橋のさくら
酒倉の佐川西町東町



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

繕った場所からいつも綻びる

(葉)

岩崎 みさ江

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 今年の旅

一人遊び

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 野村圭佑

古川柳 柳籠裏二篇研究 (三十丁)

大空のころ (64)

水煙抄

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

橋高 薫風 … (1)

斉藤 効 … (2)

橋高 薫風選 … (4)

東野 大八 … (48)

橋高 薫風 … (47)

西田柳宏子選 … (54)

高杉 鬼遊 … (52)

藤村 亜成 … (81)

一人遊び

斉藤 効



花りんごわが人生の何ありし 伝次郎

十和田市から五所川原市へと校長住宅住いをして八年振りに弘前市広野の自宅

に帰る。定年退職を迎えてのことである。

春分の日、引越しの準備をしていると本棚の「りんご曼陀羅」―渋川伝次郎の足跡―青森県りんご協会発行の分厚い本にひかれて再びページを捲った。

その渋川伝次郎先生は平成三年六月十三日享年九十四歳で死去。医師の診断は自然死という大往生であった。渋伝先生と呼ばれて、りんご生産者から親しまれ、敗戦で荒廃のどん底にあつたりんご園の復興を叫びながら青森県内各地のりんご園を野良着姿で闊歩し、りんごの栽培技術や経営の指導を精力的に行い、りんごの神様と言われた方である。

渋伝先生の指導を直接受け、りんごのみならず、物の見方考え方まで影響を受けている人々が多い。勉強家であり情熱家、講堂で数百人ものりんご生産者にマイクなしで語り、決してあきさせることなく、大声で説得力の

澎湖抄……………	小出智子選……………	(78)
茴香の花……………	八木千代選……………	(82)
「抜く」……………	中原諷人選……………	(84)
一路集「辞書」……………	成重放任選……………	(84)
「溶ける」……………	波多野五楽庵選……………	(85)
初歩教室「積む」……………	吉岡美房……………	(86)
各地柳壇(佳句地十選/玉置重人)……………	川竹松風……………	(88)
■各地句会だより 高知川柳社……………		(101)
四月本社句会……………		(102)
柳界展望……………		(106)
五月各地句会案内……………		(107)
■編集後記……………		(108)

座右の句
遠き人を北斗の杓で掬わんか
私の句

鬼灯が母よ母よと朱くなる

高橋夕花

(薫風)

ある雄弁家でもあった。人々はその洪伝節に勇気づけられ、りんご経営に励まれた。まさに戦後の青森県のりんご産業を復興し、現在の隆盛に結びつけた偉大な指導者であった。その洪伝先生が時には静かに俳句を詠まっていた。私が川柳を始めて間もない昭和五十九年三月、妻(純子)と洪伝先生ご夫妻を訪ねた時、「齢と共に一人遊びを覚えた方がよい」と言われた。以前にも言われたことはあるが、この時ほど胸に焼き付いたことはない。「君はどうやら川柳を掴んだようだな」。また、先生ご夫妻は私とも夫婦の仲人であり、妻とは親戚でもあって、妻が時々訪ねると先生は自作の俳句を楽しみながら見せたという。どれもりんごにかけた人生眼の句ばかりを。そして、趣味のことで先生ご夫妻は、晩年、妻と娘二人(梢・倫子)と私の川柳を励ましてくれた。「一人遊びを覚えた方がよい」というこのことは、たまたま趣味に引用した形で言われたが、先生から出たこのことばを察するに、一人遊びは、一人学び、であり、今という生涯学習としての自己教育力を身につけた方がよいというのであろう。あえて「一人遊び」の学(洪伝哲学)と名づけておきたい。

さて定年退職、まだぴんとこないが、四月一日からは本当の一人遊びが始まりそうだ。

(三月二十一日早朝記)



橘 高 薫 風 選

京都市 都 倉 求 芽

はんなりと和紙に萌えたつ春和菓子

花が散る 散るよりほかになしと散る

鯛 鰯 海では平等に泳いでた

つぎつぎと抱き合い入水する雨滴

起きぬけの電話にさほどでもない話

足音が春だ春だと孫の靴

青森県 田 中 叶

DNA二人の女好きになる

だいじょうぶ心の隅で炭をつぐ

外灯に半身照らし人の妻

癌告知看護婦の胸豊かなる

温度計人のいのちの如くあり

父にかわり父の名がある席に座す

堺市 桑 原 道 夫

水族館の硝子に映る恋人よ

木馬一頭じんじんとする春の雷

理髪店出て世の中はまぶしいぞ

金魚無心 自らの糞を吐き

鉄棒のそばを離れぬ新入生

ミミズ干涸びて全長となりけり

岡山市 花 田 たけ志

ご機嫌が良い鉄先の深いこと

魂胆がある親切はぎこちない

死出の旅 開門式で出たいもの

恐ろしい事と思わぬ恐ろしさ

母体行 子供の客までわしゃ知らぬ

義理チョコが緩やかにする七十路坂

松原市 小池 しげお

お母さん座りのできぬおかあさん
制服のままで煙草を吸っている

もっと叱られると思うてたへアーカット

大太鼓だけは舂で覚えさす

仙人の杖舂そうに重そうに

老眼鏡拭いて光陰矢の如し

出雲市 板垣 草丘

春眠の摂理のままになる五体

つららが下がると冷蔵庫は駄目だ

所得税ことし最後か六十四

今世紀お前と共に抜け出そう

前半は知らずに祝う七十年（いずも七十年）

七十年いくさに散った句も綴り

西宮市 奥田 みつ子

光みな集め一年生が行く

弟を褒めれば兄が不服そう

失敗は生きてる証 水を飲む

香煎茶 言いたい言葉飲みこんで

窓越しに枝のカラスとにらめっこ

知らぬことばかり 大辞林と遊ぶ

海南市 三宅 保州

水天彷彿 敵も味方もないものを

私の手術 私は見ていない

数学嫌いサインコサインあたりから

きつちりと千切れたことがない切手

動くのはよそう相手も動くから

腹の虫一匹だけでおさまらず

富田林市 池 森子

風船が縮んだ父の死後 母の冬

ポリグラフにかけても薄情な波形

落馬しないように祈る木馬のパパ

左手に毒と右手に解毒剤

散文の湖を泳いでいるメダカ

始まりはとても小さな草の種

鳥取県 谷 口次男

のんびりと見える男がスパイです

農業をバカにするからこのザマだ

風邪引いた糊の如くの男です

安物の総理を入れた熨斗袋

それから舌切り雀話し出す

学者ども宇宙相手に遊んだる

横浜市 菱田 満秋

金のある人には時も金である

展望台からも大空仰ぎ見る

暖かいので散髪をおもいたち

下向いて行く人ばかり雪の道
よろよろと出たゴキブリも殺される
検査値へ一喜一憂 酒のこと

吹田市 古川 喜美子

大欠伸びよいと出ていた昼の月

梅三分虚実の間でふるえてる

三男と三女の夫婦仲が良い

愛ひそと欲し佗助うつむいて

芸術だからわからなくてもいいのです

言いわけはしない必死にガラス拭く

米子市 澤田 千春

春一番 私も面をとりかえる

ときめいた昨日が耳を出てゆかぬ

ふるい立つ 太鼓が父のノートから

打ち過ぎた杭が悲しい顔をする

庭の松にきびしい父が生きている

水平線の向こうの街に行つて来る

米子市 寺沢 みど里

父の面影するには芸が浅すぎる

的を得て弓も極限まで撓う

風にのる雪の乱舞も芸だらう

咲き終えて今は気ままな風に乗る

車座になると不思議な力湧く

郷の山 余生の視野に凜と立つ

人間以外笑わぬと聞き笑うてみ
赤ん坊に語ると口をみつめられ
我慢がまん三べん言うて石になる
私より仲間がいいのでしょと妻
雪の降るたびに若やぐ雪女
生国をかくす男がもてている

今治市 矢野 佳雲

定年の胸上げ宙に舞う孤独

啓蟄にうれし遠近花だより

週末の恒例孫の無事のTEL

日記書くほとんど蟻の一代記

はみだしているが形になる小枝

米食えぬ人居る国の余剰米

短冊の詩も写経も同じ墨

素うどんへ心やさしいトロロ昆布

ひな壇の酒にほんのりなり候

背中灸 妻が兎の役をする

蓮生桜滅 集う池上本門寺

武士道にない政党の座り込み

どの角度からも聞える病母の声

退屈な時間お経はまだ苦手

島根県 松本文子

交野市 福岡 しげお

唐津市 田口 虹汀

唐津市 田口 虹汀

唐津市 田口 虹汀

唐津市 田口 虹汀

捨てるもの捨てられぬものゆで卵
華麗にワルツ五十代ともさようなら
ほろ苦い春をひとりで食べている
崩したり積んだり世の中も多忙

出雲市 伊藤 寿美

ブラットホームの風いくばくの謀反かな
老い独り花にも芽にも話しかけ
タイムカプセルに楽しかった日を入れる
母の掌にもう戻らない滑走路
峰打ちの情けをずっと後で知り
春風に合鍵一つ渡される

藤井寺市 吉岡 美房

藪椿むかしのままに咲く故郷
これからは春の寒さのお水取り
御堂筋 背広を脱げば春となる
春の風 鬼が力をもりかえす
いざという時に刃こぼれないように
思惑という損得が黙らせる

生駒市 北山 悟郎

男は冒険好んで苦勞をする
元氣よく声一杯出し苦が消える
引潮が今日の愁いひいて去り
男は争う血潮湧いてくる

留守番の年寄り猫に馬鹿にされ
満身創痍メスは少しも怖くない

松山市 白石 春嶺

薄情な都会の水に刺が浮く
年金ではじく暮らしの狭い視野
泥舟を漕ぐ世渡りの櫓がきしむ
作戦を練るコーヒーに味がない
風貌も記録も群を抜く駿馬
退院の朝の注射は痛くない

羽曳野市 榎本 吐来

席を蹴る英気を齡が押さえ込み
突っ込んで訊けば可愛いナルシスト
自惚れを今日は健気とみる余裕
ワープロに消えた癖字が懐かしい
妻の目をパスした春を待つ上衣
沈黙もはつたりのうち飲んでいる

大阪市 榎本 落児

もしかして妻はみ仏かも知れぬ
冬夜長妻が花札出してくる
住所録 妻も時々朱を入れる
雪だるまちゃんとおへそもついている
天地無用 中に私が入っている
夕陽がきれい無為にすごした一日だ

砂川市 大橋政良

靈柩車 絵になるような花ぐもり
手を洗う心に恥じるかのように
あげ足を取る言い回しばかりする
名ばかりの椅子に余白の日が永い
安らぎを求めて和尚さんに逢う

黒石市 相馬一花

花木にはとてもかなわぬ若返り
したたかな人ほど弱い貌をする
処刑されたのではない猫の皮
夫よりも素顔を知っている鏡
マドンナも胡坐をかいているコタツ

弘前市 岡本花匠

雁風呂で氣遣う矛盾北帰行
補聴器が嫌な話に面食らう
只管に歩いた道の人間味
念仏に人生問われ軋む骨
雪解水 子等の笑顔へ目交ぜして

弘前市 小寺花峯

玩ぶ男もあります均等法
青春の海で彷徨う難波船
仏滅の日で決断の先送り
人妻が美しく見える倦怠期
口笛を乗せた新車はよく笑う

弘前市 相馬銀波

指切りの指でうわさに耐えている
土は春 農夫日焼けを厭えない
りんご咲き田植に蜂と独楽になる
子に託す願い夫婦で清書する
泣くことも忘れ敗者のあせまみれ

弘前市 斉藤 蒔

司馬氏逝く竜馬の声を聞きつつか
豊作祈願 獅子舞の獅子になり
卒業の式辞じつくり農を説く
いじめられっ子も堂々と卒業日
何もかも越えてきたかに寒立馬

弘前市 高瀬霜石

この傷もこの苦も生きていればこそ
髭を剃るそして闘う貌になる
商人の性よいつい値踏みする
私利私欲捨てた男の太い眉
山の宿 戦士はチューンナップする

弘前市 一戸ツネ

七十と八つ生きた女の足の裏
それぞれの愚痴にうなずく地蔵さま
置き手紙 裏も表も乱気流
駐車違反 主の貌で座ってる
土の香と新芽が匂う無人駅

弘前市 佐治 千加子

赤ちゃんの雛^{あひな} 天使の眠りかな

父の忌や父のお点前 志野茶碗

真ごころの養母が立つてる冬の駅

しんしんと冷えゆく養母を抱きし秋

白菜鍋エブロン白き母ありし

弘前市 中山 雅城

小店から雪国の春やって来る

食卓に春の苦味を待ち侘びる

顔色が写らぬように厚化粧

馬方が茶碗で乾した酒林

白菜はキムチになって全うす

弘前市 須郷 井蛙

寄せ鍋の豆腐の熱さ胃に届き

合格の通知 四角な空が晴れ

ネオン街 大人を馬鹿にする遊び

旅行団 朝昼夕のワンカップ

ストレスの缶詰あける連休日

十和田市 小笠原 敏人

答案を雪の白さのまま返し

北に住み名残り雪など望まない

愛犬も主人の風邪に気を遣い

啓蟄も北の虫には聞えない

国会は離婚^{わかれ}夫婦のそれに似る

青森県 諏訪 柳々

古きん刺し父の仕事着納屋にあり

花だより聞いて津軽のぼたん雪

平和論 戦争序曲の音がする

赤ちゃんのビチビチパチパチ春の尿

病院を逃げて呑みたい酒の虫

青森県 西谷 大吾

象の目を見てると何故か泣けてくる

道標があるから崖を登らない

福寿草を武骨男が買ってくる

誘惑に負ける気にいる時もある

綻びを繕ってばかりいる男

仙台市 川村 映輝

九十を過ぎても年を書かせられ

意気地なし苦しみながらのむ煙草

春の雪すいすい大地に吸いこまれ

行列に並んで見てから訳を聞き

啓蟄にわが故郷は大吹雪

町田市 竹内 紫鏡

快癒した肺 哄笑はせずに老い

むかしテナーだった裏声わらわれる

職退いて三日で解いた詰め将棋

高速路 見上げ見下ろす万歩かな

ランドサットの画像に好きな尾根コース

静岡県 蘭田 葵 杏

さつきまではしゃいだ奴が眠り込む
行く先々 何故か灰皿見当らぬ

都会には馴染めぬ息子のトラクター
干ばつの茶畑に立ち腕を組む
爺ちゃん買うて武者人形と鯉轍

静岡市 安本 晃 授

正直が過ぎて無駄骨積み重ね
おもむろに戦争史描く生き残り
無記名の投書の中にある本音
饒舌の腹の底まで見てしまう
点滴のリズムに母の命あり

富山市 舟 渡 杏 花

嫉まれる生きてる証かも知れず
テーマから外れたまんま一休み
今からでも遅くはないと書いてある
冷凍魚と向き合っている現身よ
男を試す 橋のない川選ばれる

富山市 島 ひ かる

記念樹へふと重なりし手の温み
順番が来る飴玉を砕かねば
猫嫌い 猫もわたしをそう思う
初心者が甘んじている飴と鞭
鵜の目鷹の目 おんな同士だと思ふ

富山市 酒 井 輝

職退いて道譲る癖まだ抜けぬ
まだ夢が残りひたすら暗い道
サラ金が死語にしている質流れ
口下手を長持唄でかばう父
正直が過ぎて切れるクモの糸

羽咋市 三 宅 ろ 亭

路郎師の筆跡躍如 川雑封
三浪が合格夫婦の泣き笑い
いよいよとなつて帰命頂礼畏まる
退職後 君よ一体何をした
ちぐはぐに生きた人生ドラマかも

大阪市 上 田 柳 影

いつかつの恐さを父の地声から
愛いくつたしかめあつて五十年
タコ焼のタコの固さ銭の価値
時折は甘い鬼にもなる母で
ストレスを幾つ消したか縄のれん

大阪市 津 守 柳 伸

満開の頃一泊のスケジュール
二の丸へ大中小の缶ビール
ばんぼりの風情 水面に映る恋
申告と検診春の予定表
お絵かきをする園児にもコンピューター

大阪市 本間 満津子

春宵をひとりぐらしは寝てしまい

探しもの被害妄想起しそう

けじめつく無口な人のひと言で

どの色も抱擁光らない黒で

忘れものしそう うきうき春の服

大阪市 西出 楓 楽

魂を放つみどりの風の中

責任があつて白い歯みせられぬ

世俗の垢洗うと似合う無精髭

疎外感しきり包丁買い替える

白髪染め自分を騙すことにする

大阪市 町田 達子

ナルシストになって振向くのは止そう

春讀える野鳥が少しかしましい

捨猫が処世上手に媚びを売る

健脚へ今年は歴史ウオッチング

息子訪う犬のタローが主役顔

大阪市 北 勝美

通院へこれが梅見の車なら

儂さはテレビ見ている花便り

楽な靴買い替えるのも歳なれや

取り替えの手順も慣れた紙おむつ

紳士的そんなお人がもの足らず

大阪市 井上 白峰

栄光の過去振り向かぬ影法師

ネクタイを緩めば消える胃の痛み

老いてなお出番促す咳払い

手の内を読まれて無心言い出せず

自前でも飲めば気兼ねな酒煙草

大阪市 大塚 節子

首塚に芭蕉も一句献ぜられ(片山津にて 3句)

雲海に白山おわすか宿の朝

一しきり赤い梅花に綿帽子

赤信号 意地はって一人待っている

薄紅が美し亡夫をおくる女

大阪市 渡部 さと美

竹割った人の腹立ち間欠泉

大特価に飛びつきヤング物着よう

腹式呼吸ドジった今日を全部吐く

はるばると霧を見て来た草千里

弁護士忙しいのも恐い世だ

大阪市 小糸 昭子

崖っ淵立って悟った人の情

辛いなあ階段で知る板挟み

目が点になってピカソの前で立つ

このままですまぬ残り火かき立てる

杉の子の唄で育って花粉症

大阪市 玉置英子

たくさんの花ありがとう誕生日

七冠王誕生 将棋習おうか

今日からは暫くひなと一つ部屋

犬の傍抜けて自由な猫の恋

控え目に 運に恵まりましたから

大阪市 奥田良子

目を閉じよそこはかと青葉芳しき

春風に髪そよがせし乙女の日

三人の仲好し集う花の宿

病む人に素顔のままで会いに行く

鞆二ヶ送るつらささよよろこびと(孫二人に)

堺市 山本半銭

思ひ出の墨絵 点っていたふたり

北風に背筋伸ばした日は遠い

仏壇をしめて独りの夢を見る

独りの顔はしないでおこう金平糖

骨董市 人間模様見えてくる

堺市 柿花紀美女

生きている証に写経今日もする

一筋の道を見事に生きた父

早い目に白旗老いの処世術

塩砂糖 貼紙を見て妻の留守

遠き近き 絆を思う雪降る夜

堺市 吉本菁風

朝刊が休み一時 間が持てず

遺産継ぎ家の文化は引継がず

よく稼ぐ妻が重荷になり始め

少人化 機械と遊ぶくせが付き

うどん屋の二階で挙げたブライダル

堺市 中野樺子

コート脱ぎまたコート着て春気儘

木も人も皆ほっとしてほんに慈雨

旅三日ふつと心は家を向く

一年中クインのように菎たち

寂しい適齡 素通り出来ぬ死亡欄

豊中市 安藤寿美子

夫ほど便利な道づれはいない

猫柳挿す居酒屋のカウンター

ドア閉るわが短足の間に合わず

梅の香に包まれてます一人です

新聞に害という字の多いこと

豊中市 田中正坊

目立たない一生でした梅の花

余生ならそんなに力むことはない

扁額の文字 怒らない怒らない

制服を脱いだらふくよかな娘

にがり酒 至福の陶酔を招く

豊中市 井上直次

ミーティング遅れて来たのがよく喋る

お隣の遅い帰りは社長様

カラオケも仕事の鬼に仕事なり

お金にはルーズな男だが人気

母親に三人称で引合やす

豊中市 三宅つえ子

車椅子の硬さに慣れて山を越す

車椅子替えてもらってさみしい日

車椅子の影が舌打ちばかりする

裏木戸をそつと開けてる弱い鬼

落日の暗さは父に似てかなし

豊中市 滝北博史

習慣でまず仏壇へチョコレート

渡るのは男ばかりの歩道橋

すみません言うたとたんに父になる

お互いに白髪で会った梅花祭

住専の内幕包む黒い霧

豊中市 湯浅馬洗

この国のかたちをうれい巨星墜つ(司馬遼太郎氏急逝を悼む)

風雪に耐えた盆梅精気くれ

白梅と紅梅おなじよい香り

うぬぼれを加えてくれぬ番付表

うしろからモシモシと呼ぶ携帯電話

箕面市 坪田紅葉

地震からすべての事がくるいだし

雛まつりうれしい思い出よみがえる

せめてもと色紙に書いた夫婦びな

我が事が一番大事な若い人

自分より人が気になりきらわれる

箕面市 椎江清芳

魚河岸の鮭手鉤が二度滑り

英才で育てた子等は村を捨て

よく流行る花屋看板美女がおり

いい夢を見ると長生きしたくなる

水車小屋 過疎の歴史を守る音

箕面市 岩津ようじ

三千世界を美しく変える雪

きさらぎや孫は半袖半ズボン

春近し惚けてない振りしています

全国指名手配のように花粉症

嫌うてた大阪弁を使こてはる

吹田市 瀬戸まさよ

悔いはなしみずからの円好きに生き

中年のダンスに私生き返る

野茂イチロー 羽生二十代星眩し

兵馬俑 生きてるように現れる

偶然の出会い私は花貰う

吹田市 茂見よ志子

こと程にわたし不器用たて結び
話したいことを黙っている苦痛
影法師 腰を伸ばせと気付かせる
入院へへそくりの場所告げて行く
飛来なき鳥 南天の実はたわわ

茨木市 堀良江

紅梅に染まりて候春の雪
大屋根に力士の幟春散らす
芳醇という言葉から立つ香り
プラトニックラブそんなの恋じゃないと孫
手鏡に時々母の面差しが

茨木市 井上森生

松明の一本みごとに燃えつきた
九十の母にも茶飯の癪の種
放浪の真似かひとりで山歩き
春間近 信頼に足る露の臺
舞い上がる火の粉よ夢よ二月堂

茨木市 藤井正雄

魚選るように候補を決める票
帰省ラッシュ僕にはくにも母もない
背伸びして受けた拍手の荷が重い
海峡の雪に津軽はまだ遠い
大阪の味に頷く里の母

高槻市 川島諷云児

檜山へ行く決断を迫られる
栄転の噂に酔うた四月馬鹿
極楽へ行ける寄付ならしておこう
もう一度咲かせてみたい枯尾花
沈思黙考 濡れ衣晴れる日を待とう

高槻市 井上照子

春いずこ啓蟄に雪積もる
自分史に思ある人が多すぎる
ペットシヨップ子犬の運をふと思う
進学に向かつて孫の窓灯
入浴剤ピンクの肌も老いぬれば

守口市 森川まさお

含羞んで一足早いつくしんぼ
跪くように蓬を摘む姿
旅に出る朝もやっぱりモーニング
満ち足りて瞬きもせぬ春の星
空港は味も素っ気もなく真白

寝屋川市 柴田英壬子

世の流れひらかたパークさようなら
公園で老いの冷や水響き合う
萌える緑へ焦点がきまらない
ちよつと身を引いて応えるドアチェーン
松花べんとう苟の御定食

寢屋川市 高田博泉

風船に乗った三日月よく光る

年の功 犬も安心して仕え

占いも美人の店がはやつて

満腹が観音様の顔をする

しかる事忘れたような白い髭

寢屋川市 岸野 あやめ

横着なようでも釈迦のお掌の上

祖母ちゃんは宿替え孫は受験票

引越しのどさくさ離の日も忘れ

仕事は手抜きで言葉はら抜き

だいどこで食べる茶漬に別の味

枚方市 海老池 洋

海外の旅にムード派買物派

早いといつて遅いといつて飲む話

社史の隅に僕だけの知る汗の跡

公園の隅にぼつんと読めない碑

白よりも白い気のする雪柳

枚方市 八田 敏

ひっそりと病妻と住む町の隅

陽だまりで妻の麻痺の手爪をつむ

梅便り聞いて菜の花漬けを買い

冷やかして楽しい春の植木市

言い負けて犬に小言をこぼす妻

東大阪市 森下愛論

口説かれる銚子は膝で握られる

まあ一杯お茶代わりとは酒かいな

甲斐性なし畳の上で死ぬるのか

惚けた振りして騙されてやる話

ここから春ゆつくりとコーヒー飲む

東大阪市 安永 曉子

深い雪 絵画にしたい冬木立(白骨温泉 4句)

山の道 月が眼下に見えるなり

白骨の遠い深山の雪夜道

雪山のバスかもしかに見送られ

足にかけ毛糸まきとるサウスポー

藤井寺市 中島 志洋

初めから計算された落し穴

詰め腹を部下に切らせて天下り

引き際が肝心ですと頬被り

囁きの余韻楽しむイヤリング

世話焼きがまた重箱を覗いてる

藤井寺市 福元 みのる

当人は与り知らぬ好敵手

仲直り出来てメロンにありつける

寝るだけの顔も鏡に映して見

鏡から目を外さずに子へ指図

看板の医院 霊園 目立つ駅

松原市 玉置重人

ええ店だ禁煙の札貼つてある
ガン保険 魔除けのように掛け捨てる
おもしろい街だ目の毒目のくすり
君が代は自信を持って歌えます
無料パスちよつと買物頼まれる

羽曳野市 吉川寿美

鰐広の帽子で春を翔ばんかな
人形にもなれずノラにもなれぬ風
いらだちを宥める深い水の音
戻り寒 恩ある人の計が届く
レモン一個 愛のかたちどころがつて

八尾市 宮西弥生

知恵ひとつもろて血となり肉となる
幸福の駅へ乗りついで乗りついで
春の出会いあつい握手をもつてくる
最後までだまして仏の顔になる
これからは後ろが見える鏡ほし

八尾市 高杉千歩

いつまでの余命や老いの差し向い
我武者羅に旅に憑かれてパスポート
騒々しい中で自慢を繰り返す
害のない人でお呼びがよくかかる
五月鯉 辛かったことみな忘れ

八尾市 高橋夕花

新しい眼わが家の彩を確かめる
カーテンの汚れは妻の痛みかな
父ありて母ありせばと雛飾る
さくらから想いが深くなっていく
桜前線 恋するごとく追いかけん

八尾市 山下美津留

正面を見据えて語る友の酒
告発へ向う男の目が素敵
ライバルとこっそり握手しています
休肝日 家で飲むのを止めただけ
飛天舞う青空見たし今日の鬱

八尾市 吉村一風

たとえばの話が見栄をはっている
喪があけてやっとカラオケ許される
幸せも不幸もひよいと顔を出す
まだ生きていたいこの頃酒うまし
二軒目を考えて吞む一軒目

八尾市 宮崎シマ子

どの枝も春を包んだふくらみよう
春寒を少し歩いて来て忘れ
冴えかえる星の匂いのとどくほど
孫去んで楽しさ倍の寂しさに
フウと煙草の匂いして亡父そこに

岸和田市 芳地狸村

彩色の壁画淋しい鉄とびら

(高松塚古墳)

にゅうめんの味がたのしい坂の茶屋

(岡寺)

善悪の顔を刻んだ二面石

(橋寺)

おもわくを隠した妻の笑い顔

さわりだけ立読みしてる古本屋

岸和田市 高須賀金太

結果どうあろうと言うだけは言うた

厳しさの中に慈悲あり忿怒像

みぞおちに応えるニュースばかり聞く

嘆いてるだけでは政治変わらない

健気にも地球踏んづけ生きてます

岸和田市 岩佐ダン吉

お年寄り増えたらいかんように言い

あかなあ捨てた自分にけつまずき

知っている積りで生きていた私

ひとまとめ僕の意見が消えていた

爪切りに愚痴ふえたねと言われ

岸和田市 古野ひで

あの世にはわたくしを待つ人わんさ

身うちより心優しきボランテイヤ

根は呑気 過去の恨みはみな忘れ

燃えるものまだ持っている春を待ち

ふるさとにまだ老母おわす気強さよ

岸和田市 原さよ子

照れて出す教え子 長の付く名刺

添え書きの名刺が効いてお茶が出る

胸の鬼なだめただけで追い出せず

真似られてはじめてわかる悪い癖

手をつなぐほど老いていず若くなく

岸和田市 三輪通彦

無い袖を振らねばならぬ時もある

気楽さと侘しき混じる老いの部屋

晴らす日があると恨みは伏せておく

肩書きがふえて家族と対話減る

富める国 飢える国あり世界地図

岸和田市 井齋一齋

人前でやる気を見せる指鳴らし

遺産分け一人じめする鬼が居る

会議中 何時も寝た振りする野心

いじめっ子みんなで乗せぬ縄電車

口下手は何時も爆弾抱えてる

岸和田市 田中文時

腹八分そんな人生おもしろない

左遷地で伏兵となる土地訛り

早いとこ海に着きたい汚染水

ふる里は都心 一生土知らず

政と官 百鬼夜行の情けなさ

岸和田市 寺田 甚一

お若いと言われ恥じ入ることばかり
さりげないたわり胸を打つ落ち目
三面は気が重くなる記事ばかり
盾になり虎の威も借る秘書の役
嫌煙権 喫煙党を押しつける

岸和田市 長谷川 呂万

ウエディングドレスで騙す派手な過去
喉渇く時には邪魔な茶の作法
麻原を裁いてみたい正義感
雑草の芽にも如雨露の孫娘
庭の花剪つて隣でティータイム

富田林市 片岡 智恵子

七冠の羽生 全身で歩を差しぬ
壊れそうな記憶ばかりを追いかける
子供らしい子供公園闊歩する
計報欄 身内の齢と比較する

露天風呂 仕合わせ満ちた熟女たち

河内長野市 井上 喜醉

信じたら真心大きく温かい
いい歳で負けず嫌いが顔へ出る
胃カメラへ老いの覚悟はさりげない
気休めの絵馬がストレス溜めていた
裏口で片棒担ぐ影法師

和泉市 西岡 洛醉

繕うてほめて余白の人生譜
振返る半生波瀾多過ぎて
脇役の妻せかせかとこまごまと
甲羅干し今日小春日の老いの徹
全力投球そんな昔を恋い昨今

和泉市 岡井 やすお

底返し母屋を狙う本土基地
寄合の多勢 無勢のピケに負け
選良もお役人には歯が立たず
五輪呼び赤字が出れば税がある
大阪は震度一さえ出ぬ楽土

大阪府 榎山 隆

三寒四温 灯油一かん買い足せり
一の矢は軽いジョークを塗っておく
若かった樺美智子が散った頃
父さんの会社業績いいらしい
さくら咲く誰か生まれて誰か死す

大阪府 八十田 洞庵

死んでまで比べられてる墓の嵩
病む柳友へ神の御加護を信じます
蛇行する大川だから多情です
御恩返しのもりで並ぶ献血車
口喧嘩していた将棋今日も来る

京都市 松川芳子

ふる里の銘菓に出会うおもてなし
自由とは背中合わせにある孤独
風向きが変り幸せつかめそう
孫が来る空気清浄機のように
見舞客相手に母はよく喋り

尼崎市 田中薫

にんげんの闇を湿らせ喉の穴
夕映えの地蔵の足にとんぼ生まれる
薄闇のエレベーターの黄水仙
西日のなかの耳よ菜の花漬に染まらんか
ユトリ口の壁 黒猫を生み落とす

尼崎市 春城 武庫坊

麻酔さめ心は風の中走る
鼻からの食事見ている寿司湯吞
入院で浮世の裏と横を見る
経は知らぬが祈る心は負けはせぬ
春の雪 亡母の眠りをさまたげぬ

尼崎市 春城 年代

日ざしうらうら人の命ははかれない
椿咲くきのうの寒さこともなげ
心さむざむ遠くで子猫鳴きやまず
深いところで許していない日が続く
春の彼岸のお墓まいりも旅の内

伊丹市 山崎君子

礼詣り少女を包む白い彩
今日の主役あかいベストがよく似合う
流しびな思いそれぞれ波にのる
お下がりはまだまだ合わぬ新学期
わだかまり解けゆくように茶の香り

西宮市 門谷たず子

風化したいくさにグアムの海碧し
若さとはブランコ天に届くまで
風邪に寝て老いの迷路をゆき戻り
喜怒哀楽もうすれだんだん枯れる葦
雲は流れて子と住む家のでき上がり

西宮市 久保まさお

衣食住あなた委せて入院中
邪念の波寄せては返す手術台
点滴にいのち預けて夜おぼろ
口笛も何日振りぞ春の音
病友の退院聞けず桜散る

西宮市 亀岡哲子

乗り遅れ立ち食い蕎麦の暖かさ
サラブレッドが老いて戻って来た原野
一億の日本人と言うコピー
追悼展 遺作に炎えているいのち
末っ子がいつか飲んべうになって春

西宮市 西口 いわゑ

河川敷 誰かに似てる石の顔

耐えてきたことには触れず茶をいれる

落日へ無欲になっていくいのち

人間の嵐をよそに梅香る

コーヒーを飲んでるうちに気がほどけ

西宮市 秋元 てる

雪残る故郷へ急ぐ老姉妹

軒のつらら熱いお茶でも入れましよう

気まぐれな親孝行について行く

強がりと言わず戴く三分粥

新築の主は八十路の古い親友

西宮市 池田 善守

娘には厳しいしつけ三枚目

リンゴ飴 子等に買う振りして求め

紙コップ検診時にも世話になり

還暦二歳 川柳二歳 道はるか

遅れをとり食卓の上なにもなし

西宮市 刈田 泰司

一筆に父の心があり余る

父親が出ると話の腰が折れ

放置でも許せる孫の三輪車

待つことが嫌いな男待っている

定年は企業戦士の終戦日

西宮市 林 はつ絵

叱ってもうれしがられている齢で

この強情ルーツは吾とわかる孫

浮かぬ日の夕餉の前の酒すこし

押しつけの筋書き通りいくものか

天狗さんも転んでからは仲間入り

宝塚市 丸山 よし津

先祖との会話楽しむ祖母の部屋

知った人だから入れます募金箱

利点見つけ賢く生きる仮設の灯

パチンコ屋 朝からお金食べている

虚と実のはざままで揺れて生きている

宝塚市 吉田 笑女

小きざみに近づく春を待ちこがれ

亡き母の年へ近づく八十路坂

八十歳しみじみ過去を振り返り

八十を迎えて残った歯は四本

長男につんでもらった足の爪

宝塚市 中田 純次

昇進に遅れたおかげ足をを知り

遅まきに始めた趣味の過熱さみ

お通夜に近所の顔と初対面

下戸ならぬ男に生まれ粋を知り

いつの世も笑い止まらぬ人がある

宝塚市 嵯峨根 保子

子の熱で喧嘩どころじゃなくなつた
仲直りしたそんな酒ついでくれ
尾を振って犬が仲裁してくれる
医者を出す薬のわかる本を買う
いつからかルーズになつた三面鏡

芦屋市 黒田 能子

つかのまの天女になつて春を舞う
きつかけは気まぐれでしたこのご縁
用もないのに急いで御飯食べている
平成も八年孫も一年生
震災忌へリコプターが飛んでいる

川西市 松本 ただし

民酔っていつも油揚げさらわれる
矢印に抵抗しないことと決め
うたた寝で羽化登仙のかたつむり
住専をやジ馬根性で見てるだけ
戦後また復活しました負けいくさ

加古川市 吐田 公一

ありがたいと思うが妻にはてれくさい
菖蒲湯につかり男はロマン追う
年金の行くあてもなし連休日
都落ち住めば都のくらし向き
新築へ近所の強い風当り

京都府 稲葉 冬葉

大事件起きて遺書にもなる日記
禁煙を殊更言うて吸うてはる
にんまりと茶柱を取るおばあさん
半歩出る勇氣がほしい白い旅
添え箸を使うあなたが憎らしい

奈良市 宮口 笛生

暖房へ騙され抜いた冬苺
飽食のゴミヘカラスが増えてくる
石焼き芋の匂いが走る夕の町
初掘りの筍春の匂い持ち
鶯の初鳴き梅の花終る

奈良市 天正 千梢

藪椿いち輪咲いてうれしがり
岩船寺一願不動へ深ぶかと
古稀すぎていまだ牧水恋うている
アイリス満開 何かいいことありそうな
胃袋は銘がら言わず受付ける

奈良市 米田 恭昌

鬼伝説ひと役かつた村起こし
ごまをする部下と飲みたい夜もある
本当になりそうな気で書けぬ遺書
リハビリ室 子供の好きな器具ばかり
牽引の首吊り加減が心地よし

大和高田市 岸 本 豊平次

一件落着 腹がへり眠くなり

堪忍袋あれこれ詰めて古希の顔

新聞に老人とあり同じ歳

百までをまず五年をと叔父卒寿

梅だより寒の戻りで足踏みし

大和郡山市 榊 原 雪 心

神棚に供えた欲の宝くじ

深々と頭下げても罪は罪

頼みごと奥の座敷を用意する

焼鳥屋 煙の中にグチが舞う

北庭で達観している沈丁花

奈良県 上 田 翠 光

いつの間にやら平均寿命超えていた

何くそと思えど五体ままならず

そう遠くはないぞ人間の店じまい

靈魂だなんて未練だなどと思う

俺の心臓時々一服してるらし

和歌山市 堀 端 三 男

銚子一本 主治医の許可がやっとなり

常連が揃うと囲む卓がある

気配りが過ぎてても尻が落ち着かぬ

妥協点見えたところでお茶にする

常識を守りあくせくしています

和歌山市 福 本 英 子

リング剥く昨日のことに触れず剥く

目覚しと地震が春を揺り起こす

三月は子を迎えたり送ったり

紅白の椿が咲いた合格だ

三浪に漸く揃うだるまの瞳

和歌山市 山 田 高 夫

いい勉強したと男は傷を舐め

呑めもせぬ酒でむせてる日の渴き

小賢しい猿が人科の中に群れ

風向きで変る男の生き上手

悟り切る老いには夢の無い話

和歌山市 桜 井 千 秀

ほろほろ鳩よ芽吹く桜へ来て止まれ

利口振りすぎたばかりのこの吐息

蜘蛛の糸もつれています阿弥陀さま

ポカポカ陽気 雪崩予報を聞きながら

この位置は隠れる場所がないらしい

和歌山市 木 本 朱 夏

乳輪の若さは梅の蕾ほど

神の目に遠いところで火を盗む

橋半ば真つ赤な櫛を投げ捨てる

伝えてはならぬ言葉の水に書く

奪われた時間の跡へ木を植える

和歌山市 青枝鉄治

片腕と言われた部下に整理され
くせ字だがワープロよりは情がある
政変の波をかぶった小商人
化粧した男の説いている平和
政治家の命かぎりを聞き飽きる

和歌山市 北山好笑

相談もなく増えるのは年ばかり
他愛ない話へ他愛なく答え
物差しを上手に使うお付き合い
ほっとする我が家があつて旅疲れ
下手な趣味それでも友の数が増え

和歌山市 細川稚代

益虫も害虫も来て実が熟れる
風邪の床 嫁との絆七分粥
一汁三菜少し重荷になってくる
旧友の情けに溶ける志野茶碗
順不同 闇がだんだん深くなる

和歌山市 池永正雄

道しるべ右も左も仮名のみち
今の世に起床ラッパも懐かしい
ボロボロになつても辞書は勤められ
星群れる砂場に砂のある如く
蛇口からビール出る国なからうか

和歌山市 宮口克子

輪の中に門外漢も混じつて
勘違いしていませんかいうてみる
ハンサムも良いが味ある顔がよい
見極めが大事 悩みを増やさない
喝采の拍手に酔うた有頂天

和歌山市 田中輝子

性善説 薔薇はゆっくり開くもの
潔く子を離す日よ蒼天よ
包み紙の中で湿っていた花火
躊躇いの三三九度でないように
夕陽へとわが前身を問い詰める

和歌山市 福井桂香

無雑作に大根ならべている安堵
微笑みを返して春の水掬う
放尿という特権をもつ男の子
お世辞いう舌が案外荒れている
がやがやと策いっぱいの春野菜

和歌山市 堀畑靖子

ひゅうひゅうと風に拉致されそうな丘
癖のある私を君はどう捌く
カンコーヒー飲み人生を話すもよし
まん中に無視したくても君がいる
ではまたと私無用の君になる

和歌山市 田 中 み ね

夫以外の孫に唇盗まれる

それよそれ妻よお前の悪い癖

残業の夫待つ間の中華まん

私なんどに愚痴をこぼしてくださるか

止めないで考えあぐね決めた事

和歌山市 玉 置 当 代

わらべ唄タイムスリップしてしまふ

花咲いて猫もわたしも忙しい

ファックスとコピーに刺激受けた脳

分裂の危機が迫った大家族

堪えていれば平和 堪えられない孤独

和歌山県 西 口 忠 雄

おしゃれする年でないからお洒落する

なにごとくも無かったように客迎え

尻に敷く夫の汗で遊んでる

充電が済んだらあんな何するの

目離しのできぬ夫の軽い下駄

岡山市 時 末 一 灯

遊ぶ子の入日に染まるを見てなごみ

正直は美德 そっくり死語となり

辻つまを合わせるための無口かも

平坦な暮らしになってから萎み

頑張った漢字主義だがカナにかえ

岡山市 川 端 柳 子

側に居るだけでいいのと妻が言う

ニッコリと夢の碎けた話など

チューリップ心のふるさと抱きしめて

紅白のリボンで結んでいる決意

ややこしい話の満ちる胸一つ

倉敷市 田 辺 灸 六

爪先が向いた故郷に向いた

進学の子には聞かせぬ銭の音

軽い気で読むが縁ない億の金

氷山が漂う水面下の野心

跳び歩く住所不定のあぶく銭

倉敷市 小 野 克 枝

聴く耳と忘れる耳は仲が良い

指定席に乗っても同じ駅に着く

思い出はみな美しい罪までも

飾るものひとつも無くて母の道

惜春へ長い手紙を書き終える

笠岡市 松 本 忠 三

田舎バスちよつと小用のおばあさん

市議選に隣近所が立候補

気をもんではかり人ごとだというに

バス停に東京弁が入り乱れ

ばあちゃんは野党じいちゃんだけ与党

洗いざらしの作務衣の藍を信じ切る
岡山県 小林 妻子

学生服隙間こぼるる社会人

待ってろと言えぬ仏に灯を入れる

忘れても想うもならず忌がめぐる

老い二人寝物語が金に触れ

岡山県 二宗 吟平

改選期留守に名刺が置いてある

よい事がありそう日の出久しぶり

行政の役場も訪うて身の回り

確申でまだまだ追加老いの身へ

わが部屋で一輪ざしが笑みはじめ

岡山県 江口 有一朗

影売った男ひなたが歩けない

イチローも私も子の年変わりやなきや

神宿る熊野の国の大自然

ふるさとの河の香鮭は忘れない

同じ場に二度立ち旅の厚み知る

岡山県 荻野 鮫虎狼

秘書哀歌 又々被る汚職の火

辣韭の美味さを褒める場所がない

禪の白さ男が見直され

独り者 猫が遊びに来てくれる

パトロンを帰し女のコップ酒

一番好きな人に新茶の蓋をあけ
岡山県 山本 玉恵

母と子をつなぐ小さな鍵の鈴

弾ませた毬が炎を追い風を呼び

夕やけこやけあした逢う日の髪を梳く

冬の絵に朱一筆の贅を置く

岡山県 矢内 寿恵子

「大地の子」この感激よ永遠に

失恋の重さを抱いている乳房

同じ絵をかける夫婦になるように

浮草はうき草なりにあるロマン

振り向かぬ覚悟の背に炎えるもの

岡山県 岩道 博友

月変り掛軸かえれぬ臍鞘炎

人間味つまづく石へ水を打つ

ネクタイを結ぶ日もなく粗大ゴミ

畑へも井戸掘り野菜の水を汲む

年が増え無駄な宗教まで拝み

岡山県 福原 辰江

石橋を叩けば老父の声になる

銭のない暮しの中の人間味

水枕とれこんなさやかな朝もある

農捨てる峠幾度も振り返り

漂流の果てに二人の橋がある

岡山県 福原悦子

根回しが過ぎて反旗の風にあう
生き上手 浮いた話は聞き流す
未完の絵 夫婦やりくり色を塗る
味噌汁と雑魚で足りてる老夫婦
残照のいのち二人で傘をさす

岡山県 大石あすなろ

第二章午後の口紅ひき直す
咲き競う花から学ぶ散る輪廻
ペアルック仲のよいのを見せつける
裸一貫 苦勞さばいた一代記
平等に老いてゆきます愚者賢者

広島市 森田文

得したような損したようなささげよ
人は誰も誇るものありよい返事
今ならば別姓にする一代記
陽炎の向こうの神へ祈るくせ
ミドリ十字なとききれいな語呂合せ

廿日市 林野甦光

家の前のポストが叱る筆不精
一人抜き二人抜きする風の足
苗の出来日の出日の入り手を合わす
五月雨のぼそぼそ小犬宿がない
税金を食う銀行もある日本

竹原市 小島蘭幸

飲んでゐる妻から電話かららない
中三も高二もほどに遊ぶ
四十八歳の亡父が笑っている写真
ホワイトデー妻が選んだものにする
父の喉仏と僕の喉仏

竹原市 岩本笑子

ナース誕生 長女が少し大人めく
カーネーション卒業式は晴れている
びっくりびっくりとても静かな雪の朝
無農薬キュウリは曲がるものなんだ
メロン切る少しリッチに朝を出る

竹原市 時広一路

ボランティア愛を集めて輪を広げ
腹決めてから真直ぐの線が引け
口下手な私に出来る聞き上手
少しだが土の温みを知る我が家
組に笑われそうな僕の音

宇部市 平田実男

スタートは義理チョコだった君と僕
親のために流さぬ汗を子へ流し
自分史へひととき光る路郎賞
一〇〇点はない人生も川柳も
嘘のないCM売れ行きが伸びず

下関市 石川 侃流洞

八十を母 老人と見てくれず

指示通りよきに計らい叱られる

八百屋もう歳時記昔の物語

八ツ手網 春をキラキラ掬い上げ

ひとり酌む夕餉テレビとの対話

鳥取市 両川 洋々

履歷書は達筆しかし職がない

禅譲と言う名のたらい回しだな

りストラの美名で僕の首を切り

やけ酒を総理も欲しい日がづく

血の通う政治に遠く税が消え

鳥取市 岩原 喬水

じつくりと見れば双子の違い見え

鬼は外 自分の鬼は追い出せぬ

豆を煮るコツは祖母にはかなわない

人生を飾る最後が難しい

魔女に会い老いのリズムを狂わされ

鳥取市 西村 黙光

表札が気に入らないか福の神

お芝居を演じ続けた肩の凝り

ワンカップ臆病風を吹き飛ばす

世の奢り神に気合を入れられる

おでん屋で夜勤していた事件記者

鳥取市 春木 圭一郎

休肝日前夜は酒量つい増える

窓際にそこしか見えぬ赤い花

七人の敵から守る妻がいる

ポケベルが秘密の場所へついでくる

肩書はないが一目置かれだす

鳥取市 美田 旋風

咲く花へすかさず蝶のラブコール

脱皮まで齧るわが家の青い虫

過熱した土地を冷やしに寒気団

絵の個展すごい売値を見て歩く

春一番笑顔をくれた桜餅

倉吉市 野中 御前

万歩計 雨だ雪だと怠けだす

老人会 他人の齢をききたがる

雛の瞳に地獄極楽まだ見えぬ

熨斗袋嵩み年金おびえだす

雨の日はことば積んだり崩したり

倉吉市 米田 幸子

鉾先を見事にかわす永田町

木を伐ると無性に胸が熱くなる

狙われるほどのお金は持たぬ主義

年輪を刻んだ父のいい寝顔

若い日の苦い思いをばねに翔ぶ

倉吉市 野口節子

めつきりと減った小言が気にかかる
笑う日を信じて積木積んでいる
寝顔には素直に言える有難う
好きらしい視線がいつも追って来る
深読みが出来なくなった脳のしわ

倉吉市 淡路ゆり子

今日在りて秋刀魚二本の煙立つ
貸した金すんなり戻ることはない
うまい米作って農家生き残る
ひとりでは旅の出来ない歳になり
糊のきいた浴衣で踊る心地よさ

倉吉市 松本よしえ

餡パンですますひとりの昼ごはん
鐘楼に來てから死んだぎりぎりす
岩田帯 見事に神を宿らせる
川下でまだ待っているおばあさん
隠居所と別々に猫飼っている

米子市 林荒介

折鶴の数だけ春を裏返す
梅の花 桃の花から熱くなる
ふる里に帰って来ないブーメラン
血の音を確かめたくて手を握る
蠟燭の尽きたあたりの仏さま

米子市 林瑞枝

忠霊塔に雨降るあにのハーモニカ
渦をめぐけて飛び込む河童に育て
記憶する左脳で桑の実が熟す
ごほうびを上げたい十指撫でている
一代で築いた財だ使わねば

米子市 田中亜弥

つくろった命を今も大切に
化けそこねいつも尻尾を振っている
蓋の隙間で息をしながら生きている
いつもの位置で仏に香をあげている
橋の真ん中に神だけ通る道がある

米子市 石垣花子

弟が背伸びしていた背くらべ
先生の笛にたてつく子供達
腹割ってほろにがさだけ胃にたまり
バックミラーで客筋さつと読むタクシー
タクシーを足に老母の寺参り

米子市 青戸田鶴

捨身とも思える芸の冬ばたん
反骨の弓はいつでも折れやすい
干拓へ神も反対されている
今になり司馬遼太郎むさぼって
目を拭いて本当のものの追いかける

米子市 光井玲子
手毬ころころ独占はもう出来ぬ

矢のつきた弓が一念發起する

喝采はないが一芸誇りとす

亡兄しのぶわたしの中のセレナーデ

灰捨てた火鉢どっしり木を育て

米子市 野坂なみ

春の満ち潮 五弁の花はいまひらく（孫就職）

ゆたかさに倦むとやっぱりつけがくる

いつもトツプ 次第に深くなる孤独

言い残すことはないかで合点し

最後の芸に三重丸をくださいね

米子市 金山夕子

百の学びも百の遊びも本気なり

渦巻きの春一番がやってきた

渦潮に沈めるハ行ラ行・ン

仏間を独り占めしてラジオ鳴っている

ポップコーンのように咲いてくる庭の梅

米子市 中井ゆき

緑蔭で催眠術をかけられた

スイートピー仏さんにも春が来た

とりまきの仏もつれず御身独り

潮騒のおく慟哭が消えてない

生きざまがそのまま芸になる人だ

鳥取県 松下たつみ
座右にする言葉がほしい怠け癖

エチケツト心得不味いお茶となる

唇を噛んで自分が許せない

出世には遠い男の文学論

流れながれて滝に打たれる石となる

鳥取県 土橋 螢

別々に寝る猫好きと猫ざらい

つんつんと妬んで電話かけてくる

この道を歩くと獣くさくなる

仲なおりして鶯を聞いている

極楽へ行く年金に熨斗つけて

鳥取県 土橋 はるお

葬式に演歌はなばなく流す

ねずみ捕る準備しているお巡りさん

野の花に心を触れる手を触れる

盛り皿に花一輪をあしらひぬ

居酒屋の前で雪おんなが招く

鳥取県 石谷 美恵子

一輪で足るお茶室のやぶ椿

飽食の世に別々の飢えをもち

許すのも許せないのも愛の果て

二次会の舌が牛耳る社の人事

人間のエゴへ天災活を入れ

鳥取県 幸 家 單 車

高飛車なお礼 親切無駄になる
居住権ねずみが主張して困る
札状は必ず自書でしたためる
その先は読めぬが今日は生きている
風の糸切れて他国の空に飛ぶ

鳥取県 故江 原 とみお

雪しんしん罪をかぞえて寝てしまふ
其処で笑うと石垣がくずれだす
大根花咲いた母の忌が近い
農に嫁し強かに打つ牛の尻
火の見る櫓にのぼったことがない

鳥取県 新 家 完 司

治る人なおらないひと五人部屋
決戦の朝というのに春うらら
トンネルも橋も急いで通るべし
五百円玉が小銭であるものか
年齢に合わせた柄で老けて行く

鳥取県 黒 田 くに子

ひな祭り少女の夢は他愛なし
新刊開く溢れるものを抱きしめて
何だつてやはり美人の方が良い
運不運どうあろうとも歳は取り
音もなく若さが逃げる走馬灯

鳥取県 西 原 艶 子

悶々の谷間を抜ける汽車の旅
哀しみは溶けて流れてしまつたよ
海を見て素直に戻ることでもでき
逢えた日をしあわせだった日としるす
負けぬようこころに魔法かけている

鳥取県 石 尾 かつ乃

底冷えへ春を匂わす露のとう
ランドセル菜の花なびく道を背に
一億の中の一人へ愛を盛る
ライバルの素顔に何故か血が騒ぐ
腕白坊主 祖母を操るのがうまい

鳥取県 田 村 きみ子

嘘はつけない好きなトマトが熟れてきた
コーヒータム少し贅沢しています
ラクダに乗って新幹線を見に行こう
かくれんぼ鬼に一言もの申す
オンザロック マリアのような妻と飲む

鳥取県 林 露 杖

瞬間を弾んで消える牡丹雪
眼を賜う白梅の白神々し
臥に慣れて不眠とあそぶ午前二時
醒めやらぬ脳裡に綴る私小説
残された時の限りを惟みる

鳥取県 西川 和子

四十年操っている泥の舟

若いとも齢とも言えぬ年まわり

あの頃にタイムスリップする集い

おめかしの袂が垣にひっかかり

思いつきり息をしてます五月晴

鳥取県 羽津川 公乃

細胞が若いと医者のお墨付き

竹割ったような姉さん女房です

二次会は手枷足枷解き放つ

膳本にたった十日を生きた叔母

八十も五十も混じる従兄弟会

鳥取県 岩崎 みさ江

反省のポーズで日向ぼこをする

明日のめざめを信じて眠る袖だたみ

ふるさとの良さ確かめて旅終る

目出し帽ちよつとふざけてみたくなる

息呑んでただ落陽と向かい合う

鳥取県 乾 隆風

ややこしい釦は押さぬほうが良い

仕事はとろいが食指はよく動く

明けの日を寝釈迦にしちゃう花見酒

苦も楽もかみしめている二重顎

もうひとりの俺は悪人だと想う

松江市 舟木 与根一

乾杯と万歳で面子立てておく

五十年 妻よお前は強かった

摘要欄ばかり続いている日記

犬猫を飼い付き合いが悪くなる

一人では無理でいじめの側に居る

出雲市 富田 蘭水

おしどりが不思議と心なぐさめる

仏滅も大安もない我が暦

ライバルと思う瞬間負けていた

疲れなど一つも出ない初遍路

ばか陽気 花と私を狂わせる

出雲市 小玉 満江

春風も一緒に背負うてわかめ売り

田が売れて大きな店が出る噂

愛嬌のある赤ちゃんを抱っこする

春うらら笛に踊ったハイヒール

手から手へほらつくしんぼ見つけたよ

出雲市 石倉 芙佐子

幻の武将も夢に花吹雪

盃に浮くひとひらの潔し

つと立って泪拭いてた遠い人

七十年恩師も句誌も若かりし

飄々の後ろ姿を見て育ち

出雲市 板垣夢醉

歟の柄を握って父母は過疎守り

先生と言われて てるほどの知恵

女です貴方に負けたふりで添い

栄転か左遷か春の風一番

舌出していつとき我慢しておこう

出雲市 小白金 房子

歟の柄もしかと陽春野良に立つ

茶筌から春がこぼれるいい話

ご苦労さん今日の疲れをほぐすお茶

腹割って話せば心満つ笑顔

石仏の顔へしっとり露やどる

出雲市 園山 多賀子

清濁を糺す眼鏡を拭いておく

飢える日にふとやすらぎの風花舞う

コーヒーにするかと婦随ティータイム

風船もゆらゆらゆらと親離れ

聞き飽きた愚痴さりながらさりながら

出雲市 吉岡 きみえ

椿ぼとり別れ三月美しい

便りつく春もうららとなる頃に

慰めの香りをくれる沈丁花

帰したくない人へぬるめの燭にする

あの日から微熱がつづく午後三時

出雲市 竹治 ちかし

生きるのも死ぬのも楽でない浮世

五十年生きてますます只の人

人間という名で無理をして生きる

子が帰る日に丸があるカレンダー

金貯める本を女房が読んでいる

出雲市 岸 桂子

急行に抜かれる駅に椿咲く

着いたかと問えば食べたときの子の受話器

子を褒める親馬鹿でいい子をほめる

旅館から見る漁火は暮しの灯

未練断つ音で車のドアを閉め

島根県 堀江 正朗

いただいた歳に連れ添う物忘れ

いらいらを声には出さぬ腹の中

うたた寝の夢は桜か盃か

眠ってた山が煙を吐きはじめ

風うなる風と風との争いか

島根県 堀江 芳子

水の旅にんげんの旅汚さずに

年齢と思わぬ鏡春ですわね

理屈には勝てない孫よ女子大生

すやすやと眠れば八十五も童

六十年戦盲さくらもう薄れ

島根県 小砂白汀

脳味噌の垢を落とせと雪給う
あまりにもおおか過ぎても頼りなし
いい汗を流そう泪にならぬよう
目がさめてどこかが痛む生きているぞ
病院も営業クランケ放さない

島根県 西村早苗

亡母の忌の法事まんじゅは母の味
中腰で聞かせわしさも年度末
さぬきうどんするするうまい音たてる
ダンスしながらひそひそ話気にかかる
花が散ったので来なくていいと言う

島根県 榑原秀子

美しい夕陽が見たい長い冬
シェーバーの充電だけはしたものの
大切な想いこわしにきた霰
蛍の光きくと今でもじんとする

三月の別れ拍手で送る人

島根県 佐々木鳳笙

わだかまりもつららもとけた里の昼
老僧の凡に徹している非凡
回診へ悟ってみたり愚痴ったり（入院生活）
当り前でない食うことも寝ることも
生かされている幸せの六度五分

香川県 工藤吟笑

傘寿まで後一息と夢を追う
風垣も除けて牡丹に春がくる
山男 老母の命まで削る
切り札を持つと大きな事を言う
土下座して当選すればソレッキリ

香川県 木村あきら

乳牛が第九を聞いている長閑
時どきは領空侵犯の鯉のぼり
適当にサボって今日も陽が墜ちる
陳情に押しの利く顔持つてゆく
脱線をするとかケットベルが鳴る

香川県 成重放任

リハビリのつもりで解かすもつれ糸
争いも愛の証を見て笑う
セールの話術に年金見え隠れ
流し目に眠った心動かされ
六十路坂 姑に顔まで似て来たか

香川県 池内かおり

塗り替えた住居にそぐわないわたし
温泉で倒れた姿考える
理不尽な退職金にお仕置を
形勢が変わると空気にまで動く
夕食は若尾文子と同じ五時

香川県 山地 マツエ

掬っても掬っても愛がこぼれて行く小指

みかん盛る一人暮しが淋しくて

黙秘権ただ今夫権奪回中

床の間で見得を切ってる金太郎

一本の綱を渡っている夫婦

松山市 宮尾 みのり

雑音の中の真意に耳澄ます

華やかに女性上位のスキヤンダル

登ったり降りたり歩いたり東京

大東京の隅にお江戸がまだ残り

片方がずしりと重い嫁の肩

松山市 丹下 美津子

母の庭ラツパ水仙春を告げ

牧場に春 牛乳好きな嫁が来る

踏み出した一步無限の夢を追う

この一字取るとすつきり五七五

あれこれと母がしたよう娘に持たせ

今治市 越智 一水

年寄りの知恵ははつきり言い切らず

金よりも徳積めと言う庭の石

世のしくみ恨んで父の酔いを知る

笑っても母の疲れへ老いを見る

雑草は肥料を口にせずふとり

西条市 片上 明水

忘れものしたのか蝶が舞戻る

神仏へ寄付が目立ってから弱り

職退いて一つずつ減る掛時計

散歩路一服させる花が咲く

仏壇に香りとられた桜餅

高知県 北川 竹萌

無一物 語らぬ義理の保証印

明日里へ車きれいに拭いて待つ

鏡川涸れて往き来の道ができ

散歩道 側へ善意の花植える

友と明日契る別れへ夕茜

高知県 赤川 菊野

人ひとり送って元の一人の灯

頬ずりの記憶へ父の忌が巡る

白昼夢さめて仏間の灯と語る

中国で日本の艶歌聞くも秋

まっすぐに歩くと運がよけてゆく

北九州市 梅田 宣司

伴走の妻と朱孟重ね合う(金婚)

その急所 門外漢が突いてくる

玄海産と箔つけられている鰯

レントゲン荒れた昔を見逃さぬ

福建省がどこかも知らずウーロン茶

福岡県 横地 東川

男叩くドラマ多いが真似るなよ

腕組んで頷くもありハイヒール

これも運 万人目の入場賞

仮名氾濫ふりがな漢字つけてある

道問いに寄りしスタンド腰軽く

唐津市 久保 正 剣

棘のない薔薇が咲いてる禁猟区

素うどんに歓迎される唄がない

弁護士がズシンと包む起訴資料

狂態の限りを尽す行政府

手に負えぬ女の才と増殖炉

唐津市 仁部 四郎

日本語の複雑怪奇辞令読む

少国民でした嫌いなものがない

片方は待つたように判を押し

辞書にない意味で政治が語られる

政治家が喋るとできる鉋屑

唐津市 浜本 ちよ

たまに街へ出るとなるほどお上りさん

ひな飾り子の弥栄をこいねごう

なつかしいポストがロビーにあるホテル

元気な口だけとなる老い衰し

小さい池 月と松とを遊ばせる

弘前市 蒔苗 果林

青年の雰囲気ちよつとまた冗句

春颯爽モダンな老いと何処へ行く

見詰めるとりんご切る枝名乗り出る

お腹に掌組めばお迎え来て眠る

十和田市 阿部 進

ライバルに一泡吹かせ満ち足りる

珍客へ大吟醸の封を切る

近づけば又遠くなる虹の橋

国文学卒と思えぬ誤字脱字

富士宮市 渥美 弧秀

裏話噂となった酒の宴

抱かれし妻の寝息のしみじみと

つじつまを合わせた嘘がはね返り

富士の詩 夫婦で歌う風呂上がり

大阪市 神夏 磯典子

露のとう予感に胸がふくらんで

チューリップ話を聞いてくれますか

紙コップ幸せですね桜浮く

このままの私を磨くひと日ずつ 大阪市 板東 倫子

夢にさえて出て来ぬ人の墓まいり

善人に曖昧模糊と言う特技

百日の無常求めて船の旅(飛鳥クルージング 2句)

生かされた幸せ七つの海を訪う

大阪市 清水利武

車椅子春の陽射しが眩しすぎ
あの頃は一升酒も飲んだのに
今はもう二合でダウンするお年
タイガース オープン戦は強かった

大阪市 河井庸佑

外出の予定あふれている五月
毎日が日曜 曜日取り違え
連休が過ぎて出かける旅プラン
自己主張覚悟している風当り

大阪市 寺井東雲

テレビセット裏は見せないベニヤ板
安売りを見るや自転車飛ばして
医者病氣 患者に優しい言葉かけ
夕暮に渚に撒いたアサリ貝

大阪市 松尾柳右子

温泉に風船浮かぶ母の胸
食いつかぬ魚あきらめ貝探し
磯のカニかくれんぼして遊ばせる
雪山の誇らしく見ゆ五月晴れ

大阪市 藤田頂留子

このままですまぬ鬼のすてせりふ
そよ風のタクトへ麦のシンフォニー
すわり込むだっ子議員どうする気
骨だよと言えばやる気になり出した

大阪市 清水絹子

エプロンを夫に渡し仲直り
老姉妹 昨日はきのう仲直り
波風をよそに独りの風呂かげん
思い切りおしるこ二杯寡婦の意地

大阪市 川端一步

定年に銀行さんが来てくれず
交友録ずっしり重い退職日
缶ポツリ若者だろうと決めている
スーパ―も駅も住専署名立っている

堺市 黒田真砂

風の音にも彩があるよう木々ゆれる
孫に足ふます快感日課とし
昨日までの私と違う冬銀河
音立てて階段上る反抗期

堺市 一瀬福一

こたつ出すと昔話がしたくなる
意地張って見てもこの人汗がながい
チャンスかも知れぬ波紋の中にいる
対決はしても友情の灯は消さぬ

堺市 近藤豊子

樟脳のおいほのかな雛かざる
ひとをまつ犬のまなざし静かなり
終点の海おもいつつ途中下車
髪うすれしジーン・ハックマンの微笑かな

高石市 浅野 房子

歯科で会い整骨院で会う二人
片方を立て片方に疎まれる
捨てられていた千羽鶴見しまう
一週間ひとりの夜を咳止まぬ

豊中市 吉田 あずき

新幹線 春めく窓と雪の窓
着ぶくれて老いの厚みの鈍い音
ひよっとして生まれ変わったカラスかも
お互いを知らず双子の目覚めいる

豊中市 江口 明光

暖房のコンロの湯気で気を沈め
無為無策 春夏秋冬かけ抜ける
絵に書いた倅せ色があせてくる
花びらの温もり探すてんとう虫

豊中市 月原 方郎

菜の花に司馬の遺影も御満悦
ゆっくりと小春日和の車椅子
高校の孫に漱石読ませたい
一輪の紅梅部屋を暖める

豊中市 稲葉 眞郎

耳も手もつけた子供の雪達磨
雛並べ白酒酌むは部屋の隅
口先だけお見舞を言う花粉症
検討すると言うて事が済む役所

豊中市 松岡 久留美

逝く時は窓辺に樹氷咲いた朝
澄んだ空 新緑映えて五月晴れ
様々な自然美術を生む風化
老いてなお天手古舞の日々楽し

池田市 岡本 吉太郎

嫁取らず気ままに過ぎ早や白髪
筋書きの通りに行き過ぎこわくなる
下積みで人を愛して光る女
ローン苦で徳政実施の夢を見る

吹田市 栗谷 春子

散らかした跡もの言いながら片づける
もひと冬越さねば着かぬ春の岸
八十の涙ぶくろも穴があく
ことの外 桜をめでし人想う

吹田市 山本 希久子

手の中の春は無邪気に逃げてゆく
春を迎えにスキップをする孫の靴
夫婦茶碗のひびを残して伸直り
パソコンの世となりぬべしリング割く

摂津市 井上 源一

感性かライバルひよいとジャンプする
花の下 仲も不仲も輪に溶ける
九死一生 神の下さるプログラム
万歩計 手頃な孫と手をつなぐ

茨木市 島 元 ふ み

三従の妻もこの頃鉾を向け

三日坊主はもう許されぬ余命表

亡母の顔さだかに描けぬほどに生き

五十年 染まり合つて共白髪

守口市 結 城 君 子

ドラエモン見てます血圧ひくいです

伊勢えびも腰を伸ばしてみたかろう

柳の芽 加茂の河原はふたりづれ

長岡輝子の語りへとりこになる夕べ

寝屋川市 江 口 度

乾布摩擦そろそろ終る枯木立

室咲きの花と真冬の水着ショー

コンニャクにファイトを出せと言つたとて

二百海哩 竹島あたりばかりとく

寝屋川市 堀 江 光 子

とてもよい旅立ちらしい紅い服

梅見頃人あちこちに音もなし

梅林の酒控えめの酔い心地

宰相の滲む孤独に遭う日記

寝屋川市 平 松 かすみ

開花してウォーキングシューズが売れている

プランター一列にして日向ぼこ

ひよっこりと逢つたと書いておく日記

十年続く月一回のボランティア(老人ホーム)

寝屋川市 北 岡 波留吉

勇気ある次男 山田を守り抜く

友の激励背にして学ぶ車椅子

幸福ヘレール敷くのは若い内

両親を次男に任せそれっきり

枚方市 二 宮 山 久

男五十歳そろそろと墓の事

負け犬になつてがまんの日を過ごす

無人駅 春のいぶきの里帰り

出世などしないで器用な日曜日

枚方市 前 たもつ

正論を吐いて大臣誉められる

遅すぎる結婚などはありません

迷うことなし自分の好きな物贈る

天寿全う葬儀の列は告げている

東大阪市 指 宿 千枝子

桃の花で祝う私の誕生日

白椿好きな女優にどこか似て

ふるさとも薄紫に暮れる頃

変装を楽しむように着る帽子

藤井寺市 田 中 透 太

ひと筋の道にもあつた落し穴

控え目に見えても芯の強い女

台本の通りに言えぬ捨て台詞

男一人育てるものに植木鉢

藤井寺市 高田 美代子

河内長野市 植村 喜代

グラスの底に冬が残っている少し
凶ばかり引くおみくじを凝りもせず
わたくしの鬱にだあれも気付かない
椿がポトリポトリ高齢化が進む

羽曳野市 酒井 一 壺

仲直りしてから彼が見えて来る
お互いに疲れましたと仲直り
ムルロアの叫びが知れぬ荒い波
波乱万丈したたか生きた顔の皺

岸和田市 島崎 富志子

背伸びした分だけ心追いつかず
老いてゆく少し孤独を友として
舌下錠くしくも姉妹のペンダント
孫が言う殺し文句をためる耳

岸和田市 藪野 けい子

納税がまともに出来ぬ住専処理
崩落の岩を発破が攻めあぐむ
採算をインターネットで売るイチゴ
国会にピケ元総理座りこみ

富田林市 松本 今日子

入学終え少女の髪にリボンつく
雑巾の細かい針目亡母のもの
引出しに出せない手紙二三通
片隅でお見合い話弾んでる

贅沢なこと何をするにもお湯を出し
やかんシンシン耳が少し遠くなる
更年期 女は寂しいものを抱き
まだ夢があります好きに生きたくて

神戸市 山口 美穂

仮設店舗は造花の桜で春を呼ぶ
仮設でも開店セール華やいで
人生の勲章 笑顔の深い皺
震災の教えほどほどでよい暮し

伊丹市 小熊 江美

次々と挑戦目ざし生きてます
北風が容赦なく吹く仮設宿
子の事になると父さん法螺を吹く
いたわりが本音に触れる事を避け

西宮市 菊池 トミエ

SLで行く気粉れな春の旅
梅咲いて野点のお茶に和む風
美術館 名画の前で小半時
長谷寺にはたんふくよか競い咲く

西宮市 山本 義子

震災後減った家財が増えはじめ
司馬史観お借りし春の野辺歩き
春彼岸 鳴戸の渦が大はしゃぎ
やせたなら買うと決めてる服がある

西宮市 牧 渕 富喜子

住み替えて落ち着かねばと灯をともし

ただ単に家並み変っただけだろか

法も水もほんのすき間を縫って行く

あきらめも一つの決意桜の季

宝塚市 上 田 佳 秋

ボタンづけ侘しい夜半と向かい合う

改札を抜けるとじわり罪と悔い

猫柳昂るわたし慰める

待合室尾鰭持寄りたむろする

相生市 中 塚 礎 石

ワープロの音が伝わる車椅子

一徹の涙を流すのは最後

震災へカンパだけでは救われず

お見舞いの後ろ姿に手を合わす

大和郡山市 坊 農 柳 弘

振り向けばそこは花舞う吉野山

自然破壊みどりの羽根が泣いている

涙目が可愛く光る花粉症

金時さん五十路初孫初節句

天理市 飯 田 昇

山陰の雪を肴に蟹づくし

降りしきる雪に一人映える梅

奥の奥見れば住専根が深い

悪乗りの与党の虚像見えてくる

奈良県 長谷川 春 蘭

せせらぎの弾む音待つ猫柳

芽柳の吹かるるままにある余生

結び目を解いて笑いの輪をつくる

爽やかな忠告だった痛かった

和歌山市 玉 井 豊 太

一寸した気配りなのに恥ずかしい

葉桜の頃もおんなじ樹の下で

コーヒーが冷めない内に彼が来る

うつつとうしい話が増えて憂き晴らし

和歌山市 山 口 三 千 子

船頭が多くて座礁ばかりする

砂吐けぬ貝は何時しか失語症

空白にした一刻を裏返す

あれこれの重荷に軋む処方箋

和歌山市 岩 本 美 智 子

夫病みわれまた病むもただ二人

腰痛度 孫の重さに比例して

家族史の一齣飾る初節句

寒尻りお水とりの火が爆ぜる

和歌山県 小 倉 ア サ

荷を降ろす日の雑踏の温かさ

万葉と芭蕉に打たれ背伸びする

がたびしが来る頃城も私も

喧嘩には遠い互いのスケジュール

岡山市 井上柳五郎

軍隊で覚えた煙草祖父はやめ

神様もずるいよ知らん顔をきめ

寒と暖おりませ弥生梅の花

花の宴 忘年会の顔が欠け

倉敷市 井上富子

寛いだ時が流れている囲炉裏

地下足袋で生きると決めた三代目

熟年や此処らで脱ごうハイヒール

沈黙が漂う金の要る話

岡山県 池田半仙

県南は梅咲き蕾堅い北

年毎に小鳥の種類減り佗し

炬燵での昼寝で夜は不眠症

ゲートボール今日もさせない雪が積み

竹原市 古谷節夫

ナース軍団優しく厳しく勤勉で

毛筆にこだわる訳は語らない

耳寄りな話も聞こえ難くなる

片方の耳がときどきよそ見する

広島県 藤解静風

クレヨンのおいづまでも穏やかに

売り買いのない過疎の地に滅びんか

イヤリング耳から落ちてほつとする

開き直つてみれば人生別な味

柳井市 弘津柳慶

億と言う桁 年金に白昼夢

住専よ年金からの税もある

いじめっ子内の子も少し気にかかり

年金の私に定期すすめに来

美祢市 安平次弘道

別姓にするから妻が威張りだす

真っ白いノートが喋るから困る

影だけがなぜか私をおいて行き

約束をするから時計気にかかり

鳥取市 武田帆雀

八つ当りしても破れぬ母のふところ

完全犯罪 近頃妻に通じない

我の身の主治医は我の身で治す

男たちどうする義理チョコの後始末

鳥取市 小谷美ツ千

春風にのつて漫画を買いにゆく

春先の温さに少し騙される

青臭い恋は樹海に迷い込む

渦抜けて明日の位置を考える

鳥取市 前田一枝

弓も矢もわたしのハートつきさせぬ

嘘少しませて話に艶を出し

一人居に似合わぬ靴が脱いである

もう一度スリルも欲しいひとり者

倉吉市 最上和枝

雪国のおでん屋さんがよく流行る
牛耳ったつもり尻尾を握られる
札束の力で扉こじ開ける
老松の枝が牛耳る狭い庭

米子市 政岡 日枝子

持ち駒と歩調合わなくなってきた
持ち駒と心が久し振りそろう
癖が多くて友人が去っていく
家に帰ると癖の多い人になる

米子市 木村 富美子

瓢箪は酒で真っ赤になる夢を
電話ではめっきり肥えた事は伏せ
余暇が出来 夢にアタックして転ぶ
赤ちゃんの無心の芸は家宝なり

米子市 川上 より子

黒を着て凌ぐ低金利風の中秋
手入れ怠れば庭の樹自暴自棄
住専がおやまあ童らの語彙に
やがて還暦 重き荷軽き荷船底へ

米子市 白根 ふみ

孫の手のぬくもり明日を歩かねば
洋さんの犒いだろう五本のび
元旦に訃が舞い上がる風花と
離段にときめく喜寿の桃の芳

米子市 茂理高代

愛を射るがあるから弓をひく
モノクロの眼で梅の香に酔って見る
体より大きな指輪はめている
花の茶屋昨日も明日も忘れさす

鳥取県 乾 喜与志

喜寿急ぎ卒寿残して何処へ行く
残された卒寿の涙知ってるか
昔ばなし聞かせた祖父を追い越した
鶯の初鳴き春の風になる

鳥取県 津村 八重子

ひし餅も母の手作りひなの節句
母の海いづもでないでるさざ波に
童心にかえり曾孫とハトポツポ
待ちぼうけ今日もいとしむ花時計

鳥取県 上田 俊路

転ぶたび拾った知恵が新しい
寒い日を選んだわけでない葬儀
中立の旗では風がはらまない
菜の花の沖で司馬遼よみがえる

鳥取県 太田 幸枝

宇宙には地球が生きて動いてる
老いてなお艶の話に花が咲く
苦勞した度量ふところ温かい
男らしさ女らしさが風化する

鳥取県 土橋睦子

歳月に夫も私も鈍くなり

女です恋の欠片を抱いている

朴訥な父の柱が脆くなる

山茶花の紅の茵を通り抜け

出雲市 久谷 まこと

風下の噂 迷路を幾曲がり

窓際に思い出刻む椅子がある

身勝手もそう続かない矛おさめ

年輪の節目ふしめにある慕情

鳥取県 さえき やえ

くだがゆを信じて春の種をまく

汽車はなれ朽ちゆく駅が目にいたい

青春のなごりタブレットがゆれる

孫二十歳 久留米がすりを縫うてやる

松江市 柳 楽 鶴 丸

妻の涙未だ見た事がありません

B面からA面になった六十路

どんな力にもはつきりイエス ノー

午前様 妻の寝顔へ詫びてねる

島根県 藤 原 鈴 江

木次小町昔のあだ名に面くらい

遺言とは名ばかり中味は砂でした

けんめいに生きてるつもりミスばかり

春まだき夢にさそわれ墓参り

今治市 野村京子

介護する嫁にすまない嫁もとし

桜咲く背骨のばして歩きたい

花あかり花屋の前が昏れのころ

長編のドラマ母にはない佳境

唐津市 山口 高明

人間の驕りにマグマ怒り出す

ひと電車遅れ逢いたい女が居る

生傷が絶えぬ息子の向こう意気

下町の人情劇は味噌も借り

熊本市 永田 俊子

住専へみそさざいが舌打ちし

シクラメン同じ高さを自嘲する

不意打ちに合ったように椿落ち

青い音楽鳴らして通った貝の道

あなたもチャレンジ 「均等」川柳

大阪市立勤労婦人センター
は、男女雇用均等月間記念事
業として働く女性を中心とし
たテーマで川柳を募集する。

題と選者（各題3句）

「働く女性」 北川弘子選

「開く」 高杉鬼遊選

「自由吟」 橘高薫風選

締切 5月21日（火）必着
投句 葉書に各題3句を書
き、下記へ

大阪市大正区泉尾3-9-16

大阪市立勤労婦人センター

発表 6月15日午後2時
会場 クレオ大阪西

自選集

正本水客

石段の隅にさくらが散りのこり
何事もなく陽が沈みまたのぼる
下り坂自分の姿が見えてくる
かけ声をかけて遠くを通りすぎ
音もなく降るのは雪とかぎらない

藤井明朗

懸命に走りつづけて幸拾う
健康の自慢くずれて来た八十路
晩酌が楽しみ働く夫婦酒
事件 事故 多難 巳年も晴れやらす
歳よりも若さが揃う花見句座

黒川紫香

からかわれながら曾孫と走ってる
溪渡る一すじだけの鯉のぼり
五月晴れ朝のからだを拭いている
再起するリハビリがまた楽しくて
酔歩する優雅もできぬ酒を飲み

久家代仕男

裸木が芽吹くと山の雪も溶け
牡蠣鍋を囲む夕餉の灯がぬくい
片ときも怠惰許さぬ砂時計
火葬場のけむり夕陽に美しい
蛇口から妻の涙がこぼれおち

藤村 女

そよ風に乗って伝えるいい話
水すましさらさらリズムに乗る小川
水すまし渦の中から出られない
めぐる忌に父母亡き里が遠くなる
インタビューする喜びの荒い息

奥谷弘朗

執念の路傍の石にしておかず
控え目にものを言うから親しまれ
手さぐりで行く人生に味があり
へそくりも上手になって妻太り
飲み会となると弾んで困ります

野村太茂津

金井文秋

健やかに五体を洗う風みどり
極限の怒りに呆れ大笑い
なまじつか本音を吐いたばかりに
吟味して掟を糺すまろやかに
聞く耳をもつて忖度しています

八木千代

遠山可住

階段をのぼり降りして水汲みに
つるつるの段が舞台へ掛けてある
段ひとつ降りて足場を拭いておく
風船のおかけ階段かけのぼる
陸橋に合わす呼吸と足の裏

松川杜的

野田素身郎

どう見ても一病ありそな爪の色
痛い痛いというけどどうにしてやれず
食べられるうちは大丈夫九十五歳
笑う蛙 鳥獣戯画の楽しくて
燃え尽くす卒寿の素顔すがすがし

恒松町紅

小林由多香

根は善人 頑なな癖が邪魔をする
こだわりを捨てて仏に近くなる
拒否反応の妻と手酌で向かい合う
第六感 手応えがある老眼鏡
きまじめな顔で冗談言っている

知恵の出る道が渋滞して困る
舞うてみたい姿を見せるシクラメン
時の流れに従って行けぬと子まで言う
吉はよし凶も気にせぬみくじ引く
電話ベルそんなに早く切らないで
グラビアの帽子わたしに着せて春
年号が変って齢を見失い
マル優の粹をはみ出たことがない
桂林を一度見て来た筆ごころ
地震から人形泣いてばかりいる
孫のブランコはらはら見てる後遺症
ダム枯渴 雪解け水を待つばかり
反比例して晩酌の量が減り
無人駅 花泥棒などいない里
銀行のカメラが僕に向いている
旬の物のせるお皿の柄を選ぶ
まあまあ暮らしをリストラが狙う
負けいくさ悔し涙が傷にしむ
人生の節目ドックで修理する
年のせいだろうか目覚め早くなり

工藤甲吉

物食えば耳が鳴るなり耳鼻科行き
頑なはまだ杖をつく氣になれず
忘れぬ乳房を憶うマスカット
たとう紙のまま残つて亡妻の帯
聴診器 天の啓示を待つばかり

小出智子

わたくしに似合う帽子は売っていない
大抵のことは夫の言う通り
今は音楽が聴きたい それだけ
犬を飼いたいと思わなくなった
おやすみなさいで仏壇を閉じる

月原宵明

手袋を拾うた春の地藏尊
蝶も詩も菜種畑が抜け出せぬ
寒の水 顔のまん中だけ洗う
疲れたら降りる雲雀を待つ菜種
花筵 時には呆けたふりもする

辻白溪子

ゆっくりと歩いて愚痴を聞かされる
値引きしてくれたらきつと買うつもり
足袋脱いで目出度い疲れ愚痴にせず
昼寝するプランも持って里帰り
雑音の程度に野次を聞きながす

小西雄々

流し雛 前途の幸を疑わず
出来心と思つていたにダイヤ婚
合格へ母のハミングで台所
たしなめる話へ出来ていたしこり
日の丸へ背筋のばして仰ぐ祖父

波多野五楽庵

あやつりの糸にむすんだねこじやらし
安眠をむさばる人の仲間入り
膝折つて教育勅語懐かしむ
手をつなぐことも忘れた夫婦です
堕ちてゆく蝶よ花よの紙吹雪

高杉鬼遊

自転車の男が夢を売りに来る
飾るものほかにないのか髪を染め
風の日は両手に重い荷を下げる
一人なら喧嘩もしない妻の留守
いくさから逃げる枯れ野の果てまでも

西田柳宏子

住専に回す確定申告などしない
血液製剤などは知らない幸せよ
官官接待 大分溜まった膿がある
花便りほころび始めた急北上
バタ屋でトラベルウオッチ三〇〇円

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ

(64)

橘高薫風

麻生路郎先生は、昭和九年三月九日午前九

時四十六分大阪発列車で川柳行脚に旅立たれる。三月二十五日朝十時、うすりい丸で大連の波止場を離れるまで約十七日の鮮満への旅で『川柳雑誌』五月号六月号の三十頁に亘る旅行記「鮮満ところどころ」は、当時の朝鮮・満州の表向きの表情、柳人の消息、旅行吟など、挿入された写真とともに興味深い。

以下大略を転記する。

連絡船徳寿丸で三月十日午前七時半釜山着、八時上陸、直ちに東萊温泉へ

湯槽で蛙のように両脚を投げ出した私は、落人に似た軽い溜息をした。玻璃戸越しに眼に迫るもの、蒼い空と白い雲。

東萊は一時預けて来てる客

とあるは、芭蕉の奥の細道の「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます」の思いと重なる。

午後釜山見物・夜行で京城へ

思ったほどに寒くはない。昭和公園をよこぎって、ま昼の緑町をのぞく。

釜山釜山君も九州訛りなり

緑町泣いて来たのもいるだろう

(註・緑町は色街であらうか)

十一日午前八時二十五分京城着、言也、麗月冠、大口坊諸君の出迎えをうけ、朝鮮ホテルに入る。柳建寺、言也両君の案内で新聞社歴訪、市中見物

京城の街の屋根看板の文字は巧拙二様の懸隔があまりに甚だしい。巧いのは莫迦に巧くて拙いのは莫迦に拙い。巧いのは鮮人の筆になり、拙いのは内地人の筆になるものらしい。

朝鮮ホテルで落ちう約の春元紀太君が奉天よりの帰途、午後九時二十五分て来城

妓生を見せてやるという紀太君と一緒に雨具もなしに雨の街へ出た。妓生を断念して雨に濡れた外套の背をカフエーのストープに向けた。

十二日の午後、紀太君と朝鮮料理の明月館へ

料理は十五六種一度に出たが、朝鮮独特の味のものにはホンの僅かしかない。刺身が一鉢あったが、これなどは料理が内地人向きに転

向しつつあることを示すものであらう。曾て仁川の故矢田冷刀君が柳誌の名にしていた神仙爐なるものも出た。

(註・ここでは金月色、姜花仙という清楚端麗の二人の妓生が侍る)

昼の明月館に続き、歓迎句会が駅前共立無尽の楼上で四温吟社主催、朝鮮新聞社後援で開かれた。そして花月での歓迎招宴となる。

李王家を偲びて

昌慶苑桜もすぐに散るものよ

妓生

内地歌よりうれしきは君が立膝
十三日午前八時京城発平壤に向う

車窓から見る外は雪で真白だ。天気は非常にいい。とあり、金春澤という平壤座の興行主と話に花を咲かせ、大阪新世界で見た金龜子の日満提携喜劇や赤玉での娘々祭を談す。

午後二時五十二分平壤着、野田錦魚君等の出迎えをうけ牡丹台や市中見物

朝鮮の京都と言われ、飲むにいいところと言われる平壤での夜の歓迎句宴、若い人より老人側の熱が高いとある。

大同江あんなところに煙突が

大同江濯ぐ女が景になり

いよいよ十四日の朝、鴨緑江を渡り、対岸の安東へと満洲入りをされるのである。

川柳太平記 (216)

川柳の群像

野村圭佑

東野大八

「人間描写の詩として、現実的な生活感情を重んじる」(村田周魚)

大正九年(一九二〇)四月創刊の「川柳きやり」吟社の、これが運営主眼で、その雑詠欄も「日常茶飯」と名づけている。

この本調伝統川柳の家元格で知られる川柳きやりの主幹野村圭佑は、創立者の村田周魚子飼いの社人として五十余年間、きやり調に徹し、晩年はきやり吟社の顔でもあった。

「私が周魚先生との初対面は、昭和六年十一月のきやり句会。社人に推されたのは昭和十五年九月、戦争の空間はあったが、長い長い師弟の間柄である。お互いの家庭にまで立ち入った事を思い返せば際限もない。

私に子供が生れれば、その都度、祝吟の色紙を頂戴した。ある時は、御長男のお召しに

なった晴着を戴いた。それを後に、私の家内が羽織下着に縫い直してお返ししたこともある。これは全く親類以上のおつき合いで、慈味の溢れる心づかいであった。

周魚先生は、川柳を話し合うことはしても闘わずことはなかった。俗にいう聞き上手で初対面の柳人が喋り過ぎて、二度と出入りしなくなった人を知っている。

月々の編集社人会では、仕事が片づくとい杯ご馳走が出て、その時々柳界の四方山話が出るが、他を排撃したり、誹謗することを好まなかった。ある夜のこと、余程聞きづらかったと見え、キツとなって「三太郎は僕の無二の親友だ」と叱られたことがあった。そして先生は、われわれは現代の川柳を作つて活字にして残して置けば、批判は後世の人が

してくれる。それに任せようじやあないかと、おおらかな気持でおられた」(『川柳全集 第一巻・村田周魚』昭和54年刊) 野村圭佑編から抄録)

社中同人で圭佑をよく知る人いわく、「彼は周魚の赤子として、師の人柄と作句をきやり一筋にその生涯を全うした人物で、彼そのものが、きやり調だった」

本名野村利雄、明治42年(一九〇九)6月23日東京神田に生れた。絵具類と物卸商を営むかたわら、昭和5年から川柳に没入。川柳きやり吟社主幹、全日本川柳協合理事、川柳人協会副会長。昭和55年川柳文化賞受賞。著書に『壺・川柳きやり七人集』『川柳全集・村田周魚』などがある。

「川柳春秋」10号(昭和63年7月刊)の「この人に聞く」という対談特集で、圭佑が主役で誠実そのまの淡白な語り口は感銘深い。以下はそこから抄録。

祖父が明治四年に日本橋から紺屋町に引越し、父が明治8年に生れている。この辺は、江戸からずつと職人町で、日本橋方面の卸問屋の下請けが渡世だった。

戦争では、戦災で生家は全焼、彼は応召で中国大陸を転戦中で、戦後復員してみると祖父と祖母は、息子の彼の長男とともに、焼跡

のバラックにひっそりと生きていた。稼業の絵具類和物というのは、塗料のうるしの下地に使う、伝統的和物という植物の砥粉の商いをさす。職人町の子は、みな年頃になると丁稚奉公に出る。彼も15歳で、さる稼業筋の間屋につとめ、小僧から中僧になった頃、昭和5年、得意先の薬屋の番頭が薬屋の業界誌の小さい川柳欄を示し、その選者が村田周魚、これがそもそのなれそめだったという。

「一月月に二回の募集で、特賞だと当時の金で二円也がいただけとあって、いつかそれに夢中になった。この業界誌の川柳欄を周魚先生が切り抜いておられて、先生に頂いた柳号が『乙雨』というのです。その頃の句

いい話火鉢の上へ耳を貸し（昭10）

こうして昭和15年に『きやり』の社人に加えられました」

「きやり」というのは、江戸前の古参川柳人八十島可喜津が発起人の一人で、大正九年四月に納札型三ツ折の『川柳きやり』を創刊した。『きやり』というのは、大工棟梁が建物祝いで先頭になつてうたう木遣節にちなんで名付けられたもので、昭和三年頃は塚越迷亭・海野夢一仏・西島〇丸らの有力同人の活躍で、菊判で発行部数も三千。次第に隆昌に向かい、創立二十周年を迎えた昭和15年頃に

は、活版刷百二十頁にもなり、川柳界を風靡した。

戦争突入で諸事物資欠乏、戦時統制の嵐が吹いた最中、『きやり』は一月月の休刊もなく『きやり社報』のいわば旬会報を出し続けた。この執念と情熱の深さは、川柳界唯一の柳誌発刊一貫性は『われらのみ』と鼻が高いよつた。

川柳人協会文化賞を受賞した昭和55年の謝辞の中で、彼はこう述べている。

「今、現に川柳と称しているものは、全部川柳だと思っている。ただ『川柳きやり吟社』は、一番右側を守って進んでいる。革新川柳は左一つまり左翼、自分たちの川柳はこれに對して右側にありますが、わが吟社は敵を作るな、をモットーに、この種の柳論は闘うことをしない」

きやり吟社は、周魚総帥の「人間描写の現実的な詩」を踏まえ、「伝統をそのまま受けつがず、近代的な新しい発展のすがたにおいて生かす」その主張を、野村圭佑はひたすら捧持して、その生涯を「木の家に住んで四季には逆らわず」を信条に、平成7年8月21日心不全のため死去した。享年86歳。

「私がよく書くのは『川柳がある君がいる君もいる』という色紙にいつも書いてあるわ

けで、朝、店を掃除しているとフツと浮かんだ句がもつともよいと信じ、できれば百歳になつても川柳をつづけていられたら、こんな幸せなことはないと思っています」

対談録のこれは最後の結びとなっているが要するにこの人物は、生涯傾倒しつづけた師村田周魚の衣鉢を御生大事に捧持し、その生涯を終ったわけだが、その底を流れる江戸っ子流の趣味性は、師匠譲りそのままに柳多留の延長線上にある伝統川柳にあったことは否めないだろう。

きやり吟社は、平成元年に創立七十周年を迎え、誌齢も八百号をはるかに越えている。伝統川柳の老舗であり、既成川柳のメッカとも見られている『きやり調』は、つぎの圭佑語録で新世紀に残ることは疑いなしと思われる。

以下はその圭佑調の代表作品

歌舞伎から帰り返事も七五調

そつそつ飲めぬ四斗樽の酒

聞かれても自分の孫は褒めにくい

この組と行けばお酒のあるところ

生きられて百になつたら何んとしよう

▼次号は「大矢 十郎」

柳籠裏三篇研究 (三十丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久

西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗

佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

391 石山で鼻の赤ひも悪入り書き

車井

西原―紫女が「末摘花」を書いたこと。「あ

なかつたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目

ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさま

しう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色

づきたること、ことのほかにうたてあり」

(源氏物語)。

鈴木・岡田―同。

392 弓削村へ広橋殿を勅使なり

狐声

西原―道鏡を召せと、孝謙女帝よりの勅使が

弓削村へとつかわされる。その名は広橋殿

(広いをきかせただけのこと)。

弓削村へくだる勅使は扇橋

青木―賛。

弓削村へ勅使広橋下向

九八五

佐藤―賛。「雲上明覧」に、日野大納言の分

家に、正二位広橋中納言家のあることが記さ

れている。

七久保―賛。「日本霊異記」(下巻)に「弓

削の氏の僧道鏡法師、皇后と同じ枕に交通し

云々」とあるが、根根説などない、後世の捏

造であろう。

岩田―賛。佐藤氏説により洒落が生きてくる。

巨根はさらに遡って、秦の「ロウアイ」辺り

を元祖としたい。

鈴木―佐藤兄に謝。

岡田―弓削関係ではないが、勅使に広橋中納

言(あるいは大納言)がゆく例が古文書に散

見する。単なるこじつけにあらず。道鏡巨根

説は異本『水鏡』、室町時代の辞典『下学集』
に見える。『如意君伝』との年代的関係は如
何。

393 古ひ中納言ゆふれいにはならず 門柳

西原―古いに対して新しいのは、「新中納言

平知盛」である。彼は謡曲『舟弁慶』で「そ

もそもこれは、桓武天皇九代の後胤、平の知

盛幽霊なり」と名乗りをあげていて、江戸人

士はよく知っていた。

これに対して、古い方は数多くあれど、だ

れ一人として幽霊になっていないし、川柳で

特に名を挙げると在原行平であろうが、「も

しおたれつ、侘ぶとこたえよ」程度で、女性

二人を抱き、幽霊どころじゃなかった。

佐藤―賛。ただし、古い中納言は、臣中納言

知盛に対し、やはり壇ノ浦で入水して果てた

平中納言敦盛を指すのではないか。

七久保―古い中納言は行平をさしたのも。新

旧を対照させただけの句でしょう。

鈴木―礎稿に賛。「抑是は……」など名乗って

現われた幽霊は新中納言知盛ぐらいである。

古い誰と治定せずともよい。

394 行燈に戸なし提灯棒がなし 萬畝

西原 行燈に戸がなくば開きつぱなし、提灯に棒なくば縮みつぱなし。両者共に（とばす）ものである。よってバレと解して、老婆と老爺の股間の叙述と思うが如何。

青木 強いてバレに解さず、ただそれだけの句のように思われます。

佐藤 行燈は、吉原の八間という行燈、提灯は妓楼の大提灯のことではないか。

行燈も戸さ、ぬ土地の賑かき 二九二五

てつけへ提灯だなアと村素けん 五五三

—この大提灯は、柄がついていない。

岩田 佐藤氏説、吉原は動かぬところと思う。ただし、提灯は箱提灯のことである。

棒の無いてうちんで行く面白さ 七三四

鈴木 佐藤兄ご明解。八間（はちけん）という行燈は、ひらいた大型の天井からつるす掛行燈のこと。

行燈とはたもちは大きなところ 三二一五

これも吉原句にして、このぼた餅に関してはよく分からぬが、雨譚は「法事のぼた餅甚大きし」と註している。

岡田 吉原の八間は張見世の中央に、現代ならシャンデリアみたいに吊してあった。

395 馬が三足に駒下駄がさんぞく 龜遊

西原 「駒下駄のはな緒をなめる緋ちりめん」（五三三）などの句から、駒下駄は水商売の者が多くはいたらしい。馬げたというのもあった。

どこかの玄関に、高麗下駄三足、駒下駄三足が並んでいたというだけの句ではないだろうか。

瀬川 などを掛けているみたいな句で、よくわからない。

佐藤 料理茶屋にての、勤番武士の芸者遊びか。馬はそのままの乗馬用の馬、軋びだから一対一でなければならぬだろう。

駒下駄が三足鍵が三本也 傍三二

岩田 佐藤氏説でよいと思う。

駒下駄を野暮な草履の中へぬぎ 傍一三〇

ただし、「三」というのは、三味線をきかせてあるのではなからうか。

鈴木 同。駒下駄はおどり子。場所は茶屋。

こま下駄になじんだちんがかけて出ル

安五天一

—雨譚註。駒下駄へおどりこ、狎は茶屋の狎。

岡田 佐藤氏、鈴木氏説のとおり。

396 あのあばたではもつともと一月寺 石芹

西原 一月寺は、下総東葛飾郡風早莊小金宿、金龜山梅林寺。虚無僧の寺。

間男の方が多いいと一月寺 菰六

女敵を討たんとして虚無僧志願が一月寺にやってきた。その顔を見た一月寺の面々、「あのあばた面では女房にきらわれ、間男されるのも尤も」と。

青木 贊。

天蓋を取つたを見れば大あばた 安四礼二

天蓋を取ると振られる男ぶり 五一九

岡田 一月寺の出張所が浅草にあった。

397 夜ル夜中カ妾なま米ねだる也 五扇

西原 「川柳吉原志」に収。柳雨先生註に「扶持米」とあり。

鼻息を考へ妾ねだるなり 二七一四

一トたびあめは母おやへ扶持が来る二四

七久保 贊。お妾さんが殿様にねだるのは、あれもこれも親のさしがねによるものでしょう。

御めかけのむつ言くれろくなり 二二一

妾か親古里さふくねたるなり 三五二一

御妾の親ハ役害長者なり

三三二一〇

鈴木・岡田 同。

秀句鑑賞

同人吟 高杉鬼遊

— 4月号から —

通りやんせ住専だけは通しやせぬ

古 谷 節 夫

小出智子さんが五月号の本欄で、人の定めを書いておられた。同感である。戦後五十年のうしろめたさを背負つての責めでもないが、この数年ウツの状態がつづいている。もし川柳がなかったら、ゴミの日を待つ街角のゴミになつていたかも知れない。そんな私なので書くことがでなくなつた。とは言いながら心の底では、ある日突然、雲の如くに湧いてくる期待を信じている。締切があるから作品ができると何所かで聴いたことがあるが、それも活力あつてのことである。

目標があれば道はおのずから通じると言うが、偶然の出会いによる川柳だけに未だに目的が定まらない。人様の邪魔にならない道端で、せめて小さな花を咲かせたい。

おもしろい句を作りたい、ただおもしろかつたらよいと言うのでなく、まじめが基本にあつてのおもしろ味である。日常の生活に密着した息吹、苦悩の果てのかるやかな飛翔、そんなことを考えながら同人吟を拝見した。佳吟が多い。書き漏れた分はご容赦下さい。

神戸・淡路地震の人災、沖縄問題の怒り、その上に住専である。「通しやせぬ」決意のほどは他人ごとでない。戦後五十年、戦争こそなかったが、弱者切り捨てはなほだしい。利害を超えての怒りを感じる。

無礼討ちしたい借り手が多過ぎる

永 田 俊 子

同じ住専処理を題材にしているが、女性の視点は細やかである。怒りをもちろに出さないが、悪の行方を追う視線は厳しい。いろいろと言われるほどの悪でなし

悪は悪であつても、前句とは質が異なる。人の噂も七十五日、噂を信じて生きている人が美容室で週刊誌を読んでいる。

雪ひらひらまた美しいうそを言う

松 本 文 子

季節に順応して人は生きてゆく。うそも方便、美しい雪も消えてやがて花の季となる。

なんじやいな化粧直してパチンコか

西 口 忠 雄

「なんじやい」だけでは、語調が強くなるが、続く「な」の助詞によって、やわらかい大阪弁に変化する。川柳は文学だと構える要もない。俗な庶民生活が活写されている。

パチンコに負けて門松蹴つて出る

岩 原 喬 水

同じパチンコでも本人自身の戯画である。どなたの句か忘れたが、「銀行の前のホースを踏んでゆき」を思い出した。格好など構わない、負け犬の遠吠えである。

キャベツ サクサクお好み焼は好きですか

岩 本 笑 子

好きですと思わず言ってしまう。異性からの語りがけが、キャベツを切る音と共に耳に心地よく響く。好みのわからない間柄だけに空想がひろがってくる。

真剣なおもしろ話しませんか

金 山 夕 子

登場人物はこの句も異性の方がおもしろい。上句「真剣な」は作者の希求である。「おもしろ話」が曲者であり、この句のかくし味である。浮き世の辛酸をなめ、ほんのものを探しつつける真摯な人間像が想い出される。重い内容を軽やかに詠った表現に感銘した。

海鼠食いながら無頼の話する

桑 原 道 夫

好きな句である。好きなのは海鼠の味覚だけでない。前句の「おもしろ話」と違った男の話である。偶々、話の句が続くのは話に飢えているのかも知れない。現実には言いたいことを話せる相手が少ないだけでなく、自分も本音を吐かないのだと思う。現代川柳の名の下に幻惑する句が横行しているが、この句の肌ざわりのあたたかさを知って欲しい。海鼠のグロテスクが無頼に通じて絶妙である。

横丁を曲がれば住所不定なり

新 家 完 司

八尾市の將軍寺に、一步出すれば我れ旅人となる心。本社名譽主幹、西尾栗氏の句碑がある。心境に共通するものがあるが、「横丁を……」の庶民性、男の勝手気儘はご存知の映画、ふうてんの寅さんである。留守を守る家族があつてのことで単なる無責任だけでない信頼関係を句の背景に見ることができると。

首に鈴つけられてから動きたす

江 原 と み お

看視される者にとって、その視線が常に気になり、おどおどした卑屈な影を宿す。鈴をつけられる不自由を逆に自由へ発想転換してしまえるのが、この作者の持ち味である。

日本刀すうつと美しい凄み

渡 部 さ と 美

何んでもない詠い口ながら凄いと感じるのは、句が描く共感世界へ抵抗なく誘い込まれるからだろう。けれども味のない、あるがままをあるがままに言つた素朴さにうたれたとしか言えない。

カラフトも還つて来ました四月馬鹿

小 砂 白 汀

北方領土を題材に、かくも軽妙に詠われると、現実問題の沖縄基地も含めて内容の重さが強く響いてくる。遠い時代のように思い返されるのは、次々と起きる事故、事件の重大さの向う側に関心が薄らいだとしか言いようがない。平和とはかくもうつすべなものかわかる。

自然破壊のお灸のように石が落ち

上 田 翠 光

「何々のように」の表現は句の力を弱めるが、豊浜トンネル崩落事故の残酷さを表現するには、この方法よりなのではないか。天災でない人災があまりにも多すぎる。

SOS金魚が水におぼれている

山 本 義 子

川柳に理屈はいらない。金魚一匹救えない人間の非力が句の背後に感じられる。

食卓が真四角 五人座れない

松 本 よ し え

融通のきかない社会通念そのものを表出している。作者は批判する側で痛烈である。わが家は老夫婦、子供夫婦と孫一人の計五人だが、四角い食卓で仲が好い。

早送りしよう愛まだ見えて来ぬ

八 十 田 洞 庵

見えて来るのは映像文化に侵されている証のようだ。「いま、ここ、わたし」が存在する。

あなたの胸の形状記憶しています

榊 本 落 児

形状記憶は商品として現実に認知されているが、このようにもってこられると、いろいろ想像されて豊満にも見えてくる。

減反で案山子がタウンベージ繰る

久 保 正 剣

案山子とはおもしろい。鴉を追うこともなし、温泉地を探している。農協で預金を遊ばしておくより遊ぶが勝ちである。

裏表紙あんたが目立つことはない

藤 解 静 風

「裏表紙」は単なることではない、見事な発見である。変な造語が大きな顔をするのではない。柳界に対する一矢である。

水煙抄

西田柳宏子選

富田林市 藤田泰子

美辭麗句 深読みしないことにする
ブランドーの情けに溶けてゆく水
八方美人にならねばならぬまとめ役
二人きりなのに意見がまとまらぬ
耳の底 一度掃除をしなければ

今治市 野村清美

誕生日のバラがもえてる適齡期
旅の宿 海なり耳へこびりつく
湯けむりに年をかくした白い肌
呱呱の声 無限の未来握りしめ
いつまでも女でいたい身嗜み

今治市 渡辺南奉

ほどほどで満ち足りているあかんたれ
人生はいろいろなと不幸せ
天は天地は地 人間小さすぎ
花嫁の父は悲しい準主役
よくよくのこと母さんが薬飲む

大阪市 一本勇太

愚痴言えば愚痴返される屋台酒
一匹で生きる微罪を繰り返す
ほどほどに欠けて人間らしく生き
無記名にすればすんなり出る答え
剣を研ぐ手から転がり出た野心

岸和田市 亀井皎月

灘の街 酒の香りのする微風
自分史の馬鹿さ加減を見抜いてる
嫌な人避けて通った自己嫌悪
失敗を笑う夫婦で仲がよい
誕生日 孫がちゃっかり言うて去に

大阪市 池田一男

寝転んで野に雑草の声を聞く
揚げ雲雀 愛の賛歌に酔いしれて
怠け癖 机上の辞書に睨まれる
明日あるを信じて餌を運ぶ蟻
舌馴染む飼い馴らされた家の味

高知県 百田 幸

和歌山県 杉山 精子

介護する妻も介護が欲しかろう

世話好きで雑事に長けた喜寿の夫

蹟いて親の歩んだ道が見え

古道具売ってチラチラ亡姑の顔

几帳面すぎて一味欠けている

高知市 細木 子龍

新入生みんな判子で押した顔

小吉でいいから夢と妥協する

天下り大きな幕を下げて来る

家元と知らず番茶を褒めている

自分史へ直ぐ乗せたがる美辞麗句

和歌山市 木村 親路

麦畑誰かかくれていて欲しい

ペアルック愛の不安を包んでる

新社員 仲の良いのは平のうち

駅前のパチンコ屋だけが景気いい

だまされて見たい女は寄って来ず

尼崎市 的場 十四郎

手を広げ温い話を待っている

仮設窓 明日を励ます月の冴え

ありがとうその一言で座が和む

さりげない言葉が温い里の道

春風に誘われスキップしたくなる

終点で待つてあげるよ椅子空けて

損得は無い若き日のジャンプ台

拘りはきっぱり流そ春の川

静けさにまだ馴染めない亡母の墓

悔いひとつ蓄のままの落椿

寝屋川市 宮崎 菜月

縁談は遅々 造幣局は花盛り

大提灯 余震の幅に揺れてみえ

ひっそりと咲き散る手弱女の花が好き

毎年の花見へ各自暮らし持つ

雑踏のじゃけん言葉に振り返る

八尾市 村上 剛治

猫柳芽の先ほどの春になり

妻の涙が軌道修正してくれる

迷うから人は生きてておもしろい

瀬戸際で受けた情けは忘れない

駆出しのころの涙がいきている

今治市 塩路 よしみ

目かくしをされて雛さん仕舞われる

空振りの人生だっていいじゃない

原色の好きな女で満ち足りる

本心を伏せて流れに逆らわず

その続き話せばわたし裁かれる

和歌山市 山 根 めぐみ

情念の音スカーフにまといつく

立ち直る心に春の薄化粧

今はもう涙忘れた花ざかり

やんわりと生きると明日が見えてくる

風百態 過去も未来ものんでいる

富田林市 中 井 ア キ

わたくしの夢のひとつに無人島

点滴が心の彩を変えてゆく

葦だから葦でありたい余生です

運不運ご先祖様に聞いてみる

海鳴りに情念捨てにゆきました

寝屋川市 後 藤 黎之助

公僕と言われた死語を思い出す

梅咲けどまだ一隅に残り雪

この国の往き先憂いペンが折れ

デパートの駅弁楽し老い二人

診察券 三連休が多過ぎる

大阪市 三 浦 千津子

花冷えの中慶びの使者に立つ

風みどり空気の軽さ身の軽さ

春やはるローンも無事に掛け終り

身の証とばけて躲す老いの知恵

背伸びした分だけ重い荷を担ぐ

和歌山市 吉 村 さち子

事細かに話せば傷が癒えていく

まだ女残しルージュの色選ぶ

考えの甘さを知って目をつむる

スケジュールに合わせ手抜きを考える

宇宙から見れば日本はさくらしいろ

八尾市 大 内 朝 子

五月晴れちよつと道草一年生

遠回りしたから君に逢えました

すばらしいヤングに出逢うボランティア

本心を読んだ仏は鬼と化す

ふし穴をのぞく目玉のあてはずれ

愛媛県 安 野 案山子

子を思う一途な愛がひび割れる

プライドがやつと拳を押えてる

春なのに僕苦しめる花粉症

マスコミが騒いだきりで終わりそう

倅せが無限に見える披露宴

兵庫県 森 脇 和 子

芸達者 昔遊んだ顔らしい

手の届く範囲の善なら積みます

裏通り歩いて情け拾います

花便り一行にある思いやり

ご近所の好意で独り居満ちる日々

鳥取県 橋本 多哥由

大阪市 中田 あい子

ポイントに立つて女を考える

一寸先の闇にピストル店がある

遊び相手にのせられてばかりいる

苦い別れと決めた男のシャツ洗う

寡婦の意地 苦い話にのってみる

兵庫県 西山 八重子

かくし味教えて主婦の座を譲る

言い訳は眼鏡を拭いてからにする

まっとうに生きて周囲にうとまれる

明日はもう雪かも知れぬ菜を摘みに

ほどほどに折れて夫婦のまろやかに

鳥取市 西村 半 量

陰曆に祖母は正しく生きて来た

湧き上がる雑兵の声天下取る

雀にも序列があった餌つつく

肩書のとれた名刺で握手する

悲しみを蹴り出し明日に備えてる

箕面市 木村 天 弘

後輩の芽が伸びすぎて怖くなる

もう芽生え恋らしきもの幼稚園

伸びる芽はあると信じて母の如露

愛の芽が育つ新人研修期

期待したドラフト一位芽が出ない

板ばさみ身にしてみても管理職

うぐいすの初音客呼ぶ山の宿

ほろ酔いの父は得意な木遣り節

一寸だけ酔うてもみたい雛の宵

大器よといわれつつけてはや停年

鳥根県 森 茂 美

平凡な暮らしを願う共稼ぎ

粗品だが真心だけは詰めてある

縫いぐるみ目鼻つけば孫に似て

言い訳を騙されてやる妻の針

定年の暦を繰れば増す寒さ

鳥取市 福 永 ひかり

言えぬことずばりと言ってくる名刺

停年の節目に硬い殻を脱ぐ

土壇場でやつぱり夫の手を借りる

逆転もあるさ男の長い道

大地割るみどり信じて種を播く

和歌山県 中 後 清 史

妻の描く絵がささやかな安堵感

歳だとは思いたくない忘れ物

難聴が進むにつれて冴える勘

年金が肩を寄せ合う日向ぼこ

まだ生きる積りで励む万歩計

唐津市 浜本治幸

快晴で今日は願いが叶いそう

お世辞だと解つていても憎めない

山崩すクレインの空トンビ哭く

古稀の坂もう迷われぬ道を行く

日立市 加藤権悟

どん底で妻の笑顔に励まされ

七坂を越えた夫婦の疵だらけ

先頭もしんがりも無い蟻の列

目の裏の火種が妥協したからぬ

尼崎市 森安夢之助

忠告を受けて妥協を模索する

歯切れよい挨拶鳩がよってくる

紐が長くて真実が掴めない

旅三日 妻の味噌汁ほしくなる

八尾市 鷺見章

バレリーナ天女の舞もかくばかり

侘助の一枝咲けるを食卓に

赤い糸 太い絆で未だ繋ぎ

リハビリの日々休みなき車椅子

大阪市 中井正秀

主婦業も大変だった亡妻想う

狭い路地 大きな車止めている

乗ったバス誰もいないと落ち着かん

通夜の席 笑顔の人は皆他人

東大阪市 今岡真人

凡人に見せない寺の裏の顔

金婚や全てを許す顔になる

無意識に歳にはとしの箔が付き

無の時間流れて命透き通る

倉吉市 高多博丈

緊張が祝辞の舌をもつれさせ

閏年 二十九日に幸拾う

嘘をまた誤魔化す嘘をついている

遺産分け人間の業断ち切れず

寝屋川市 坂上高栄

方円の水に帰依する昨日今日

福祉論 鬼一匹をひそませる

筋書きに溺れ理論に流される

義理一つ私に重たい熨斗袋

横浜市 荒井広和

生甲斐の趣味で手を抜く家事仕事

老いの足嫌う近道抜ける道

粉骨碎身もリストラにかかり

浦島の昔話に居る長寿

河内長野市 大西文次

フリーダイヤルけちな男のプロポーズ

参拝の数で神にもある序列

願い事多くて絵馬に箇条書

ホステスを呼んで叙勲の祝賀会

豊中市 石川 勝

単身赴任いわし上手に焼けて春

生き残るためのみかんは種を抱く

心が寒いコンピュータで鳴る神楽

蟹の子は正直者で横に這う

倉吉市 山本 玲子

湯豆腐で胃のこだわりを消しておく

手が早いこれも才能かも知れん

秀才と比べられてる悪くない

啓蟄だもうのんびりとしておれぬ

出雲市 川島 和歌子

寒の冷え蓄も固い藪椿

甘い声かけてのら猫のぞいてる

祝い酒今日からともす二人の灯

少年の夢が広がるクレヨン画

鳥取県 山内 芳江

歳月がたつて何もかも許す

蹴った石やがて波紋の渦となる

台所磨きストレスみんな消え

神前の誓い少しずつ忘れ

今治市 越智 青園

失礼な白髪で歳を見積もられ

渋滞を自転車こしやくに通り返け

母性愛うすらいでゆく紙おムツ

ああ女 着たい食べたいしゃべりたい

高槻市 乙倉 武史

横好きが余生の暇を塗り潰す

口出しはしない聞き役徹し切る

方言がネック セールスには不向き

低金利軌道修正する余生

富田林市 山原 昭水

御堂筋 仏も鬼も通つてゐる

高齢者 老人 年寄り 嫌な文字

コーヒーでも貴女とのめば酔えますよ

自慢する次男の嫁の英会話

神戸市 向井 泰子

朝に起き夕にねむる仮りの家

何かしなければならぬ種を播く

正直に毎朝作るおみそ汁

三月の陽にだまされて風邪をひく

島根県 児玉 幸子

暗い朝 雪達磨にも挨拶し

猫柳 春へ芽吹いた綿ぼうし

鶯が声はりあげて春を呼ぶ

梟がホーホー鳴いて暗い朝

八尾市 村上 ミツ子

ステーキをあきらめ義理は果さねば

たとえばと言つてほんとにしてしまふ

からだにいいと言えなんでもよく売れる

ここだけの話とラジオ無責任

大阪市 福岡 雅子

襖絵の墨絵の島も春に見え

私の樹憩いの木陰つくれたら

この町で降りて見ようか一人旅

片隅の思いで生きた嫁の頃

高槻市 小林 一完
(一開改め)

入院の無為を打ち消す作句帳

川柳を友としガンとお付き合い

共白髪 五十年目に関所あり

全身麻酔立ち会う妻は狭心症

米子市 池尾 保子

補聴器で潮騒をきく冬の風

一輪の花に心を洗われる

消しゴムで消せぬ心のきずがある

大物が競うて税を食い荒らす

神戸市 船津 とみ子

梅だより丁寧に読む昨日今日

甘酒の香り恩師が懐かしい

あんぱんを召しませ笑顔思い出す

赤ちゃんが泣いた二十一世紀の声だ

和歌山県 藤井 春子

いじめ防止 家族の絆大切に

目に見えぬ絆 仏間に香をたく

何時の日か相手融け合う日を信じ

人生の舞台で今も舞いつづけ

兵庫県 玉田 三重

極楽で亡母が待つて予約席

風向きが変ると女口を割る

軒下にひなが落ちてるいじめかな

婆さんは朝も早いがよく眠る

倉吉市 田中 八太朗

督促状 底に隠してまた忘れ

議員とは知らぬ仲だが年賀くる

パチンコはしないでトイレ借りに行く

ボヤで済み野次馬足りぬ顔で散り

貝塚市 池田 寿美子

ポケットに若さを保つ知恵袋

遮断機の揚がる暇なし関空特急

駆け引きの続く山場に疲れ出る

毛糸編むひとり模索をしています

出雲市 園山 かおる

肩書は無いが取り柄の藁細工

いい月に出合うと話したくなる

親の舵 子に握らせてゆく一路

粗衣粗食 古いリズムが性に合う

愛媛県 中居 善信

仁王さん肩の力を抜きなはれ

迷うことなく今朝も同じ道を往く

快調な朝だ信号青ばかり

一握りほどの仲間を信じてる

熊本県 高野宵草

ふと覗くカルテに癌の字が座り
孫台風まだまだ死ぬぬなと疲れ
秒針がセッセと余生かじるなり
母と妻に中間色を塗っておく

豊中市 岸田知香子

自立する娘にはなむけの荷を運ぶ
すねかじり親のふところ無頓着
店構え持ちつ持たれつ廿年
月冴えて何か言いたげ冬の天

砂川市 武田正美

裏切りの日もあるだろう児の寝息
森へ来て私の懺悔深くなる
無秩序な若さ不遜を振向かず
追想の過去ほのぼのと暖かい

鳥取県 原みさを

やがて地に還るいのちの畑を打つ
同じ傷 打ち明けあって橋わたる
持てるだけ持ってエンマに逢うつもり
返り咲きもくろんで握手だな

海南市 谷口義男

誤字だけがやたら目に付く揭示板
強引に黒白付けて悔い残る
お互いの負い目を底い合う絆
最後には裏取引をする構図

秋田県 湊修水

豪雪が一夜で隣遠くする
みちのくの方言学ぶ吹雪く夜
年頃の娘 囲炉裏で胡坐かく
おたかさんがんばれ祖国正念場

尼崎市 長浜澄子

意志表示してから涙みだすところ
目に見えぬ敵とくぐっている火の輪
冬の峠でやわいおんなの殻を脱ぐ
聞き慣れぬ台詞と午後のカフェテラス

高槻市 傍島克治

自棄酒がよけいに鬱をつのらせる
神様がよそ見する間に悪さする
霧深く通勤の靴音ばかり急ぎゆく
井の中がよかったと蛙ユーターン

大阪市 和田和風

金婚を前倒しして夫婦旅
里帰り喋って食ってもう居ない
被災地に春を忘れず桜咲く
被災者の孤独死続き桜散る

岡山県 富坂志重

加害者も被害者も泣く後遺症
子育てに耐えた老母の背を流す
耐えた事は言わず百歳楽しそう
信じてはいますが泣ける朝がえり

羽曳野市 麻野幽玄

八起きしてからの寿命の愛おしく
七十キロ支える足を庇う杖
美味しかったと言えぬ食欲かみしめる
巢立つ子の振り向きもせず悔いはなし

岡山県 土居 ひでの

方向音痴で母の森から抜けられぬ
とことん惚れた伝言板のかしら文字
やさしさの余韻を残す亡母の森
少年の笑顔 復興の芽を育て

池田市 木村 一 笛

頑張れとみなみの夜が燃えている
女好き夫の不倫終らない
いじめっ子 母と一緒に泣いてやる
ほめ言葉三回言えば嘘になる

和泉市 横山 捷也

粉雪が巻いて露天の風呂のゆげ
病室を自分の靴音聞きながら
陽炎のように思案がまとまらず
はしご酒 坂道長き月の影

岡山市 山磨 行子

縄電車 積みのかされた大器の芽
衣食住たりて下積み苦にならず
ライバルは抜くまい無二の友だから
飽きもせず失敗重ねて老いの趣味

河内長野市 妹背 尽呂久

台所で鼻唄が出る妻がよい
負け将棋 未練顔する手持ち駒
値切った分ちゃんと手抜きをされている
個展など開くつもりもない孤高

大阪市 中橋 恵美子

ペランダの鳩 人間の知恵探る
よく笑う屈託のない白い歯よ
閉店時追い出すように買わされる
厄をみな預けられてる流し雛

札幌市 三浦 強一

自惚れの足下にある活断層
肚に棲む鬼が時々酒ねだる
鏡よ鏡 正直過ぎるのも困る
手相見てあげると美女の手を握る

和歌山市 木村 初子

快調な日々ありがたく春の詩
水の音 風の声聞く詩ごころ
転んでも自力で起きよ手はかさぬ
今年こそ今年こそはと無為無策

和歌山県 中村 君枝

大移動母の気まぐれ模様替え
ぬかに釘そんな老後は望まない
チクチクと脇から責める妻の癖
錆びついたネジを巻き合う老夫婦

十和田市 阿部 喜久江

飛び出して走る車にかみつかれ
可能性信じて夢を子に託し

手抜きなどしないで注ぐ母の愛
ジャッパ汁タラの目玉がにらみつけ

滋賀県 中 宗 明

家族風呂 妻に感謝の背を流す

迷信と知りつつ縁起担ぐ妻

散歩する湖畔の虹に夢を抱く
年相応 髪薄くても櫛を持ち

尼崎市 松下 比ろ志

白酒をワインにかえて雛祭り

坪庭に雑然と春動き出し

花見にも陣取りをする狭い国

六十五歳と呟きながらシルバーシートに座る

鳥取県 高尾 京

大雪に負けず桜の花ひらく

雪月花 夫婦余生を助け合う

かたくなにありし福寿草咲き初めて

失意の日 水仙の花届けられ

岡山市 藤原 一平

聞き上手 嫁は上手に輪を作る

知らぬ顔しても耳には来る噂

十本の指にもそれぞれある美学

スベアの作れぬキーが多すぎる

大阪市 川原 章久

おしゃべりの鳥が来てます春の庭
幸薄い女は今も赤い爪

味気ない別れ特急開かぬ窓

寝屋川市 太田 藍子

その話どうも辻褄合い過ぎる

沈黙で男心の筋通す

次男次女 以下同文で済まされる

和歌山市 楠見 章子

バーボンをお伴にアガサクリステイ

感激の余波を浮かべるティーカップ

インターホン神の言葉を売りに来た

河内長野市 柏本 靖子

走るのをやめれば世間よく見える

時々落書もする日記帳

留守電話 温い話が出てこない

寝屋川市 籠島 恵子

出がらしを夜中に呑んでいる夫婦

包丁が錆ついてからなお十日

雪やなぎこぼしていった猫の恋

鳥取市 岸本 宏章

子供らの黄色い旗を裏切れぬ

晩学へ暇が味方をしてくれる

負わされた傷は小さくても痛い

和歌山県 尾田綾子

多事多用わたしにくれた仕合せか

失敗を恐れず未知の炎をくぐる

今日もまた未来へ結ぶ糸つむぐ

唐津市 江川青琴

宅急便 嫁の笑顔もつめてある

愛犬にふり回されて今日も暮れ

主なき庭に紅梅咲きこぼれ

唐津市 山口ふさ子

スキップして希望の春がやって来る

残されて供養ばかりに明け暮れる

お雛様飾り幼き日へ戻り

大阪市 尾崎黄紅

夢物語 金の成る木の鉢も枯れ

機を見るに敏とは卑怯者のこと

お隣の犬に咬まれた不覚なり

鳴門市 八木芳水

子守唄聞かせた孫に勞られ

自信過剰男に流れ玉当る

子らの声はしゃいで北も春になる

八尾市 平川幸枝

笑う日があってヤングが好きになる

からだごとぶつかる孫を受けとめる

一病のからだトコトン飼ひ慣らす

静岡市 増田扶美

発芽した日から張り切る児の日記

下心読んで断わる遠回し

いやな話 母が苦心の遠回し

米子市 猪森スミエ

吉報を猫に聞かせて一人住む

磨かれた格子に古いそば暖簾

一休み水車と歌う早春譜

今治市 渡邊伊津志

真実を伝えて波が高くなる

灯標は波の機嫌を知りつくし

波に乗るチャンスに神が藁をくれ

大阪市 川内叭笑

住専も基地も領土も腰が引け

老いに負け小声で愚痴る里の母

波風の立たぬ家庭に居座る娘

千葉県 大川晩翠

開いた口 譬え話に塞がらぬ

清貧に清く正しくあほらしさ

毒を以て毒を制するクスリ箱

高槻市 執行稲子

あつさりと乗って滑った口車

さきがけて春謳歌する猫やなぎ

淡白なトーンに五線譜魅せられる

和歌山市 古久保 和子

真剣に聞くのは眼鏡拭いてから

駅前広場 自由に使っている若さ

少し嘘混せて整形した話

羽曳野市 芦田 絢子

ポケットの握り拳が肩凝らす

以下抹消そして私が甦る

食べるより食べさす顔がうれしそう

鳥取県 藤山 弘子

地下足袋に茶髪頭のとびの人

ストレスを吹き矢にこめて的を射る

口笛やハーモニカ吹ける子がない

香川県 神保 坊太郎

湯水がダム一杯のウツを溜め

吉凶はどうあれ流れに乗って見る

老いの身にドサリと重い冬が来た

鳥取市 近藤 秋星

雑草が一番先に芽を出しぬ

露天風呂テレビで見れば雪が舞う

春風につい誘われて来た散歩

出雲市 梅 ミツエ

初雪で見事に咲いた枯木花

老いた道残り少ない夢がある

寒いけど春の日射しがこぼれてる

成田市 斎藤 房子

金婚の文字がまばゆい夫婦箸

定年の駅で乗り継ぐ汽車がない

まだ席順生きていました戦友会

福岡市 井崎 ミサ子

五体満足なのに不満がいつもある

おしゃれして町から帰り引いたかぜ

へソクリを預けにバスでゆく銀行

富田林市 欄 智久

思い余って亡妻の位牌に問いかける

気まぐれな大雪列島総震い

大和から茶粥と梅干好きな客

交野市 山川 日出子

笹子啼く峠越えたら無人駅

同窓会 阿波から手作り草の餅

おら帰る都会に来たら人の渦

兵庫県 倉垣 恵美

老眼鏡見えないものを見てしまい

善に飽き清貧に飽き紙風船

ああ夕日 妨げるもの何もなし

兵庫県 西井 つや子

古道具の使い慣れたる安堵感

春は他人の花がきれいに見えてくる

物好きが走って春の風になる

飲み屋での友はどこかの偉い人
唐津市 松本 圭

国のこと考えるほど偉くなく

クレイン二基チャンバラしてるように見え

唐津市 宗 弘

染み着いた親父ゆずりの庶民性

ウハハハと破顔の友の計を聞けり

名水の味に溶けこむ枯落ち葉

唐津市 林 公一朗

家元に切られ曲げられ咲く定め

見て見ると健気に咲いた寒椿

踏み倒し威風堂々ご答弁

唐津市 市丸 晴子

老いの足忘れて溝を跳び損ね

三人の子供支えた外反拇趾

胃袋で溶けない愚痴が揺れている

横浜 市 齊藤 よし一

舟唄を崖も聴いてる川下り

一か八 吉と出たから許される

一本の銚子で小骨まず抜かれ

熊本県 大川 幸子

消えることないだろ心に咲いた花

幸せをちよっと味わう午後のお茶

野も山も春の息吹きへ衣替え

もうでなくまだまだ楽しわが余生
熊本県 増田 一乗

治療待つ人に生け花語りかけ

よくもまあ次から次へ用事出来

出雲市 加藤 スズコ

喜びと涙で祝う晴れ姿

目を細め角樽かかえた父百寿

風もなく話もせずにだんべ雪(ばたん雪)

和歌山市 福重 美子

春が咽喉通ってゆくよ踊り食い

努力せず秘訣ばかりを聞きながら

嘘に嘘積んで引けない嘘をつき

鳥取市 植田 一京

メーデーの旗に負けじと鯉のぼり

笑い声満ちて赤飯配られる

立ち話 暇がなくともあろうとも

東京都 清原 悦子

責任をのがれ役所の顔にする

長電話そばで子供があくびする

凡人のくらし私に似合ってる

八尾市 山本 宏

眠れぬ夜 羊がみんな家出する

たおやかに平仮名つづる舞姿

伸びすぎた体で親を困らせる

大阪市 二宮紫鳳

難関をくぐって安らぐ春休み
大切に育てた花にとげをみる
母と子を結ぶ絆のお弁当

羽曳野市 川田 晋

待ちかねた初年金で眼鏡買う
己が子に初めて負けた腕相撲
子育てが済んで夫にかかり切る

鳥取市 津村 静枝

風花が舞う冬の別れを惜しむよう
幸いに後遺症だけまぬがれて
大器晚成まだ夢はあり腰据える

河内長野市 木太久 正一

買物に慣れて美味しいリンゴ選り
宇宙から一転 農に帰る人
大地の子わが身重ねて三度見る

吹田市 西岡 豊

二月堂 春を汲み出す火の乱舞
ちよぼちよぼの仲間で笑顔絶やさない
採用と飛び込んでくる青い空

宝塚市 黒台 伊佐武

仇な雪 梅も三分で縮みおり
傷口のまた疼き出すお水取り
二代目の婦系図に影を見た

鳥取市 坂田 和歌子

気を抜いてお話できる臘月
ぬくぬくと育った付けが今にある
抜いて見りや可憐な花の根の深さ

大阪市 鈴木 トヨ子

ミニひなに幸多かれと語りかけ
突貫工事 周囲かまわぬブルドーザー
老父母に心残して踏む任地

泉佐野市 稲葉 洋

泣けるだけ泣きなはれなと里言葉
腹すえて余生とやらにぶつかろう
寡夫二年少しは様になってきた

米子市 永井 三津子

牛が鳴く売られる明日を覚るよに
年度末 土竜のように道を掘り
一徹な鎧着たまま父が逝く

弘前市 櫻庭 順三

地吹雪の変幻は白皚皚と
大回転すいすいと点になる
ニューフォーム変えてはみたが古希は古希

鳥根県 岩田 三和

青年よ砂漠みどりにポランティア
蔵の児に母の差入れさきするめ
お山にも肥満のキツネいて困る

大阪府 原 みえこ

鏡台に亡母に似て来た顔がある

心臓に悪いドラマをまた見てる

一割負担のビタミ^ン貰^ろて貯めている

東京都 瀬 戸 きん子

寒のもどりカイロ五つ入れて出る

餌籠の野鳥も序列日が暮れる

孫抱いて爺さまが唄う七つの子

唐津市 福 島 紀 一

日記には老いと言う字が多すぎる

齢のこと言わず五つは若く居る

納得はゆかぬが納得し合ってる

東大阪市 北 村 賢 子

人情も紙より薄いオブラート

いたずらに摘むな折角生まれた芽

雪まとういちようまたよし御堂筋

羽曳野市 安芸田 泰 子

旅帰り妻は優しい顔をする

実のないごめんなさいは直ぐに言え

因習が閉ざされている門構え

富田林市 大 橋 鐘 造

子に諭す父は無言の玉の汗

明日のこと夢見て今日も日が沈む

石橋を叩いて今日も渡られず

横浜市 清 水 潮 華

高い金払い稗飯たべる贅

ゆうゆうと暮し申告赤にする

日帰りの旅行で還付金消える

和歌山市 津 村 武 春

しみじみと人の情けに酔える酒

核持たぬ勇気が平和育ててる

無為無策エイズ患者が増え続け

米子市 足 立 由美子

結論はやっぱり父の掌の中に

恋人のように電話を老母にする

コーヒーを囲みストレス捨てている

高槻市 宮 城 如 水

○と、を説いて禅僧席を立ち

外は雪 女一人の寒い部屋

永らえて生きるも意地と一人旅

羽曳野市 山 本 たけし

四季自然花鳥風月ある故郷

裸婦を画く卒寿の画家の顔の艶

遠回りした人生も古希迎え

愛媛県 宮 本 末 子

賞罰もないが信じる人もない

白鳩が毎月飛んで来て達者

まんさくの花に言いたいひとり言

白波の五人男の傘の見栄

静岡市 大村 正雄

相槌を打って乗り出す同意見

春雨が似合う蛇の目と糸柳

柏市 上鈴木 春枝

車間距離守って肩の凝る会話

箱庭へ老父の小さな自己主張

どの子等も産んでよかった母冥利

新潟県 高野 不二

ねずみ取る猫はいないという平和

千円の時計で遅刻せぬ暮し

野党とは無理と知ってて無理を言う

鳥取市 森 明美

じっくりと考えようよこまねずみ

居酒屋に女が一人外は雪

雪が降る紅い椿の花に降る

兵庫県 安達 厚

ポイ捨てを自然に拾う勇氣欲し

青春は希望と共に生きている

青い空 今日はいいいことありそうだ

兵庫県 大谷 幸次郎

古傷が十年経って痒くなる

職退いて本音の暮らし甦る

笑う花 彩とりどりに自負を持つ

越えて来た修羅に手抜きのない夫婦

鳥取市 山宮 愛恵

理解ある言葉 傷口小さくする

干大根への字のの字と漬けていく

大山市 森 正

咲き初めの梅の匂いへ雪が降り

住専の罪一票の裏にあり

取りすぎた税を還付の名で戻し

熊本県 岩切 康子

土地の画布 麦畑の縞 素敵だな

横縞に愛を編み込むカーディガン

掌の汗になつて恐怖感

鳥根県 松本 聖子

今日だけはリッチな食事誕生日

子供等を叱らぬ親をあわれとも

舗装路の裂け目でタンポポ花をつけ

大阪市 杉 澤 汀

億兆の穴あけ国の助け舟

淡島に泣き顔もある内裏雛

花の下氷河期の猛者場所を取る

鳥根県 武島 ちよえ

根を下ろす土地だきれいにしておこう

お買得とてもそんなに買えませんか

春の陽を背中いっぱい蓬摘む

島根県 菅 田 かつ子
輪くぐりへお尻がいつも引っかかり

寒風の河であひるのおおらかな
音たててタクシー代が跳ね上がり

島根県 谷 岡 ふ み

御近所の目出度い話ほほゆるむ

診察日 医師の一言赤信号

お似合いで年上などと思われず

八尾市 生 嶋 ますみ

寄せ鍋を囲んで独り者同士

おでんぐつぐつ家風に染まるまで煮こむ

ぬるま湯でどっぷり明日の策を練る

宝塚市 飯 西 ミサヲ

観梅と決めたその日に雪が舞う

サンブルの化粧品だけで事足りる

下手すぎてうけた拍手の人氣者

西宮市 古 谷 ひろ子

大根がふつくら煮えて風邪なおる

嫁においてよテレビ広告村役場

原稿用紙埋まらず時を刻む音

米子市 本 吉 宗 光

血税を使うと景気よみがえる

オシドリの彩りに添う真鴨二羽

人それぞれこの不景氣に家を建て

兵庫県 円 増 純 子
振り出しの頃に描いた夢いずこ

問題を抱えおちおちしてられず

模範にはなれず後から従いてゆく

鳥取市 山 本 崇

新春の晴れ着娘のイヤリング

万歩計近道しない散歩道

厳寒の浪が牛耳る日本海

和歌山県 久 保 ふみえ

もう一度借りたい母の知恵袋

泣いている削り取られた山の肌

老木に逞しさ見る梅の花

茨木市 久保田 恵美子

ベテランに可愛がられて芽が出ない

袴を脱いで今夜の鍋奉行

アホな事考え一日が終る

寝屋川市 瀧 本 八十八

悪い夢食べる猿なら頼もしい

年輪も馬齢も重ねただの人

人生をしみじみ歩む老遍路

岡山県 国 米 きくゑ

隙のない男にもある物忘れ

水鏡空も熟女も春めいて

春の絵皿でうとうと眠る道祖神

弘前市 今 生恵子

ひたすらに走り続けて父は惚け

あるがままに生きて仕合わせ気付かない

一斉にトイレに立たすコマーシャル

横浜市 金森徳三

向こう岸 飲んでいるかと酒供え

仏壇は無いが写真が三つある

生きていてごみと枯葉が溜る日々

尼崎市 向井末貞一

新天地 趣味の絆に歩が進む

とんとんと厨のリズム日本晴

雪解けをじいっと我慢 露の臺

尼崎市 野瀬昌子

挨拶が苦手で誤解ばかりされ

風花と舞い込んでくる計の知らせ

露の臺 枯野の土手を春にする

鳥取市 藤ふうこ

兄戦死それからの母笑わない

ともかく花が咲くまで待つてみる

彼岸花 燃えて兵士の墓静か

兵庫県 高見末野

梅咲いて春が行ったり来たりする

父母逝きて故郷遠く春がすみ

本家とは名ばかり今は猫の宿

松江市 小西素子

菓子箱に梅一輪をそえて出す

毛糸玉一針毎に夢託す

五年振りいとしき母に夢で会う

横浜市 保田絹子

一日が終わり刺あとうずき出す

里がえり母の叱言に癒える傷

白内障 手術しようか眼鏡拭く

松江市 松本知恵子

水仙の香りを朝のスタートに

スケジュールぎつしりに吹くすきま風

ひとり言増えてストレス溜ってる

羽曳野市 徳山みつこ

ブルドーザーのうなり吸い込む春の空

頼むよいつも子らには言うておく

歩いて歩いてこころでちよっと一休み

出雲市 浜圭三

花粉症 朝からの風気にかかる

梅の花きりたくないが切りました

泳ぐもの何も見えない春の川

松江市 浦辺静江

Vサイン カメラの前で涙拭く

夫の留守 好きな番組見る余裕

ポケベルを連れゆつくりと落ち葉焚く

大阪市 川久保 睦子

亡母の知恵入れた引出し見つからず
顔色をうかがい二度目聞き直す

高槻市 芦田 静江

寒もどり舞妓の点前春を呼ぶ
再婚の姉さん女房に満ち足りる

大阪市 松永 会美

隣より咳を合図に出る銭湯
アベックの中でポツンと夕陽見る

寝屋川市 太田 とし子

表彰状もらって遠慮したくらし
盃に秘密が行ったり来たりする

寝屋川市 森 茜

安全圏の母にうぬばれ聞かせとこ
はっか飴おさまりそうもない睡魔

伊丹市 延寿庵 野鶴

すきま風 内緒が好きでいつも来る
あごだして入歯と登る老いの坂

香川県 高橋 たみ

ちびた石けん丸くまるめた虹の色
子犬にもボトルにも服させている

東大阪市 松山 隆

太刀持ちも土俵を飾る役どころ
子が親に釘をさすのも世の習い

鳥取県 権代 康女
来客の声で電話がやっと切れ
いい空気が山は宝を持って居る

靴紐を結んで弾む新学期
姉が来て笑い袋がはち切れる
姫路市 服部 一典

二人連れお供はいつも男です
回転すし追う目が遭うてやり過す
兵庫県 北川 とみ子

帳尻の合わぬ財布を覗かれる
七転び八起きの命洗って
河内長野市 印藤 智子

狭い部屋 怒った顔もしてられず
浮きもせず沈みもせずに生きている
和歌山市 森口 美羽

思い切り笑えばとけるわだかまり
定位置に並んでないと落ち着けず
鳥取市 岸本 孝子

白ですと言いつ切る子の眼疑わず
気取らずに話がはずむ国訛り
鳥取市 中澤 正恵

これくらい出来る自信が指へ湧き
につこりと負けないための笑いです

高槻市 江原秀夫
したい放題 神のシグナル見落して
啓蟄に頼かぶりの虫顔を出し

尼崎市 田辺鹿太

つぶやきが近頃多くなった父
従えば平和 私の敷くレール

沖繩県 杉谷一栄

床に入るきっかけになるコマースヤル
追伸に小さな文字で小鳥の死

旭川市 朝倉大柏

和服には似合わぬ新語ばかり言う
逃げ腰の方がわんわん吠え立てる

高知県 桑名孝雄

リズム感ないので笑うだけで居る
甘いのは僕だけでない参観日

倉吉市 大下智子

久しぶり逢うと同時にしゃべりだす
どろぼうに取られたでなくあげたのよ

池田市 藤井計光

五割引半信半疑で迷う妻
鼻唄で単身赴任のドアたたく

阪南市 正橋正

きょうもまた引き立て役を買って出る
陽の当る場所へ舞台を回したい

福岡県 本田忠男
若者は大根作りに遠くなる
建前の話に距離が縮まらぬ

尼崎市 軸丸勝巳

水鳥の日がな動かぬ寒の行
お雛さま定員超過舟の旅

香川県 向山治延

ほろ酔いで見ればおたふく愛らしい
一枚の紙も折りよで祝い鶴

尼崎市 尾宮弘治

銀行に勤め見直す一円貨
占いも絵馬も無情な就職譜

八尾市 與田明

有頂天になるから梯子外される
税務署へ自首するように申告書

枚方市 森本節子

相槌は聞こえたように打っておく
懸崖の観音堂に祈る人

今治市 村上久美子

嘘つきでしようか本音に衣着せ
返す気があればそんなに借りられず

大山市 早川盛夫

借金はみんな返したちどり足
目出度い日 気が気ではない父の酒

和歌山県 村中悦男
かけるなと言った電話を妻が聞き
体重計やせたい娘と妥協せず

寝屋川市 井上すみれ
ご多忙中にと口先だけの長っ尻
納得の出来ない顔を手をたたき

香川県 田中ふみ
強くなれと春風そつと背を押す
嫌なこと素通りさせる老いの耳

東大阪市 谷口義
意地張って時期を逸した仲直り
作文に嘘もたくさん書いたなあ

唐津市 山門タミ
五十年主婦に卒業証書なく
実社会もまれて梅檀香り出し

唐津市 山門幸夫
広辞苑 手垢懐かし亡父が居る
糠漬けの朝餉に母が生きている

羽曳野市 西村りつえ
春ですな魔女が優しいことを言う
ざぶざぶと仮面を落とすしまい風呂

広島県 森川抜智
美人より個性豊かな人が好き
安心料払って私立まず確保

堰原市 西本保夫
よくもまあつづく携帯長電話
捨て犬の元気をじつと見ておれぬ

静岡市 三浦つね
八十路越え祖母らしくなる難しさ
無意識に何時かまねてる母の癖

米子市 服部朗子
独唱し「ここに幸あり」母の歌
ストレスへ食がすすまぬ受験生

倉敷市 戸田正志
やさしさがしみこんでいる宛名書き
何もかも知ってるような嘘をつき

鳥取市 山口しげる
愛憎を素手でつかんだ火傷痕
テールランプ路傍にわたし置いたまま

藤井寺市 鴨谷瑠美子
芽吹くころ女性は紅色替えている
スパゲッティ電話しながら茹で上げる

島根県 福岡博利
テーブルが狭くなるような鍋を食う
仕事場の垢 落してはならぬ

兵庫県 中野とよ子
お目出度が迫る無理することばかり
名物が津々浦々の駅にある

退屈な話を辛抱強く聞き

静岡市 小木久子

腰に巻くセーター若いから似合い

静岡市 佐藤次枝

お手伝い孫のエプロン縦結び
のど元を過ぎればいつも腰くだけ

静岡市 松下正枝

評論家あとからああのここの言い

勞られ心の深さふと思う

尼崎市 岩倉キク子

頭で割り切って胸では割り切れぬ
それらしきものをそろそろ書いてこ

尼崎市 河津正治

素敵な春待ちわびている福寿草

春風を受けて渡ししの櫓が軋む

静岡市 中西雅

バイク音 無事の帰宅を祈る夜

風邪ひきの長びく間 春芽のび

岡山市 中嶋千恵子

ねじられた話を肴にする他人
逆風に耐えて男は帆をあげる

大阪市 立蔵信子

マグカップ コーヒー通には似合わない

泣いたあと前より生きた目をしてる

運不運わけたトンネルに手を合わす

伊丹市 樫谷郁子

車椅子の帽子に淡く梅薫る

松江市 松浦登志子

参拝のバスの棚から福もらう
雪のせて山を越えれば春の海

鳥取市 田中友子

準備したエサを魚が好まない
たとえばの話で傷を包み込む

島根県 槻谷伸子

実南天まだ無事だなあ春が来た
啓蟄に人も飛び出す日向ぼこ

八尾市 神原まさと

生い立ちをしやべり止まらぬ老患者
風邪引きがやっと治った梅匂う

松江市 安食友子

おみくじが芽吹きの中で物思う

掴えたザイルしやにむに神を呼ぶ

岸和田市 不破仁緑

カラオケは上役よりも下手でいい
十戒の二三忘れて生きている

横浜市 後藤早智

広い肩見つめてことば探してる

母と子で互いに正す長電話

有田市 生馬 芙美子

安心をしていいかいの酒の数
もどり寒 春のムードで跳びはねる

大阪市 平井 露芳

信号は青でもやっぱり走ったり

大雪と騒いで都会の十センチ

今治市 中村 好恵

左手が右手をねたましく思う

片隅で鷹が静かに爪を研ぐ

島根県 安部 恵美子

水仙の蕾ふくらむ春の土

根雪溶け春を告げてる鳥の声

富山県 増田 紗弓

大阪へかるいめまいを乗せた汽車

おみやげで荷物の山が歩く帰路

松江市 佐野 木みえ

旅に出てストレスみんな捨ててくる

朝刊の運勢欄を見て出かけ

鳥取市 石上 悦子

妹が泣くと一緒に泣く子守り

合格の文字から春が今はじけ

鳥取県 国森 武子

断ち切れぬ苦しみ捨てに旅に出る

すぐ濁りすぐ澄む小川いとおしむ

田辺市 大峠 可動

更年期 冬の命は重たくて
老いごころ妻に償うもの多し

大阪府 澤田 和重

気配りの嫁に甘えて病んでいる

傍目には変人 偉い人らしい

唐津市 岩崎 實

梅見ごろ一枚ぬいだり重ねたり

水鳥の川面に群れて土筆伸び

鳥取県 山本 正光

吹けばすぐ燃える火種を抱いている

病院に転居しました病める妻

鳥取県 橋谷 静江

流行の言葉へみんな流される

困ったらやっぱり母の許へ行く

鳥取県 田中 なつ江

若松活けて背すじのばして喜寿迎う

看取られて嫁の温もり肌つたう

泉佐野市 大工 静子

下手な相槌 畳叩いて叱られる

親真似ておがむオカッパ愛らしき

和歌山市 和田 美寿子

シクラメン何時まで生きるつもりかな

痴呆症へソクリしても皆忘れ

河内長野市 水谷 笙子

シクラメン文句あるらしどつと咲き

主婦業に勲章はなし終い風呂

鳥取市 富山 雄幸

燃える恋 橋のひとつを飛び越せぬ

春の風 若い芽が吹くさらさらと

和歌山市 松本 三九

骨粗鬆症恐怖 足のうらまで陽に晒す

結構に見えてそこらを隙間風

岡山市 清水 金太郎

嬉しさと淋しさ残し孫巢立つ

政治家の老人福祉は聞きあきた

米子市 小塩 智加恵

小心を信じてくれぬ肥満体

着ぶかれて本屋で暇を埋めてくる

鳥取市 杉本 孝男

まだ早い世をはかなむに若過ぎる

門松は飾ってみたが誰も来ぬ

(追加) 綾部市 藤田 芳郎

へそ出しルックいつかの娘も子を嘆く

捨ててきた故郷の魔法がまだ解けぬ

使わない捻子も緩んできたようだ

釣竿のしなりは神の命乞い

蓬摘む 亡母も三途の川岸か

全日本川柳誌上大会特選句決まる

第三回全日本川柳誌上大会は、社団法人・全日本川柳協会の主催、文化庁・日本放送協会の後援により実施され、このほど全入選作品が『平成柳多留』第三集に発表された。このうち、特選句(十句)は次のとおりで、六月九日、熊本で開かれる第二十回全日本川柳大会で表彰される。

平成柳多留賞(最優秀賞)

転んでも起きる姿に明日がある

秋田 佐々木良可

川柳大賞(準優秀賞)

両手広げ海の話題か手話の子ら

茨城 植木 利衛

NHK会長賞

すんなりと猫はこの家の顔となる

三重 井垣 和子

経済広報センター会長賞

母の瞳に犬かきの子の海がある

青森 佐藤 竜夫

全日本川柳協会会長賞

転校の窓にでっかい海がある

福島 神保十三夜

全日本川柳誌上大会賞

四捨五入すればすんなり胃に落ちる

愛知 鬼頭 照苑

金婚の夢食う虫を笑いあう

静岡 平山虎竹堂

海の絵が好きで鯨を泳がせる

兵庫 森脇 和子

神の手の近いところに居るナース

和歌山 木本 朱夏

源流に性善説を置いておく

愛知 拓殖 卓也

沙湖抄

小出智子選

いつも山は泰然としてそこにある
春ですなひっくり返す玩具箱
鍋も皿も摺子木もある編集後記
信号の黄色光つてくれている
兄弟に隔りがあるベンの癖
誕生日ことしも雲に覆われて
軽音楽聴かせておこう種袋
縄を切りたくなつたおぼろ月
裸木の風をほどいてやった春
春はまだ 余白に咲かすチューリップ
妻よりも先に逝きたいのは欲か
軋んでる襖もわたしには素直
休耕田鳩や雀が笑つてる
よそ目には大事にされている無聊
全集を読めた病をよしとする
春を描く筆だ大きいのを選ぶ
いつのまに子に縄を解かれてる
旅好きな帽子そわそわして困る
胸に手を当てるとうしろめたくなく
乗り捨てた自転車もうすぐ春ですよ

米子市	青戸	田鶴
兵庫県	倉垣	恵美
宝塚市	永田	暁風
西宮市	西口いわゑ	
米子市	林	荒介
鳥取県	新家	完司
弘前市	斉藤	島
鳥取県	放江原とみお	
今治市	月原	宵明
鳥取県	岩崎みさ江	
阪南市	深日白光子	
和歌山市	桜井	千秀
愛媛県	中居	善信
旭川市	朝倉	大柏
大阪府	榎山	隆
広島市	森田	文
横浜市	保田	絹子
大阪市	鍛原	千里
海南市	三宅	保州
青森県	田中	叶

薬箱夫婦ごっこが果てしない
情けある方に傾く花の首
定年後親父は糸の切れた風
朧夜に明日とつぐ娘と差し向かい
合掌をして捨てるもの多くなる
手習いを始めるふり出しだつてある
大声も立てずにつくし伸びている
イメージがふくらみ過ぎて絵が描けぬ
小半日おけば何でもない怒り
同じ柄のマフラーが行く春の雑踏
メモ帳のメモが時効になつていた
わたしの太鼓ねじをしっかり巻いておく
トンネルの出口だろうか星光る
お笑いの出前にやってくる孫等
足もとに落ちてた運のひとかけら
食器棚使わぬ皿が騒々し
ゴウゴウとストーブ燃えていてひとり
金婚式急いで祝うことはない
同い年夫婦におなじ唄があり
鴉啼くわたしに何を言いたくて
句読点ときには抜いてリラックス
教科書にない生き方が父にあり
振りむけばわたしひとりが踊つてた
日誌閉ず胸のあたりに白牡丹
黒梓のはがきで始まつたドラマ
頭寒足熱からだいたわりあい夫婦

和歌山市	田中	輝子
藤井寺市	田中	透太
尼崎市	田辺	鹿太
八尾市	宮崎シマ子	
米子市	白根	ふみ
八尾市	宮西	弥生
鳥根県	松本	文子
大阪市	西出	楓楽
西宮市	奥田みつ子	
豊中市	田中	正坊
砂川市	大橋	政良
米子市	澤田	千春
富田林市	藤田	泰子
岡山市	川端	柳子
羽曳野市	吉川	寿美
八尾市	高橋	夕花
和歌山市	木本	朱夏
和歌山市	松崎	幸子
柏市	上鈴木	春枝
和歌山市	野々	圭子
和泉市	中川	楓
大山市	早川	盛夫
富田林市	中井	アキ
米子市	林	瑞枝
唐津市	市丸	晴子
和歌山市	堀畑	靖子

鎖長くながく停年後のふたり
 連れだつて波濤はるかへ鳥帰る
 両の掌が愛をたしかめ合っている
 好物を互いに知っているみやげ
 亡き夫の伏せ字の謎は解くまいぞ
 耳に栓絶えず笑顔でいたいから
 斜め読みしてほしくないラブレター
 春愁や名も知らぬ花買うてくる
 南風遂に北風追ひ返し
 ひっかかる言葉が夜を深くする
 順番は何故狂うのか小雪舞う
 幾度か峠を越えた座りだこ
 鬼の目になってみつめる鬼の面
 遊ばせておけば機嫌のよい夫婦
 紅梅も白梅もある謀り事
 すばらしい知恵を拝借する垣根
 短調だあれはストレスためた鳥
 さすがプロ見せ場をちゃんと心得る
 思案に沈むほどのことかと分りかけ
 煮豆屋も天気予報に頼ってる
 庭の雪白紙はがすように消え
 身構えてみてみれば世話になる
 鬼も蛇もおとなしくなる飲み疲れ
 音たてて沢庵食べる水入らず
 マニキュアもルージュも変えて春うらら
 やつと道一つとわかる折り返し

富田林市	片岡智恵子	和歌山市	森口 美羽	和歌山市	中村 好恵	鳥取市	近藤 秋星	和歌山市	山根めぐみ	米子市	小西 雄々	岡山県	福原 辰江	堺市	桜沢あかり	守口市	結城 君子	鳥取市	小谷美ツ千	和歌山市	玉置 当代	米子市	中井 ゆき	倉吉市	奥谷 弘朗	西宮市	亀岡 哲子	横浜市	菱田 満秋	横浜市	河崎マサ子	西宮市	門谷たず子	黒石市	相馬 一花	倉吉市	淡路ゆり子	和歌山県	杉山 精子	枚方市	前 たもつ
------	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------

河口夕焼け流れてこない桃今日も
 春闘へ小石投げ合ってる労使
 母の日に花より嬉し娘の笑顔
 向い風母は総身で受けて立つ
 引き潮へ男結びを切つてやる
 まだ七十遊ぶ勉強しています
 慌てないようにあちこち暇乞い
 試着室春の白髪が目立ちすぎ
 故里の山は素顔で会いにゆく
 ゆらりゆらりと天然色の影
 雑草も名前があつて咲いている
 おそい春かこつ老女のごあいさつ
 よく当る天気予報が憎らしい
 マンションは鍵一本に頼り切り
 三役の夢を果せず散る桜
 六十歳を咲かせる紅を忘れない
 冬眠から覚めて花見がいそがしい
 今日ひと日得したような閏年
 一つやっと覚えて一つすぐ忘れ
 絆の輪ひろげ六十路をゆたかなり
 スナックの出口に落ちていた思案
 子を叱る子の目線までしゃがみこみ
 雪こんこ忘れた人を連れてくる
 母がいるだけでふるさと足が向く
 点火してほしい火種を胸に持ち
 侘しさを土産に帰るひとり旅

大阪府	榎本 落児	和歌山市	細川 稚代	鳥取県	土橋 螢	和歌山市	古久保和子	尼崎市	春城 年代	西宮市	牧淵富喜子	寝屋川市	岸野あやめ	米子市	宇浪屋太郎	鳥取県	西川 和子	岡山県	小林 妻子	熊本県	高野 宵草	大阪府	川原 章久	鳥取市	植田 一京	唐津市	久保 正剣	箕面市	椎江 清芳	岡山市	藤原 一平	鳥取県	西原 艶子	岡山県	富坂 志重	和泉市	西岡 洛醉
-----	-------	------	-------	-----	------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

両親の意見聞く耳持っていない
来ぬ人を待つて盛り塩溶けはじめ
灯明がゆれて仏に見つめられ
間違ひなく春が来ている花粉症
目の高さ合わせて保母は聞いてやり
音痴がうたうと拍手してくれる
その知恵を無断でお借りしています
何の因果か霊柩車に二度出逢う
鼻から食事夢は呑むこと食べること
嫁にも読んで欲しい便りを孫へ出し
梅咲いてからだに張りが蘇る
晩酌がすむときれいな月になる
ミニ流行生地屋はきつと損してる
戦友の声聞く浜に佇っている
新柄のネクタイ買って出なおそう
背伸びして妻が出て行くクラス会
散り際を桜のようにとはゆかず
交流の広さを主張する花輪
齢なりに綺麗でいたい鏡拭く
晩成を信じて辛い点をつけ
受験パス 私の絵馬に神宿る
年金へ夢を託して虚しいな
落ち葉焚く芋の香りをさせながら
若やいで娘とおそろいのスニーカー
検診にやがてやがてが往き来する
それからの川は知らない桃太郎

米子市	石垣	花子
今治市	矢野	佳雲
岡山県	矢内寿恵子	
東京都	瀬戸きん子	
和歌山市	山田	高夫
鳥取県	乾	隆風
兵庫県	玉田	三重
京都市	松川	杜的
尼崎市	春城武庫坊	
宇部市	平田	実男
八尾市	山下美津留	
鳥取市	美田	旋風
横浜市	後藤	早智
鳥取市	岩原	喬水
唐津市	福島	紀一
奈良市	米田	恭昌
今治市	村上久美子	
和歌山市	青枝	鉄治
岸和田市	古野	ひで
大阪市	本間満津子	
八尾市	生嶋ますみ	
今治市	渡辺	南奉
和歌山市	山口三千子	
八尾市	大内	朝子
鳥取県	土橋	睦子
鳥取県	谷口	次男

妻の座を下りる気はない千六本
被災難も混じえて加太のひな流し
わた紡ぐ糸はすんなりとはいいかぬ
合格でやつと一人前になる
こんな犬に驚くほどの金をかけ
歩こうと出好きをさそう無料券
お喋りの耳へ入れとくある打算
娘と孫と川の字に寝るうれしい日
ゆっくりと終章飾る言葉選る
デパートで春を待てないさくら草
北風が去って八十路の庭芽吹く
アルバムに亡母とおしやれを競った日
噓れた声でお雛の客になり
吃水線守って母の愛深し
ほどほどの願いを抱いている余生
無職でも今日の予定は満杯だ
お祭りに合わせて祖母の針更ける

羽曳野市	芦田	絢子
岸和田市	三輪	通彦
大阪市	安永	暁子
鳥取県	上田	俊路
茨木市	堀	良江
大阪市	藤田頂留子	
和歌山県	中後	清史
東大阪市	北村	賢子
宝塚市	丸山よし津	
弘前市	中山	雅城
鳴門市	八木	芳水
米子市	小塩智加恵	
守口市	森川まさお	
寝屋川市	坂上	高栄
和歌山市	吉村さち子	
唐津市	浜本	治幸
福岡県	横地	東川

田鶴さんの句。作者の棲む地には、伯耆富士といわれる大山がある。朝な夕なに、この雄大な姿を眺められることは誇りでもある、安らぎでもあります。大山の姿を見る思いがします。恵美さんの句。玩具箱をひっくり返すような春がやつて来るといいます。作者の心意気とも見えるおおかな句です。暁風さんの句。編集後記を読むと、その雑誌が解るとも言われますが、そのような意味をも含めて楽しい句です。氏の創作へのゆとりにも受取りました。いわゑさんの句。信号は黄色だけではなく、特に黄色が光つてきていると思うのは、真摯な作者の生き方の現れだと思えます。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 4月号から

藤村 亜成

技巧にとらわれず、作者の体臭・息遣いの伝わる作品を取り上げたかった。他にも記したい句があったが、紙数が足らず残念。さて人情に裨さし自分を苦しめる

酒井 勇太郎

生活に追われながらも人情に流され、自分を見失いそうになる葛藤。漱石でなくとも、旅に出なくなる。溜息が聞こえてくる。

口嚙む子は友達を信じてる

神原 まさと

大人の常識では計れぬ子供同士の純粹なつながら、世界がある。友達の良い口には、ますますすかたくなに口を閉ざしてしまふ子がいいらしい。

悪知恵が浮かび笑いが止まらない

森 安 夢之助

小心で善良な人間像が浮かび上がる。善良だからこそ、笑いが止まらないのである。

遊びのないブレーキだった突然死

三浦 強一

仕事一途の過労死か、徐々にブレーキ（病氣）がかかれば、突然死に至ることもなかった。ほどほどのゆとりを持つ大切さをこの句は教えてくれる。

真実を見たくて窓を開け放つ

石川 勝

心の窓を開き、視野が広がると見えてくる実相。しかし、心を開くには勇気がいる。

春うらら去年の借りを思い出す

斎藤 房子

忘れていた借りをボンヤリしている時にヒョッコリと思い出す。春うららが効果的だ。見たことをコピーのように話好き

早川 盛夫

話好きの特性を見事に掴んでいる。コピーのようにとは思わずつなずいてしまふ。

豆腐屋さん豆腐の角を大切に

後藤 黎之助

職業意識が自然とそうさせるのである。意外と気付かぬ点を発見した川柳家の目。老残を刻む振り子の音を聞く

一本 勇太

ある日ふと余命少なきを悟り慄然とする。振り子の音が聞こえてくる恐さ。

過去未来空は一つに青く溶け

市丸 晴子

澄んだ青空に同化してゆく時間。その時、過去も未来もない。永遠の時間と空間がそこにはある。

今 今の主張を溜めている誓

山根 めぐみ

開花寸前まで叫びたい主張をこらえている。今がその張り詰めた状況を効果的にしている。朝の句 我が家の句 パン焦げる

驚見 章

久々に我が家の朝を迎え、生き返った心地になる有様が活き活きと描かれている。

名家が湧かぬ貧乏ゆすりする

山本 玲子

イライラするが浮かばぬ知恵。貧乏ゆすりがユーモラスにイライラを表現している。

春に点火 黄色の花が咲きはじめ

籠島 恵子

春を意識したときから黄色の花が目につくようになる。点火としたところにこの句の生命がある。他に率直に伝わってくる作品。知らんこと幾つになってもたんとある

中後 清史

親も子も耐えることには慣れてない

吉田 孔美子

苜蓿のむ

八木千代選

何時のまにゆがんだのやらよろけ縞
 春愁に自分の長所挙げてみる
 少しだけ倅せだった桜もち

溶けそうなたしを瓶に入れておく
 何か来るよと待ってる右手ひだりの手

ソプラノで春は空から降ってくる
 合わせ鏡へ千の鏡を持ち歩く

書き出しは春がはじまるように書く
 招待席 わたしを曝す位置にあり

菜の花を踏んでく足の親不孝
 座り込み 一人でしても意味がない

枯れてゆく花くびすじあたりから
 これからの事をとバラの独り言

美しいままで火種を葬ろう
 風葬や わたしはどんな死のかたち

菜の花の海にたゆとう影一つ
 空瓶を吹くと泣きとなるピエロ

路の臺 覚めて眠りのものがたり
 掌の中のコインに賭ける目をつむる

藤井寺市 高田美代子

西宮市 奥田みつ子

島根県 松本 文子

和歌山市 岩本美智子

米子市 林 瑞枝

和歌山市 木本 朱夏

和歌山県 小倉 アサ

米子市 白根 ふみ

和歌山市 田中 輝子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市 堀畑 靖子

米子市 足立由美子

和歌山県 杉山 精子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 古久保和子

弘前市 一戸 ツネ

西宮市 西口いわゑ

何はともあれ足跡は残す

弁解をゆるさぬ距離で静電気

親潮に抱かれて油断してしまふ

笑いの質の高い相手に味方する

鍵穴の位置には赤い花を置く

寄せ植えのひとつ一つを地に還す

ブルーが好きグレーが好き迷うたのしき

故あって一枚の皿捨てがたし

気配りが過ぎて深爪してしまふ

偽物に触れた指先熱を持つ

三従に生き いま三猿の隠居部屋

不甲斐ないわたしを棚にあげている

声を出す菩薩探して語り合う

寂しさや中也の風が吹いており

春寒く一度温さを知ってから

インスタント愛情込めて注ぐお湯

食欲のないのに辛い台所

貴金属きつと最後の無駄遣い

勇ましく郵便屋さん通り過ぎ

頭から仕事離れて風になる

なみなみと春は地球に花をつぐ

昔はむかし深く弓外す

ふるさとに残した風が呼んでいる

焦点はぼんやりさして占い師

接続詞 雪に埋めて振り向かず

和歌山市 福井 桂香

寝屋川市 森 茜

米子市 野坂 なみ

八尾市 村上ミツ子

大阪市 鍛原 千里

岡山県 矢内寿恵子

兵庫県 倉垣 恵美

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 福本 英子

西宮市 牧淵富喜子

熊本市 永田 俊子

大阪市 日阪 秋子

米子市 茂理 高代

和歌山市 野々 圭子

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 宮口 克子

八尾市 高杉 千歩

大阪市 津守 柳伸

広島市 森田 文

八尾市 宮西 弥生

島根県 今若 章子

米子市 光井 玲子

出雲市 園山多賀子

富田林市 片岡智恵子

弘前市 佐治千加子

花椿ひっそりとあり老ゆる日々
逃げ腰になると大きな波が来る
人脈の襲にかすんでゆく好意

グーですねきっぱりチャオと言うしぐさ

洪滞に食べるみかんを乗せている

はつきりと敵とわかれば弓も引く

ふかぶかと帽子 真意は分からない

玄関に置いた仮面も忘れがち

半襟の白をどこまで守れるか

少しだけ変化欲しくてみかん焼く

老母の病むくくの敷居がまだ高い

朽ちてゆく駅に水仙活けておく

右に左にシクラメンの首うなだれる

廃線となり枕木の失語症

チンチンはするが尻尾は振らぬ犬

浅知恵の帽子に似合うリボン買う

わたくしのマスターキーが見当らぬ

蛇口全開今日は慶び事がある

樹が呼んだ森においてよ気晴らしに

白いブランコ 親の無い子を乗せてやり

思いのままに愛心できる白い色

甘い水たつぷり飲んだ後遺症

あちこちに目 鏡を置いてまだ不足

昼の月眺めてバスに乗り遅れ

角曲がる向かい風とは知りながら

尼崎市 春城 年代

米子市 木村富美子

岡山県 山本 玉恵

松江市 安食 友子

宝塚市 丸山よし津

米子市 中井 ゆき

芦屋市 黒田 能子

寝屋川市 籠島 恵子

米子市 寺沢みどり

鳥取県 西原 艶子

米子市 石垣 花子

鳥取県 さえきやえ

岡山県 土居ひでの

柏市 上鈴木春枝

倉吉市 米田 幸子

寝屋川市 太田とし子

寝屋川市 岸野あやめ

出雲市 石倉美佐子

鳥取県 権代 康女

寝屋川市 井上すみれ

米子市 澤田 千春

和歌山市 田中 みね

唐津市 浜本 ちよ

神戸市 船津とみ子

枚方市 森本 節子

ひび割れの夫婦茶碗に裁かれる
春風に悔いを残さぬスケジュール
お彼岸がもうすぐですね銀の雨

親の敷くレールの先も不透明

この天気何よりうれし七回忌

閻魔さんから差し戻されて祝い膳

やさしい苗に害虫寄ってくる

人に倦みドミノ倒しに興じ居り

結ばれた絆をほごきたい他人

どの家の鬼もむかしは強かった

うぬづかれか鬼の囁き聞き洩らす

もういちど乗ってあげましょだまし舟

めだたない花には深い祈りあり

八尾市 生鳴ますみ

貝塚市 池田寿美子

鳥取市 坂田和歌子

横浜市 川島 良子

吹田市 栗谷 春子

倉敷市 小野 克枝

大阪市 神夏磯典子

今治市 塩路よしみ

倉吉市 淡路ゆり子

鳥取県 石谷美恵子

富田林市 中井 アキ

八尾市 大内 朝子

鳥取県 岩崎みさ江

高田美代子さんのよろけ縞とはいみじくも書かれたもの。あ

るべき姿はきっぱりした直線をめざしたはずだったのに。さて

歩いてきた道を振り返ってみれば、何時のまに歪んだのか、哀

しいまでによろけて、何度も転びそうになってこの足取りの覚

束ないこと。まさに心模様です。奥田みつ子さんの春愁の深さ

は不安感やら劣等感やら、取るに足りないような事さえマイナ

スに傾いて揺れ動いてゆきます。私というものの存在を否定し

かねない春の愁いから、自分の長所を数えながら私しかない

とやさしい立ち上がりです。松本文子さんの桜もちの淡さ愛し

さ、泣きなくなってきました。少しだけでも倅せだったから、

あんなにはのかな桜いろでしようか。

抜く

中原 諷人 選



その時は相手の過去をすっぱ抜く
手の内を見抜きとほけている策士
抜きつ抜かれつああ人生の並木道
息抜きにぶらりと歩くミナミの灯
抜くなら今だライバル水を呑んでいる
ライバルが抜いても知らぬ顔しとる
あの人を抜いて この方さしおいて
土壇場で抜く楽しみをとつておく
力抜きやつと人間らしくなる
戸籍から花を抜かれる日の華燭
この栓を抜くと幸せ飛びそうで
二世帯へ棘抜いて住む花明り
コンセント抜くと熟睡できました
生き抜いて今掌にかざす紅い珠
道草もしないわたしを抜いて行く

みね 鉄治
めぐみ 章久
希久子
吟平
とし子
宏章
旋風
清史
一平
たず子
保州
玉恵
富美子

成重 放任 選



今繰った辞書また開く老いの日々
齢などは寄せつけないぞ辞書を買う
辞書をつくる手垢に染まる性の文字
辞書にない言葉わたしを惑わせる
何もかも辞書に頼つて老い進む
投函のあとで誤字だと辞書がいう
傘寿では大きな文字の辞書を買う
その奥のもう一つ奥は辞書になし
スランプ続く徒に辞書を繰る
先生の辞書にはカナがふつてある
辞書を引く眼鏡忘れたしめ顔
わかつたふりして後で辞書をひく
心の裏辞書をひいても見当らぬ
ワープロと辞書の間で迷う歳
家系図の生き字引です百二歳
指で書く画数を辞書は待ち
辞書引いてください誤字が多過ぎる
辞書を出し胎児の名前に家族寄る
辞書にない母が持つて知る知恵を借り
じいちゃん生きさま辞書にない教え
隅から隅まで百科辞典が町に居る
辞書にないことが夫婦の道にある

恭昌
坊太郎
一花
ミツエ
マツエ
忠男
あきら
シマ子
希久子
アキ
喬水
捷也
とし子
徳三
美子
満秋
みね
博友
ひで
正雄
吟平
悦男

カブセルに手抜き出来ない蓋がある
丹念に白髪を抜いている日向
温かい土にひかれて草を抜く
桜咲く気を抜いている地蔵さま
日だまりで気を抜いていると猫がくる
群を抜く背丈注視の的になる
サーベルを抜いて序曲が始まった
力抜くための修業に汗をかく
引き抜いたトゲを痛そに見せている
兄弟子を抜くには汗がまだ足りぬ
鼻の差で抜く快感が忘れず
抜きたくばとどろろ抜いて行きなはれ
手を抜けば鎧の盾も綻びる
シューベルト流れ歯を抜く番がくる
かくれんぼ鬼が一番先に抜け
常識を抜くとあした怖くなる
力抜くすべを覚えて峠です
大根を抜くとぽっかり穴笑う
抜き足で老母をみまもる夜もある
筒抜けの嘘が大きな海へ出る
五人抜き淋しい心だけ残る
雄兵を足場に群を抜くなかれ

銀波
一花
京子
朝子
高夫
帆雀
あずき
愛論
清芳
強一
秀夫
雅城
勝
満秋
ただし
吉太郎
清美
とよ子
さお
隆風

追ひ抜いて行くものばかり花野道
抜け駆けと思うな若い人が行く
夢の袋に穴あけて去ったユダ
小才利く男がひとり一抜けた
深入りをすると抜けなくなる手足
佳
人
緋の欄干
女ひとりの息を抜く
地
天
逆転劇が待っている
気を抜くと
足音に抜きつ抜かれつする
枕
軸
抜き採って人の情けを推しはかる

林荒介
日枝子
千加子
虹汀
善信
俊子
早智
故とみお
富美子

辞書

今繰った辞書また開く老いの日々
齢などは寄せつけないぞ辞書を買う
辞書をつくる手垢に染まる性の文字
辞書にない言葉わたしを惑わせる
何もかも辞書に頼つて老い進む
投函のあとで誤字だと辞書がいう
傘寿では大きな文字の辞書を買う
その奥のもう一つ奥は辞書になし
スランプ続く徒に辞書を繰る
先生の辞書にはカナがふつてある
辞書を引く眼鏡忘れたしめ顔
わかつたふりして後で辞書をひく
心の裏辞書をひいても見当らぬ
ワープロと辞書の間で迷う歳
家系図の生き字引です百二歳
指で書く画数を辞書は待ち
辞書引いてください誤字が多過ぎる
辞書を出し胎児の名前に家族寄る
辞書にない母が持つて知る知恵を借り
じいちゃん生きさま辞書にない教え
隅から隅まで百科辞典が町に居る
辞書にないことが夫婦の道にある

悦男
吟平
正雄
博友
みね
満秋
美子
徳三
とし子
捷也
喬水
アキ
希久子
シマ子
あきら
忠男
マツエ
ミツエ
一花
坊太郎
恭昌

思春期のかくして引いている辞典
そしてまた今日も字引に叱られる
わたくしの暮らしの辞書は妻である

エリートの辞書は頭の中にある
若者の辞書から忍が消えてゆく

辞典から明日の輝く字をさがす
老眼鏡一つで足りぬ辞書の文字

二転三転した時辞書をめくつて
辞書にない言葉で若い娘の会話

何度でも教えてくれる辞書がある
雑草図鑑僕には辞書のひとつです

老母からの便りに辞書の跡がある
子育ての辞書に手抜きの文字はない

悪いのは悪いと辞書も言うている
愛とは何か恋とは何だ辞書をひく

佳

あわてるな騒ぐなとあり父の辞書
紙巻きの煙草と消えた兄の辞書

辞書見ても女心は読めません
辞書にないことば若者から跳ねる

二転三転辞書より貰う知恵袋
人

医学書を引いて調べるわが病
地

母の辞書手抜きの言葉見当たらん
天

凜として辞書は噂を寄せつけぬ
軸 肝心な所に紙魚の食う辞典

杜 的
荒 介
武 春
忠 雄
鉄 治
勝 治
あやめ
多哥由
宵 明
しげお
路 児
保 州
寿 美
重 人
螢

溶 け る

波多野五楽庵選



遺伝子を溶かしたような孫が出来
冷凍魚溶けても主婦の立ち話

人間の森に溶け込む清と濁
新婚の屋根から先に溶ける雪

オンザロックコトリと溶ける失意の夜
日溜りの冬から先に溶けてゆく

胃で溶けず腸で奇妙に効く薬
大雪が溶けて歩幅がもどります

点と線つなげば溶けるわだかまり
反対派に溶け込まれた多数決

悲しみを溶かす山河が里にある
民衆の対話で溶かすわだかまり

溶けるまで待てない飴を噛み砕く
菜の花畑蝶もわたしも春に溶け

たとえ愛が一夜で溶けてしまつとも
打ちとけてから腹の内曝け出す

嫁ぎ先に溶け込むまでの嫁の鬱
絶望の心が溶ける絵に出逢い

春の野に溶けて戻らぬ草野球
妥協すると群に溶けこむのが早い

バレットになかなか溶けぬ風の彩
裏側に赤い懺悔が溶けている

角砂糖別ればなしに溶けにくい
蟬り溶かす魔術を妻は知る

溶けた振り許した振りもして夫婦
毒舌を水で溶かして薄めとく

信濃路で原田泰治の絵に溶ける
致死量まで毒を溶かしたい話

粉雪は女の髪で溶けたがる
簡単には女の髪で溶けたがる

平均寿命をすこし越えてから溶ける
別々に話せば誤解溶けるはず

水と油溶けないままに同居する
一本のボトルに溶けるわだかまり

初永お世辞が下手で直ぐ溶ける
かぶりつきでアメノウズメの舞に溶け

とよ子
勇 太
良 知
ちかし
一 朗
一 花
たす子
洞 庵
武 史
正 史
伊津志
寿恵子
和 重
雄 々
あずき

佳

斜めから攻めると父はすぐ溶ける
溶かされず溶かさず楽しい会議する

輪の中に溶ける仮面をつけかえる
毒舌を酒に溶かして吞ませ合い

媒体を溶かして蝶は共犯者
人

目線少し下げてかごめの輪に溶ける
地

溶けそうな語尾が男の骨を抜き
天

角砂糖溶けて結論話しだす
軸 溶けるのも溶けぬも神のおぼしめし

日枝子
崇
南 奉
しげお
達 子
洋 子
弘

あき
美代子
清 芳
愛 論
紀 一
荒 介
子 龍
みさお

芳 郎
博 友
正 剣
四 郎
帆 雀

寿 美
銀 波

吉村さち子

初歩教室

題一 積む

吉岡美房

概して初歩の方に多い問題点は、
①自分だけの思い込みで意味不明の句にな
ることが多い。

②単なる情景描写、事実の報告、説明だけ
に終ってしまっている句が多い。

③何を訴え表現されようとしているのか、
作者の存在感のない心の見えない句が多い。

④事実をあまりにも正直に報告しようとし
て、無駄な表現が多い。

等々ですが、これらのことを注意していよい
よのご精進をお願いします。

添削句

札束を積んで若さを買うという 孝男

(札束を積んで若さが買えるなら)

晩学は賽の河原で石を積む 崇

(石を積むような晩学挫けまい)

下積みで不満抑えてばかりいる ますみ

(下積みの不満マグマを溜めている)

努力積み重ねた箱はすき間あり 信子

(積み上げたつもりで努力の間隙を見る)

積み重ね何年自今やっと 美恵子

(積み上げた努力でやっと自信つき)

泥舟に愚痴と後悔つんでおく 玲子

(後悔を積んで泥舟押し流す)

寺参り善根積むというおひと てる代

(善根を積んで仏に近くなる)

野仏の肩の丸みに積る雪 明美

(野仏の肩に雪積む村が出る)

雪の下住む苦をよそに雪見客 辰男

(雪見客雪積む下の苦を知らず)

積雪におわれ雪のけ今日もよし とよ子

(積雪の苦勞を運ぶ大寒波)

駐車場軽もベンツも屋根に雪 黎之助

(雪積んで次々入る駐車場)

降り積む雪に今年の冬を問う 郁子

(豊作を降り積む雪に問うてみる)

屋根に積む雪と少ししか過疎の老 治延

(古い二人悩まず雪が屋根に積む)

裸木の絵になるだけの雪を積む 隆

(裸木に絵になるほどの雪を積む)

風寒し賽の河原の積む石に トキ

(石積んで賽の河原の寒い風)

積み立てが終り望みのものが買え ふみえ

(積み立ての満期へ夢が大きすぎ)

積み立てた貯金に利子が冷たすぎ 幸次郎

(積み立ての利子減らされて無抵抗)

楽しみを積み立ててやる曾孫ある 伏静子

(こつそりと曾孫に貯金積み立てる)

まあちゃんの夢がいついっばい積木のお城 きん子

(孫の夢積木の城に詰つてる)

積み上げて壊してハシヤグ一才児 叭笑

(積木積み壊して孫に遊ばれる)

子の積木崩した父と大クシャミ 志重

(積木する孫にクシャミを睨まれる)

孫の積むオモチャに手出ししたくなる 捷也

(手を出して孫の積木に叱られる)

ふとん積む後からくすす孫がいる ふゆ子

(布団積む後から孫に崩される)

やさしさに積る話の母年忌 トヨ子

(母の忌に積る話が眠らせず)

さまざまな会話の中に会話積む タツエ

(さまざまな会話の中に愛を積む)

愛と忍積み重ねて五十年 タミ

(愛と忍積み重ねて五十年)

玉の興涙がそつと積んである 宏

(玉の興父の涙をそつと積む)

入試前知恵と術とを積み上げる 方子

(積み上げた努力で挑む子の入試)

入試パス下宿の荷物春も積み りつえ

(入試パス未来とともに荷物積む)

親馬鹿が子の夢へ積む札の束 春 枝

(札束を積んで親馬鹿に賭ける) 幸 枝

ほこり積む死ぬことは無いと言われても 死ぬ事はないと下宿で埃積む) よし子

積むほこりさっぱり雨で流したい (悩み積みさっぱり雨で流したい) 旭

年輪を積み育ちゆく杉木立 (年輪を積んで真っ直ぐ伸びる杉) 雄 幸

雪割草思い出積んで春を待つ (思い出と夢積み春を待つ草芽) 寛 子

電車ここに積み残されたあの日から (縄電車積み残されて日が暮れる) 行 子

縄電車積み残された大器の芽 (縄電車塾へ行く子を積み残し) 美寿子

積む人と積まれる荷物仲が良い (宅配の積荷が急かす深夜便) 宏 章

知恵袋経験積んで鍛えられ (経験を積んで我が社の知恵袋) (伸) 弘 子

バスガイド経験積んだ名調子 (経験を積んでガイドの名調子) 美 子

下積みを重ねた上司部下を知る (下積みの苦労知ってる叩き上げ) 多哥由

札束を山に積んでも動かない (札束を積みまれば動かない) 正

札束を積みまればの嫌なメカニズム (金積みめば何でも出来る世を憎む) 正

泡銭積んで一票買いに来る (一票になると限らぬ銭を積み) 民 平

積んどくの司馬遼太郎出して読んでいる (積んどくの司馬遼太郎出して読む) 勝 巳

大地震積み上げた本に埋められ (積み上げた幸せ消した大地震) 日出子

難病治療積み重ねてぞ医師多忙 (優しさを名医の腕に積み重ね) 一 乗

性凝りもなく悪徳を積み重ね (神の名で悪の限りを積み重ね) 義 男

表現・着想ともに立派な句 七十年あつという間の刻を積み (経験を積んでるだけはある助言) 昭 治

経験量オーバー気味の父の肩 (経験を積んだが老いが先に来る) 三 九

陰徳を積んで先祖に会いに行く (徳積んで晩節だけは汚さない) 三 重

徳積んで冥土の道を広くする (積立ての満期を狙う脛かじり) 叭 笑

水源の山にうれしい雪が積み (一善を積んで余生に彩を添え) 孝 子

積立ての満期に夢が先走り (地が震え積木崩しに街が消え) 佳 江

孫の目がきらきら光り積木積み (苦勞積み母の背中が丸くなる) 忠 男

石積んでケルンと呼ばれロマン持つ (石積んでケルンと呼ばれロマン持つ) 木 管

石積んでケルンと呼ばれロマン持つ (石積んでケルンと呼ばれロマン持つ) 蕉 子

コーナーの私の城に本を積み (積み上げた財飽き足らぬ天下り) (幸) 幸 子

嘘に嘘積んで地獄を呼び寄せる (関病の父へ写経を積み重ね) 幸 夫

石を積み養の河原で親を恠い (枕もと眠り薬の本を積み) 芳 水

下積みの苦勞が生きた腕の冴え (母親を積む話で独り占め) 君 江

子を積んで真婦に七坂きつかった (積み上げた瓦礫悲しいお正月) 高 栄

信じてた積木崩れる音がする (一生を下積みだった父の靴) ミツ子

夫逝って子と積み上げる明日の城 (愛積んで性善説を信じ切る) 剛 治

あでやかに精進積んだ舞扇 (相聞歌熱い想いを積み上げる) 一 典

母訪ね積む話の掘炬燵 (苦を積んで積んで夜明けがまだ遠い) 章 子

凡夫婦いつかいつかの夢を積み (リストラの前に実績霧散する) 和歌子

うつつらと埃一人を病んでいる (下積みの苦勞がきつと花咲かす) 早 智

私の句 雪港未練一つを積み残す (題「煙」5月15日締切(7月号発表)) 武 春

雪港未練一つを積み残す (題「煙」5月15日締切(7月号発表)) 三 津 子

雪港未練一つを積み残す (題「煙」5月15日締切(7月号発表)) 三 郎

お地獄城

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳クラブわたの花(前月分)吉村一風報

灰になる日記煩悩舞いながら
逃げるのはやめて溶け込む輪の流れ
割草着母の涙を見てしまふ
涙などかれてしもたと思つたに
情けない男が逃げるかけこみ寺
メモ添えたケーキに涙もろくなる
ちよつとずつ常識変えてゆくヤング
空き箱は母ならきつとつておく
軽すぎて身に添ひたし羽根布団
噂千里悪口の紙吹雪舞う
責任はバブルの舞いの観客で
花束贈呈涙を見せぬ賭けに負け
空港の母の涙に見送られ
鬼の目になみだ苦勞の娘が嫁ぐ
言葉にはならぬ涙のありがと
演技する女の涙すぐかわき
涙にもならぬ罹災の日々に耐え
逆立ちをした日の若さ失わず
露ほどの情けへほろり涙落ち

シマ子 一風 幸枝 春子 道子 剛治 春江 幸子 けい子 明子 トシエ 朝子 ますみ 友甫 隆 美津留

叱られて枕を濡らす子の寝顔

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

鬼遊

根回しにカアちゃん知恵少し借り
大虎も酔いが覚めれば猫になる
宝石に縁ない老母のクスリ指
豆まけど心の鬼は追い出せず
弁当に春の香りが満ち溢れ
へソクリをかくした場所を忘れてる
写経する一字一字に心澄む
停滞のニュース横目にコタツ番
あつさりと言われて分かる悪い癖
一言が過ぎて今夜も目が冴える
駄々ツ子のようにホームレス引抜かれ
自惚れた自問自答のソバ枕
平等に長寿ばかりを考える
無農薬でも虫食いよけて買い
食べた日の体の強さまだ八十
ウドン屋の箸立てすてて聞いている
あと一口欲しい処で箸を置く

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云見報

淡泊な恋へ真白き落ち椿
後追いを止め淡泊な愛と知る
タロットに頼る淡泊な余命表
淡泊な男 心根あたたかい
ポリグラフにかけても淡泊な波形
縮んでも生きてる限り背伸びする
肩幅が縮んで穴に落ちやすい

萬的 とみ子 澄子 よ志子 森子 ふみ しげお

よく寝たと肩膨張らぬ家がいい
おねだりの時には外す肩パット
肩の荷も夢も分けあう夫婦坂

散り急ぐ肩には皆母親の肩を持ち
孤立無援子には皆母親の肩を持ち
栄転の肩へずしりくる辞令
雑魚ばかり肩寄せ合つた鍋の湯気
スクラムの肩はフアイトの血がたぎる
肩書は一つでよろし古希の旅
ひとり寝の肩より冷えて文庫本
ふるさとの風にあつさり溶けてみる
趣味の多さをあつさり医者にとがめられ
あつさりと言ひつこめ冬ごもり
あつさりと靡く女は美しい
あつさりと運命線が横を向く
あつさりときれた葉がおそろしい
山茶花が咲いても蝶は冬休み
晩学のペンと余生の旅鴉
住専のニュースが喉につまる朝
ブレーキを踏み合い夫婦しています
旅慣れたガイドの代りぐい出来
よろこびは新幹線がやつてくる
みんな達者で春を待つてにぎり飯

岸和田川柳会 田中 文時報

満足と言いつつ愚痴をこぼす母
古本に未練が残る震災地
子の手前捨てた雑誌に湧く未練
義母死んでこうしてやれば未練残り

東雲 雲 英一 マツエ 克治 庸佑 かおり 茶の子 杜的 薫 艶子 静江 ルイ子 波留吉 瀧小 芳子 源一 スミ子 稲子 白溪子 恵美子 節子 苑子 昭二 信博 けい子

身の錆で逃がした椅子にある未練
行間に涙の跡のある辞表

未練心またダイヤルに指かかる

自立する女未練を捨てて来る

未練たち切るにも酒の力借る

薬箱期限無効もふたつみつ

安全の神話無効となるバンク

グリコ犯喜ぶ顔が憎らしい

無効票反動分子の策謀か

偉そうに出した名刺が仇となり

一枚の名刺が決める道もある

誰ひとり名刺を持たぬ気さくな輪

照れて出す教え子長のつく名刺

名刺などおまへ僕を見てほしい

造花のバラに似ている女の花名刺

六十路来てなお燃えつきぬ火種あり

燃えつきて窓際の席移される

古里へ真つ赤に燃える鮭の群れ

浴衣着てさっぱりすると燃えてくる

燃えるものまだ持っている春を持つ

チャンスさえ巡れば燃える火種持つ

完走に燃える男の泉州路

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

祝盃だ こぼれるほどに注いでよし

寒梅を一輪ざしに生けて春

無礼講も宴たけなわの酒が生み

成人式の孫は見事な男難

トンネルの事故人命の無事祈つたに

呂 万

甚 一

一 弥

洞 庵

柳 宏子

路 子

洋

辰 郎

白 光子

朝 一

盛 之

文 時

さよ子

ゲン吉

萬 的

敏 光

弘 象

一 斉

東 雲

ひ で

通 彦

狸 村

すみれ

伊久栄

美恵子

南 正

千代女

花を生け心に余裕持つ暮らし
捨てる神ひろう神あり屋台の灯

故郷は遠くにあって年一度

残留孤児遠い祖国に想い馳せ

おじちゃん御飯よ三度目に聞こえ

髭伸びて鏡に春はまだ遠い

新しい言葉で辞書で引いて見る

流行を追って古着を持て余し

新しいネクタイしめて初デート

新しい年に禁煙誓います

過去を棄て新たな希望ふくらませ

新調の振り袖孫の晴れ姿

出るとすぐ青空市で羽が生え

九十年歩きつづけたこの健康

新しいおべで笑顔こぼれる児

東大阪川柳会

森下

愛論報

雪舟が泣いた涙で画くねずみ

住専のねずみがかじる札の束

飽食の猫もねずみも肥満体

ねずみ算増やす術には元手いる

少年の希望へ海が風いでくる

だんだんと小さくなって行く希望

夢抱いて背筋のばせはまだ若い

まだ天に届かず唸っている風よ

子供には回る寿司だけ連れて行く

おけらの火くるくる回す夜の闇

寒風と回り道さす赤ちやうちん

のぶ子

富士野

種子

光 水

亜 矢

た 女

た だし

禅 心

久 子

知 恵子

楽 山

旭 泉

善 代

吟 平

秀 香

志 重

太 一

孤 舟

恭 昌

隆

湖 風

度

朝 子

シマ子

東 雲

章 久

頂留子

巡回の死角で金庫破られる
北風に落ち葉が回る戸を叩く

信濃路の化粧地蔵に雪が舞う

才媛の化粧動詞が乱れない

アイライン心変わりのある化粧

孤独なお化粧を落とす午前二時

化粧より心の素顔磨きましよ

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

手に届く春待ちわびる若菜摘む

頭だけ司馬遼太郎似の白髪

春雨を照らして車走り去る

倦怠期妻には春がまだこない

吉野紙桜渡きこむ里の彩

サクラ咲く風さらさらと笑い出す

義 正 子

比 ろ 志

弘 治

正 治

一 笛

比 志

義 芳

正 子

比 志

弘 治

正 治

一 笛

比 志

義 芳

正 子

文 秋

愛 論

弘 直

雅 文

真 柳

治 也

賢 子

治 也

真 柳

治 也

賢 子

治 也

真 柳

治 也

賢 子

治 也

真 柳

治 也

賢 子

治 也

真 柳

治 也

賢 子

治 也

真 柳

治 也

賢 子

治 也

地にさくらばくの耳には毛が生える
カラスが鳴く渴いた喉をふるわして
喉元を過ぎて遠くが見えてくる
喉笛が冷たい風にひゅると泣く
言いたい事言つて黙った喉仏

日韓の喉に刺さった竹の島
我が孫も早年頃か喉仏

春籠ぼつくり寺へ招かれる
手招きの鬼と菜の花の海へ
招かれた仮設へ小さき雛を提げ
招待席でうっかり義理にけつまずき

学友を招きステーキ焼いている
和を保つ言葉敬語になっている
立春からの雪に戸惑うハイウエー

兵士墓参る人なく苦むしぬ
洗い桶しまい今日一日の無事
風船が利那の恋をふくらます
まして春影ふくよかにしておんな

マニキュアもルージユも淡く冬を脱ぐ
一杯のお茶で流せる蟬り
残業がないと赤字になる家計
哀しみに耐えた花ほど美しい

川柳若葉の会
宮崎シマ子報

出稼ぎの汗留守宅へ組む為替
雪が降る難波の町の化粧かな
二浪めの心の中は吹雪いてる
雪シンシン信濃の里の道祖神
停年後優雅にすごすべレー帽

夢の助
向小
瀧小
まさお
千恵
伊三郎
芳子
昌子
武庫坊
紫香
白溪子
すみ
吉太郎
キク子
求芽
澄子
光穂
歌子
正一
鹿太

運転手帽子のあとがついている
さよならと振った帽子を誰も見ず
山吹色の帽子に替える倦怠期
目出し帽の子を悪漢かと思つ

三幸川柳教室
三宅
保州報

輪の中へ老化を捨てに今日もゆく
横顔に火の輪潜つた跡がある
輪をかけた噂話が跳ね回る
輪になつて話そつ角も取れてくる
どうしても輪に入れない子の積木
柚子ひとつ輪切りに浮かせいい湯だね
輪の中に居ても否めぬ孤独感
無我になる波風高い輪の中で
梅一輪生あるものは美しい
強烈で輪からはみ出ている個性
五十路坂登る車輪に油さす
輪が散つて西陽に鬼のひとりぼち
私が輪切りにされてゆく妥協
いつも輪の中に融け込む笑い皺
混迷の世相に愛の輪をつなぐ
輪を描いて鳶に隙のない視線
陽が西へ沈む今年も旨い酒
この秋はうまいボージョレ飲めるかな
今年あたり何ぞええこないかいな
おみくじに難産とあり五十歳
軽やかに舞おう今年の三番更
精一杯生きて今年の灯を点す
去年から今年へ投げた石拾つ

香住
あずき
喜美子
シマ子
美子
武春
美智子
悟
孝子
よし子
町子
めぐみ
公子
桂香
秀男
高夫
保州
三千子
初子
朱夏
当代
章子
みね
貞子
千秀
美美子
親路

身の軋む日ばかり増えて去年今年
ねずみ年大きな音はないだろう
昨年今年もおなじ肩の凝り
今年あたり枯れ木に花を咲かそうか
枯樹生花今年の成果信じる
折れた矢を集め今年の糧とする
元旦の郵便受けに来た今年

南大阪川柳会
金井
文秋報

震災におばさん達は強かつた
目線下げると申し分ないくらし向き
縄文が論争となる土器出土
邪馬台国論争をきく土の中
おばさんが履けばモンペになるパンツ
申し分ない青春よにきび面
退社ベル鳴れば本領発揮する
養生に出かけた山の湯で倒れ
養生の頭へノルマ駆け回る
言い出せばなんぼでもある申し分
テレビ論争輪の外にいる憤慨者
本領を忘れていない猫の爪
論争の果ての頑固を笑いい
おばさんの旗一振りに動く票
養生をしてからあの人丸くなり
申し分ない同居が気に入らぬ
叱られておばさんところが避難場所
本領を発揮胃ぐすり飲んでいる
おばさんはダンスの相手探してる
おばさんも無理して高い靴を履く

靖子
正雄
百合子
和代
さち子
鉄治
和子
楓楽
凡子
萬子
直子
寿美
恒明
柳宏子
良
庸佑
文秋
志華子
秋子
頂留子
久峰
正博
勝美
章久
重人
東雲
千里

— 90 —

論争に立場の違いさうけ出し
エプロンを付けると持ち前の動き
本領を発揮出来ずも皆我が子
論争を避けカミソリを研いでいる
月末に妻の本領ものを言う
おばさんと呼ばれた頃が花だった
酒煙草すぐ取り上げる聴診器
本領発揮のチャンスくれた二度の職

川柳後案吟社

従野 健一報

手鏡の鬼女におのくのは私
火を抱いた心が醒めどしよつ
腹のない男地声で勝負する
無人駅栄光の日は忘れよう
消しゴムでけてやろうか少年の罪
親離れ子ばなれ春は急ぎ足
ど忘れにお互いさまの老い二人
何よりも幸せ元氣な妻がいる
一合のとき汁で足るネギの鉢
妻と子が喜ぶ幸せだけでいい
豆まきに鬼がにっこり酒がある
冠雪へ梅寒々と咲き始め
鼻歌の鬼と手を取る散歩道
かくれんぼ鬼が帰った夕餉どき
執念の一打で変わる人生譜
妥協して背骨が少しずつずれる
七草の粥をよばれて町平和
網持では童子に帰る道しるべ
議事進むひそひそ話す舞台裏

悟郎 智子 真砂 柳伸 久一 公一 三男 幸子 義親 道博 拓治 桃風 柳五郎 哲郎 美智子 浄美 博友 青銅 邦季 まさお たけ志 正秀 吟平 敏明 金吾

文明が詰まって高い土地になる
若き友雲上より妻子見る
畳紙の衣魚どことなく亡母と似る
忠実に汚職を護る秘書哀歌
猫の足拭いて上らず青畳

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

沢庵をボリボリ恋文など書けぬ
ナムアミグ唱えて世間広く見る
暖房のバスで沢庵よく匂う
受け皿が乾いてしまふ待ち惚け
人事課の風の行方が気にかかる
予約した患者が来ない聴診器
義理堅い夫で今夜も呑んで来る
列車遅延コトコト走る北の春
ヘルパーが来る日寝返りばかり打つ
沢庵が主役に座る妻の留守
離婚したくて夫の退職待ちわびる
我慢した釘はくの字に曲がってる
うしろ向き涙は肚の底に置く
妹が嫁ぐ日狸寝入りの姉でした
女王様バッキンガムでむくれてる
悲しみに我慢を千した女傘
雪かきに疲れて春を待ちわびる
自惚れにちくりと刺されむくれてる
新婚はすねてむくれて深くなり
一握の砂の慢心波が消す
我慢する父の涙を垣間見る
むくれてもむくれてもなお君が好き

吉則 信善 草風 鯨虎 秋月 五楽庵 花峯 一花 銀波 黙人 井蛙 一光 菅平 しげる ふさふ 生恵子 祥子 ツネ 嵐蝶 雅城 花匠 龍人 順三 北歩 柳々 隼人

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

親離れ紙飛行機が届かない
折紙で鶴折っている回復期
ブレハブへ壁紙バラの色を選ぶ
たとう紙をほどくたのしみ女ゆえ
片方の靴が謀叛へ向きたがる
片方の肩で運ぎめる虫めがね
片方の手で進めぬ虫めがね
片方のエジンダだけで古希になり
片方にニトロを抱いて独楽ねずみ
聞きのがしたつぶやきSOSだった
財布から諭吉ぶつぶつ言うて出る
なんでやねんつぶやきながらテレビ見る
愛が欲しくてときどきつぶやいている
皿洗う妻がつぶやく台所
もういいですソツつぶやき逝った母
ふくよかに旅愁をくるむ桃の里
ふくよかな雛の頬つべを軽く拭く
ふくよかな女と食べる桜餅
ひん死の街少しすこしとふくよかに
ふくよかに妊り愛を信じきる
ふくよかな人柄友が寄ってくる
ふくよかな笑顔に触れて気がほどけ
偏屈な店のおやじとつまが合う
死んだ人は嘘をつかないので怖い
子育てのシミを残した家に住む
春風のぬくもりを知る桃の村
不景気もいいな街が静かになりました

香子 道胤 哲子 絹子 富喜子 江美 凉子 泰子 源一 房子 佐江子 キク子 重人 正坊 まさお はつ絵 よし津 透太 義子 たず子 ルイ子 いわゑ 佳秋 能子 鹿太 求芽

誰と会う約束もないティールーム
歯切れよき合格電話凍て解ける
こだわれば紙の雛にもある愁い

竹原川柳会

時広

一路報

春 蘭
みつ子

目をつむり大地の音を聞いている
外人と話す英語にあこがれる

高史 子
中千 枝

正装の男と春の使者を待つ
赤と白福モチについてひな飾り

蘭 幸
規 代

福よふくさんどこにもいない待つとする
福々し笑顔が素敵隣の娘

夏 喜
明 子

小福でよし家中元気で恙なし
一身に春の期待よスイトピー

笹 舟
比呂 子

歩いて来た厳しい道は皆宝
一期一会椿の上の白い雪

喜久 恵
淑 子

焼け跡の山は一途に春を待つ
かくれんぼ待っても鬼はもどらない

栄 恵
一 枝

春を待つ土手にふくら路の臺
潮時を待つて妥協の旗を振る

臣 子
喜美 子

これ以上待てよコヒー三杯目
天秤のまん中辺で待つ男

静 佳
静 風

宇宙という舞台をもっている若さ
舞い落ちた枯葉がまもる木の根っこ

政 己
房 子

栄枯盛衰古城の庭に舞う落ち葉
神楽舞う長老の芸過疎に生き

節 夫
蝸 牛

木の葉舞う元氣な孫の音がする
会釈する女に牡丹雪が舞う

螢
笑 子

背広着て父には父の舞いがあり
鬼に成り切らんと舞えぬ鬼の舞い

菁 居

雲切れてるてる坊主舞いたがる

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

一 路

えんぴつを削り続けている夫婦
愛一途見事に霧が晴れてくる

栄美 子
寿 子

愛妻弁当春の香りも添えてある
啓蟄だ虫も子供の声も増え

さち 子
柳宏 子

一の矢を見事に当てる深い読み
文楽が見事に息吹くなにわ弁

利 治
武 春

眼鏡かけ替えても読めぬ見事な字
春一番見事に夢をこわされる

英 子
豊 太

筋のよき見事射止めた七冠王
お見事と言われ調子が狂い出す

和 子
年 子

引き際の見事さ拍手惜しみなく
生傷が増えて引退意識する

光 代
二 南

桜咲くまた心配の種ふえる
おふくろと呼んで理屈が増えてくる

射月 芳
稚 代

女性白書姉さん女房増えている
夕焼けに夫婦そろって歎けう

三 男
淳太 郎

春には春の芽吹き大事にする夫婦
只今は四海おだやか夫婦舟

輝 子
美 子

夫婦しか合わない鍵を持っている
前世でも夫婦であったかも知れぬ

美 羽
紀久 子

浮き沈み夫婦の旅路揺れて老い
ちよつと顔を出す気配りしてくる

誠 子
紫 香

ほどほどの気配り空が青かった
気配りの言葉に元気づけられる

ダン 吉
和 重

陰口の中で気配り教えられ
子の進む道の小石はどけてやる

千寿 子
紀美 女

産み月も近い家計をひきしめる
言い訳が増える夫の朝帰り

白 光 子
精 子

夫婦別姓悲しいドラマ生む予感
レパートリー増えて自信の顔に艶

綾 子
克 子

川柳ささやま

酒井

靖子報

ふり出しにもどる六十路の坂さびし
割り切れぬ問題そろそろねむくなる

とよ 子
恵 美

物好きのペットになった不仕合せ
どんぐりが競いあつて村まつり

純 子
とみ 子

待つことのある幸せを胸に抱く
野仏が指切り見る村はずれ

つや 子
和 子

松の雪仏間の窓を開けてあげ
村捨てた子呼び寄せる祭り笛

ヒサ 子
八重 子

鬼は外隣の犬が吠え立てる
村おこし私は炭を焼いてます

市 三
素 水

合格の胸新しいペンをさし
春来れば村の話題も春になる

美智 子
末 野

無関心の陰で鈴振る老婆心
鬼去んで今日か梅の咲く気配

芳 乃
多美 子

無関心なのは力になってくれ
無関心にしては詳しい他人事

すず 子
富 美

無関心というフラフラがいま怖い
街の灯に疲れ老後を村に住む

可 住
靖 子

城北川柳会

吐田

公一報

太陽の塔よりはるか太郎逝く
ナツメロを愛した遺影にテレビ向け

義 江
秀 夫

正月の紅梅二輪まだ咲いて

美代 子

雪の舞う夜は鍋焼家族待つ
三回忌あの世でクシヤミしてる叔母
独房で丸めた嘘の糸ほぐす

ボケベルが俺の行動監視する

天変地異鳥の子感に負けました

医は機械が読みとっただけ手当する

医者の子感当ったように呑む薬

嫌な予感当ったように計報聞く

癌告知医者も苦しむ板挟み

寒椿艶を残してポトリ落つ

幾つかのロマン漂う男の背

いやな予感見事に当る待ちぼうけ

花作り上手な友の人嫌い

水張る一匹金魚の強く生く

お喋りがしたくて姑の医者通い

ええ格好やめて常着の軽い肩

板挟み裏読めなんだ日の不覚

初大師仏の顔も寒そう

村の医者心の傷も聴診器

板挟み二人をつつむ雪明り

決断の踏み絵がでかい板挟み

ストレスへ少し派手目な服を着る

遠浅に油断していた蟹の群

嘘いくつも重ねて座るデカイ椅子

川柳岩出

小倉

アサ報

昌子

精子

ロマンチックに風と絆を深くする
純粹な女でいたい春の川

千尋

政子

あき子

扇帆

典子

史風

とし子

登美子

久留美

高栄

睦子

一枝

あい子

春蘭

倫子

満津子

達子

柳影

白峰

寿美子

ただし

八重

昭子

公一

アサ報

昌子

精子

底冷えを尻目に春の土起こす
思い出のどこにも母がいる絆
頭角は流石と思う血の絆
底冷えに小春日待つ母の膝
友情の絆で誤字もあたたかし
墓は別妻は絆を切りたがり
親と子の絆風さえ入り込めず
あらためて強い絆を知る試練
娘が嫁ぎ夫婦の絆あたためる
空晴れて若い二人の春の川
親離れ子離れ絆あってこそ
春の川小さな命蠢いて
母と子を結ぶ乳房に踏み込めぬ
底冷えに負けずに話す集会場
幸せになつて絆がゆるみだす
人知れず出来た絆は切れもせず
底冷えに夜なべの亡母の影偲ぶ
底冷えを冬の満月倍にする
春一番流水遠のく北の川
底冷えの手をあたためる母の胸

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

今日もまたあの人この人お茶を飲む
寝つかれず遠い昔のあれやこれ
走らんか 見ては泣いたり笑ったり
古里の温かい友良いところ
わだかまり温かい一言泡と消え
新しく出来た町には坂ばかり
節分にシャンパン飲んで齢かさね

ふさ子

紀一

青琴

治幸

ちよ

圭

公一朗

火のように燃えて静かな水となり
花時計春の子感に衣替え
生きているうちは見出せぬ夫の味
嫁の腕オーバーに褒めもう一本
春迎う梅のつぼみに霜厳し
業界のコトバで民をたぶらかし
末娘の三三九度に潤む父
負けるなど僕にささやく空の青
バレンタインデーの一個にこめた愛
家計簿へ去年の余震まだつづき
ホームレス動く歩道に動かされ

笑い満つ結納飾る青盤
純米の新酒ですよと酌いでくれ
まっさらでかしまつてる一年生
新しい春へとはそう夢風船
新監督新鮮旗を立て
ひと組になると手強い蟻のむれ
組合せがいがピカソの絵になった
出直した情けの分かん人と組む
亀の歩と組んでよかった長丁場
春を呼ぶ風花が舞う無人駅
さり気なくふる舞い過去に触れぬよう
笑わぬい約束で舞う古希の酒
わたくしの胸で舞うのは亡母の指
舞い終る扇傘寿の型になる
やがて舞う空へ青虫あこがれる
優しいと言われ意気地のないヤング

東川

洋

虹汀

晴子

あき

幸夫

四郎

タミ

高明

弘

久仁於

正剣

度

美津留

賢子

朝子

東雲

頂留子

夕花

一風

英一

三男

ますみ

泰

森子

柳宏子

洋

東川

祭太鼓担ぐヤングのUターン

道草の充電ヤング春を摘む

アメリカ村へヤングの息を吸いにゆく

何か一つ醒めてヤングの盆おどり

どつぷりと平和に湯冷めするヤング

バンザイのかたちは春のヤングマン

春場所へ稽古を積んだ肌の張り

旅立ちに母の涙を積み残す

積んだ罪ふりかえりつつ仏の手

下積みの苦勞ばなしを寒牡丹

研鑽を積んだモデルの裾さばき

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

ほのぼのと一輪さしに梅薫る

ほのぼのとした輪だんだん太くなる

ほのぼのと余韻が温いお人柄

ほのぼのと触れた心にほだされる

ほのぼのと今日のよき日感謝する

ほのぼのと明ける大地に生きたる

摘んでも摘んでも悪の芽が伸びる

六十になって芽の出ぬことも知り

育つ芽をうっかり摘んだ失語症

春の夜生きているものの芽が育つ

お茶の芽が焙炉の香り引き立てる

ボタンの芽箱入り娘かと思ふ

宍道湖の夕日に合う旅がらす

あの出会い男の方が忘れない

ときめきの出会いもあった白髪染め

あの時の出会いがあつて今日の幸

勝美

美幸

隆

シマ子

源一

欣之

祥一

宏

春子

弘直

柳伸

太泡

れいじ

多賀子

義良

ひふみ

雨人

鶴丸

文子

佳江

寿美子

友子

静江

米子

午朗

清子

茂美

あの人との出会い人生狂わせる

利口な蝶に出合いの日から騙される

ひとことが真相掴むきっかけに

掴まえた雑魚の中にも光る物

手料理で夫の心を掴む知恵

不器用に掴んでいるのは赤いバラ

バーゲンで掴んだ服に手が三本

掴み合ひしても母ちゃんには負ける

暇な手に受ける難ずし温かい

投げ返す球だしっかり手に受ける

郵便受けポトリと春をつれて来る

受けとめる海もあなたもお人好し

寒の水受けて涙も洗います

不器用な男でいつも受け損じ

京都塔の会

松川

杜的報

病みつきは四コーナーのスリルから

メンタイコ病みつきになる血圧器

友釣りを病みつきにさすい流れ

家族ごっこしよう土鍋を出して来る

亡母偲び古い土鍋で粥を炊く

わびしさはひとりの鍋に残るもの

外は雪このまま居たいばたん鍋

鍋奉行上手に夫使われる

鍋磨くなにかの意地の音させて

厚化粧女は年をはばからず

子供部屋ドアがだんだん厚くなる

厚いコートに顎うずめて逢いにゆく

厚い本枕に今日も無為徒食

みえ

雄々

静恵

満江

アキエ

桂子

登志子

与根一

邦代

早苗

房子

章峰

畔

町紅

病みつきは四コーナーのスリルから

メンタイコ病みつきになる血圧器

友釣りを病みつきにさすい流れ

家族ごっこしよう土鍋を出して来る

亡母偲び古い土鍋で粥を炊く

わびしさはひとりの鍋に残るもの

外は雪このまま居たいばたん鍋

鍋奉行上手に夫使われる

鍋磨くなにかの意地の音させて

厚化粧女は年をはばからず

子供部屋ドアがだんだん厚くなる

厚いコートに顎うずめて逢いにゆく

厚い本枕に今日も無為徒食

大寒小寒わたくしも猫も厚着する

吉報にレモンを厚く厚く切る

日本語の豊かさ分厚い広辞苑

厚い目に切ったメロンの出る客間

弱気にはならないようにする厚着

福寿草当分早春の床染し

当分の別居が絆強くする

当分は昼を抜いてるタイエット

誇るものないが老いても自前の齒

久しぶり手とり足とり迎えられ

らしき匂うやはり神戸だなど感じ

雪晴れの雲ゆつくりと遠嶺越ゆ

夢一步一歩が進み地鎮祭

齡一つ増えても欲は減ってゆく

姑の葬礼はなやきとも見えて

負けのこりの人生とも思ふ

ほたる川柳同好会

井上

直次報

励ましに気張る子を見て励まされ

大往生読んで励ます檀家寺

北へ赴く友としっかり手を握り

励ます会実は脱藩防止会

栄転の友励ましの苦い酒

車間距離保ち励ます妻の知恵

叱咤激励うちには強い妻がいる

リハビリの夫に合せて試歩の道

母さんは励まし上手はめ上手

なまじっか励ましたこと悔いている

病む妻を励ましささえ米寿来る

百合子

正坊

ただし

英一

しげお

瀧小

栄

白溪子

てる

笑女

達子

春蘭

美穂

武庫坊

年代

水客

眞郎

馬洗

善守

祥風

よろう

喜美子

保子

昭子

しずえ

久子

まみ子

あきらめろゆつくり潮が満ちてくる
 決断はゆつくりひと晩ねたあとに
 ごゆつくりお茶一杯のおもてなし
 ゆつくりと息継ぎ風を読んでいる
 ゆつくりと構えているが見掛けだけ
 閑東煮ゆつくり煮つめた妻の味
 ゆつくりと古代を描く考古学
 ゆつくりとゆつくり生きる私流
 頼みとは何やとゆつくり茶を入れる
 ゆつくりの時が欲しくて旅に出る
 聞き役がゆつくりうなずくよい話
 文芸春秋ほどの厚さの皮下脂肪
 駅で買い駅で捨てとく週刊誌
 コンビニでマンガの雑誌読む母子
 弁解もなしにはらりと散るさくら
 もう少し媚びてよいのに梅の花
 雑学で世渡り上手クイズ狂
 花を見たついでに拝む阿弥陀様

川柳塔鹿野みか月

土橋

明光 純次 直次 源一 正安 竹二 清史 恭子 桂子 龍小 蛭柳 英子 博史 方郎 郁子 正三郎 螢報 正道 隆風 喜与志 正恵 実満 公子 孔美子 和子 かつ乃

追いかけて掴むと消える螢気楼
 会者定離所詮ひとりと言ひ聞かす
 叱られた理由ひとりになつて省みる
 梅開花そつとひとりの手を触れる
 雪の夜ひとり暮しは寂しいね
 今日ひとり明日ひとりおらが道
 誘惑に勝つたひとり足袋をぬぐ
 振り向いてひとりに気づくのが怖い
 木も草も春にめざめて動きだす
 戦慄の闇が動いた気配する
 動くから元氣畑が待っている
 ロボットが動くとおれの首がとぶ
 活断層世界を股にして動く
 帽子編む器用な指を見直した
 春なのに防寒帽が仕舞えない
 農作業赤い帽子にファイト見せ
 卒論を終えて角帽光りだす
 脱帽のできるリーダーまだ出ぬか
 雪帽子脱がして亡母の墓拜む
 無帽のせいか少年を見違える
 手編み帽まだ雪の日が続くなり

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

みさ江 房子 早苗 八重子 みさ子 明美 盛桜 きみえ 富久江 野草 くに子 きみ子 武子 久枝 智恵子 睦子 茂 是るお 諷人 汲香 日枝子 朗子 すみえ 春枝 保子 八重子

サイコロが私にそむく数を出す
 一億はこれくらいですと査察官
 人なみに一喜一憂円相場
 数年が駅から駅と過ぎて行く
 父の背に戦の数がまだ消えぬ
 三つずつあつて仲良く遊ばれた
 本当の味方の数は胸の中
 数知れぬ風船飛ばす空の青
 数億の札に麻痺して散つた華
 数知れぬ他人のめしに鍛えられ
 年毎に数を減らして冬の旅
 持ち駒の一つ二つは持っている
 両手からこぼれる数の年を生き
 数だけは沢山でした焼香者
 口数が減つた夫婦の深呼吸吸
 憎しみの数だけ生命がらえる

富柳会

池

森子報

ゆき 寿天子 玲子 晶子 亜弥 ふみ 瑞枝 恵子 花子 美世 夕子 富美子 天雀 てい子 荒介 紅月 紅紫朗 宗一 鐘造 方子 文子 昭子 美代子 冬虹 (伊) 勇 (田) 勇

記憶力勝手な時に薄くなり

薄あげと水菜煮ている寒の入り

一か八か玉となつて砕けよう

うちの娘が毎日探す玉の輿

胸板の薄い男の右顧左眄

薄日さす道へ揃つてくる歩幅

ロウソクがささやくように溶けてゆく

火の玉を抱いて未来をひき寄せる

雪おろし小言聞いている雪だるま

火の命薄い情けを身籠もれり

ふたつから一つになつた箸その他

川柳大阪

坊農

柳弘報

真似ごとくも中途半端な我が脳波

離れても確認し合う友がいる

確認をやらずにボカをやりました

トンネルに岩突き刺さる恐い国

舞の海軽業が冴え地位守る

確認の数に自分を読み忘れ

魚には判るまいかと擬似餌付け

かわせみのアクロバットで魚取る

遠くても確認できる惚れた人

寝る前の火元確認指を差す

露天風呂山笠かぶり美酒をくむ

確認はしなくてもいい三十年

確認をしたのに何で遅れるの

道化者のアクロバットが誘い水

世の中をアクロバチックに泳ぐ奴

菅笠に若き乙女の茶摘み唄

二三子 トシエ 智久 昭水 欣之 絹子 阿キ 花梢 維久子 岳人 森子 太元 信醉 推高 隆司 喜楽 河南子 醉照 末坊 多香 美子 良花 美花 かよこ 柳昌 叭笑 雅巢

真似で本人よりも売れている
本命を確認してるチョコレート
確認の影にひそんでいる悪魔
蓑笠の似合う田畑の遠くなる
影法師アクロバットをして困る
無事でずっと確認できた生の声
決断へアクロバットの綱渡り
技一瞬アクロバットの猛練習
風の盆笠哀愁を秘めて舞う
大臣の答弁アクロバットだな
夫婦愛べつに確認してません
確認をしてサヨナラを言うつもり
現金はその場限りと書いてある
もの真似が上手で自己を見失う

ローズ川柳会

山崎

君子報

子に見せる背中疲れも透けて見え

茶粥などすつつて春の気配待つ

春風に命ゆつくり遊ばせる

無い命拾つた話くり返す

苦いお茶白湯で薄めて一人の夜

柱の傷みんな巣立って行きました

合格の電話を母は立って待つ

新茶入れ座り直そう後半生

いのちなり生まれるときも泣きながら

一瞬の時の流れに置きのち

産声にいのち授かるあかし見る

お茶づけは昨夜の残り鬼の豆

新世紀つなぐいのちにレモン足し

まつお しげお 司 川童 希久志 鉄心 洛醉 一步 美津留 ダン吉 金太 笑風 重人 柳弘

遺された命亡夫に見守られ
蜥蜴の尾とかげは振り向きもしない
サークル檸檬 小林 一夫報
一枚の紙の呪縛を逃げられぬ
生き下手は私も同じ紙の皿
妻の指なまめいて見ゆ紙の雛
一筆が決まらず紙が山になる
紙袋かいる私を持ち歩く
箸紙を結んでからの長話
紙の雛飾つた頃の割烹着
春風にのせられてきた紙雛
遠い母と遊ぶ白ざけ紙の雛
人の世や紙に表裏のある如し
これっきりの人だと思ふ紙コップ
鋭角の心 紙ヒコキ飛ばす
ベン先で紙に火種をぶちまける
たかが紙一枚にがんじがらめ
川柳塔打吹 奥谷 弘朗報
大物が一億積んで出所する
急場救つたポケットの十円玉
一周忌過ぎてまだ待つ帰る音
妻が描く絵は素人で似るピカソ
素人にこれほどうまい芸がある
ポケットは子供の夢のいれどころ
神宮の賽銭箱に僕はなる
エプロンのポケットにある昆布飴
文なしのポケットが行く風の中

笑女 薫風 楓楽 希久子 雅子 みつ子 智恵子 房子 喜美子 たか子 いわゑ 正坊 あずき 千代 智子 弘朗報 松盛 野草 孝恵 勝見 寿満湖 玲坊 季芳 よしえ 和枝

気まぐれに男が描いた女の絵
迷い箸気まぐれだったかも知れぬ
行き先は杖の倒れた方にする
ロングフェローの矢は気まぐれな春を追う
気まぐれに逆立ちをして罪を吐く

川柳ねやがわ

江口

気の強い母の涙を見たドラマ
天の筋書きは思いもよらずドラマです
戦争はドラマじゃないと言ひ聞かす
戦争の悲劇を思ふ大地の子

嘘ひとつ飲んでドラマの渦に居る
長編になりそう一円玉のドラマ
嫁取りの時期だけ弾んでる日記
日記はやメモにして居るひとり者

二人共若かったねと古日記

絵日記に親が恥じらうことも描き
シヨボくれた日記が笑つ僕の春
日記からSOSが読みとれる

ひとり芝居のエンジンは過熱する
エンジン全開退職辞令貰つた日

大器晩成エンジン始動おもむに
愛の手がエンジンとなる車椅子
白球を追つて筋書きない園児

神様の筋書き狂わせるヒト科
筋書きが毎日変わるのも夫婦
かみさんに自作自演を読まれてる

母親の筋書にない子供たち
幸せな筋書長男とくらす

透太 悦子 一屯 元紀 敦子 度報 庸佑 亜成 恵子 光子 一風 一鬼 頂留子 権太 文秋 弘直 時弘 冬葉 勇太朗 ルイ子 波留吉 三峰 度 一途 博泉 黎之助 シマ子

ありがとを言う筋書で逝くつもり
この男から筋書が狂いだす
信楽で豆狸が風邪をひいている
大卒の嫁が廊下を光らせる
宝石よりも残り少ない歯を思い
自己主張鯨大きく海を打つ
頂上に立つて身震い止まらない
敬礼一つ朝を和ますガードマン
豊中もくせい川柳会前月分 田中正坊報
人恋いし木の実の岸へ寄つていく
待つことに慣れた女は岸にいる
岸伝う春の芽吹きを待つ心
海岸に異国の品がたどりつき
名幹事 芸の細かいところ見せ
河内弁 細かい銭は使わない
江戸小紋 細かさの中はんなりと
極楽を調べて地獄の鬼を見る
取調べ埋めたナイフが芽を出した
見通しが暗い熱燭でもやるか
駅裏の暗いところに焼き鳥屋
暗闇を抜けたら鬼も消えていた
沿岸に津波警報 暗い海
浜ぶくれて夢追いかける車椅子
涙脆き日なり大根舌に崩れる
テレビでは悲しい時に雨が降る
冬の峠でやわいおんなの殻を脱ぐ
肩書は社長さんという花名刺
出張ばかり人生だった老い楽し

朝子 磯 英壬子 源一 洋 高栄 あやめ たもつ 英子 きく子 知香子 悟郎 庸佑 しげお 登代子 瀧小 明光 重人 紫香 だし 博史 つえ子 薫 路児 澄子 杜的 吉太郎

カマ掛けて脅してすかす調べ室
感性の差がライバルがジャンプする
花育てめぐる季節を知る余生
自分史の序章に暗い影がある
はびきの市民川柳会 榎本 吐来報
もめる種まき散らして春の風
春を待つ子筆も老母も着ぶくれて
節分の豆を両手に老いを知る
おもつ代痴呆看護の申告書
途中から嘸きになる娘の電話
遅刻するいじめのサインかも知れぬ
検査値がイエローカード突きつける
切り出せずストーリーの調整ばかりする
崩落へ跡取りとられ嘆く父
住専に総一億の嘆き節
こつそりと帰り飲み屋で鉢合わせ
そのことは秘書がこつそりやったこと
通帳を夜中に開けて笑つてる
妻と娘でこつそりケーキ食べている
こつそりと戦争準備してないか
本命のチョコはこつそり渡します
自画像の髪をこつそり増やしく
ライバルとこつそり握手しています
耳うちの甘さに油断してしまふ
裏の裏のまた裏がある議員
腰低くなった選挙かなと思う
居眠りと拍手に暮れる金バッジ
裏金は秘書が秘書がという議員

一笛 紫香 正坊 吐来報 里つえ 泰子 えみこ 美喜 志洋 希代司 かつみ 扶美代 利武 聡 敏子 洞庵 一壺 まつお 敏 絢子 金太 美津留 重人 辰子 丹吉 吐来 晋

票の恩忘れ議員の私利私欲
皆様の手足となつて空出張
議員三年居眠りうまくなりまし
た議員の弔電一番にきく風の中

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

蜜柑むく故郷こいしい指でむく
スタイルが気になり出した青リンゴ
喜寿迎え余生に夢を託してる
三寒へ飲んで四温の缶コーヒ
祖母さんの怒りに触れて照れている
影の声触れてはならぬ炎の女
やわ肌こそと触れたい孫のほほ
趣味一つ老いの心に灯をともし
神様の試練か 風が吹き止まぬ
春一番吹いて村にも嫁が来る
頂点に立つと孤独の風が吹く
過疎一人 肩張つての吹き流し
癌と言う不治の病となじんでる
踏切を冬が往つたり来たりする
いい夢を見そうだ枕買つてくる
風雪に耐えて桜が出番まつ

川柳塔おとり

上田 俊路報

たけし 桂子 一屯 みつこ
ハツエ すみ まさ 六浦 向西 勇次郎 江美 末貞一 澄子 昌子 十四郎 正治 一完 鹿太 紫香 いわお

因習へ村の節目が重くなる
せせらぎも温み彼岸のせりを摘む
彼岸花若くて逝きし姉偲ぶ
彼岸入り春雪掃いて墓参り
春彼岸お墓の花が新しい
曼珠沙華かつて私が炎えたる彩
彼岸待つ人の心も春になる
ご無沙汰を詫びて彼岸の墓洗う
菩提寺の道を色どる彼岸花
彼岸にはまだ雪の下父の墓
面倒な血筋は知らぬ彼岸花
独立にブーゲンビリアもつれ咲く
返り咲きもくろんで握手だな
雨の味知らず温室花が咲き
春と秋美事に咲かす花時計
日向ぼつこ昔むかしの花が咲く
苦勞した汗へノルマの花が咲く
向日葵が太陽ひとりじめにする

倉吉川柳会

谷口

お日さまを信用してる糊の芯
効きすぎた糊へそぐわぬ宿浴衣
糊固い浴衣ではぐす旅被れ
農協は氷河時代のイグアノドンだ
農政を憎み天地に感謝する
農閑期私を充電する刻ぞ
農政へ今も高鳴る一掬の血
農民の意地が鋤鋤錆びさせぬ
コンピューター駆使して農を継ぐという

艶子 登美 風花 敬之介 崇 千秋 由多香 和子 銀嶺 静生 雄々 道子 みさを 舎人 余志身 野草 黙光 孝子 御前 秋女 喜美子 石花菜 帆雀 日枝子 黙光 幸子 天雀

次男報

おいあれで用事が終わる農作業
農やめて今では米を買ってます
農業が好き男で嫁がない
百姓と書いて名刺の友がいる
トラクター隣の嫁がのっている
農業にメダカの歌も聞こえない
ビカビカのペンツ止めている農家
農に飽いて特別でかい尻を放つ
しぶんと始末はちがう母の熨斗
おめでどう言葉も包むのし袋
のし紙を巻いて白イカ十枚のおみやげ
熨斗付けて貰った妻が天下取る
熨斗袋中身忘れたことがある
安物の総理を入れた熨斗袋
闊魔さまに差し出すのしを用意する

翠洋会

米田 恭昌報

智子 弄満湖 登 荒介 和歌子 雄々 和枝 故とみお 明美 秋草 苦句 秀峰 ゆり子 次男 よしえ

浮き沈みここにもあった屋敷跡
人も屋根も雪を下ろして生きかえる
年波が音なく訪うて古希の春
都市砂漠あれが僕の赤い屋根
通い路か今夜も猫の屋根伝い
ウウカンカン屋根根に上がって見る炎
屋根裏のつばめ覗きにゆく梯子
見下ろして屋根でおびえる肥満猫
恋猫も雪の屋根から滑り落ち
補聴器をつけてタクトをまだ捨てず
しあわせな梅重文の庭で咲き
風の音にも彩があるよう木々ゆれる

久峰 良江 志華子 絹子 光子 兼治郎 正雄 恭昌 源一 千梢 英王 真砂

瀧 計 落 た 杜 紫 正 悟 吉 智
げ 小 路 だ し 的 香 坊 郎 太 郎 子
お 光 児 的 坊 郎 郎 子

朝幸泰ト明け知春剛ミ道君春幸一シマ風
子子成シェ子い佐江治子子江枝風子
子子成シェ子い佐宏江治子子江枝風子

とき 5月18日(土) 午前10時半
集合 四条大宮「京福電車」駅前
ところ 等持院・門前「烟善」(句会)
会費 5500円(昼食とも)
兼題 蝶・誘う・参考(各題3句)
席題 当日難感
申込・投句 5月10日までに都倉求芽へ

日程 2泊3日 全行程貸切バス

◎第1日は5月18日午前9時、大阪を出発、松江―出雲大社等を

経て宿舎へ（前夜祭に参加）

◎第2日は川柳大会に参加、終了後、バスで米子（カンポの宿）

◎第3日は大山寺等を観光・帰阪
費用 約35,000円

申込 川柳塔社事務所へ（先着順）

久しぶりの晴れ着になじまない体
ますみ
友甫

ファッションで体にえがく落ちない絵
隆

梅咲いてからだに張りがよみがえる 美津留

風の日は両手に重い荷を下げる
鬼遊

1000 JOURNAL OF CLIMATE

いずも川柳会70周年

大会参加ツアー募集

日程 2泊3日 全行程貸切バス

◎第1日は5月18日午前9時、大

阪を出発、松江―出雲大社等を

◎第2日は川柳大会に参加、冬了

◎第2日は川根大会に参加。終了後、バスで米子（カンポの宿）

◎第3日は大山寺等を観光・帰阪

費用 約35、000円

申込 川柳塔社事務所へ（先着順）

京都塔の会 吟行

5月8日(土) 午前10時半

集合 四條大宮「京福電車」駅前

ところ
等持院―門前「畑善」(句会)

会費 5500円（昼食とも）

兼題 蝶・誘う・参考（各題3句）

席題 当日雑感

申込・控台 5月1日までに審査可決へ

■ 各地句会だより

高知川柳社

川竹 松風

高知川柳社の発足は昭和三十四年六月一日で、当初は「川雑土佐」として創立句会を開催し、その後、昭和四十年九月、誌名も『川柳高知』と改題しましたが、今年四月で通算四百三十五号となり、今日に至っています。

現在、川柳塔社の同人は四名、誌友は八名で、支部が県内三か所があり、二十名から四十名くらいの会員がそれぞれ毎月一回、定例会を開いております。

まず、山北支部は昭和五十四年に発足し、川竹松風と故人の松岡三吉が指導ならびに選者をつとめてきましたが、現在は会員が三十五名となり、句会出席者は会員数の八割という盛会ぶりです。

平成五年、発足十周年を節目に三十名が参加して句集『ほろ酔い』を発刊し、それからわずか一年半後には三十五名が参加して第二

句集を刊行しております。

この支部では定例会の後、「ほろ酔い」程度の酒を酌み交わして和気あいあいのひとときをすごしています。忘年会と花見句会には町長・教育長を迎えて歓談し、「みかんの里」というだけでなく、「川柳の里」と呼ば



れるような明るい町づくりを目指しております。句会としては一応の基礎ができたのではないかと思っています。

佐川支部の例会は毎月第三金曜日で、同人の赤川菊野が指導しており、会員は十五名くらいで、句会当日には高知からも参加しています。当地は桜の名所で、四月の花見句会には、毎年二十名余りが桜の下で句会を開いています。

参加者は遠く宿毛市からも数名が来会し、川竹松風・小澤幸泉・曾我部佳風・福留有佳その他も集まり、句会後は酒を酌み交わしながら友情を温めています。

朝倉支部は平成三年六月、初心者ばかり十名でスタートしました。例会は毎月第二火曜日で、会場は朝倉文化センターを借りております。北川竹萌・中内朱坊・窪田圭風が中心となっており、会員も二十名に増え、気楽で家族的なふんい気の句会として運営されています。

これらの各支部の入選句は、すべて『川柳高知』で発表されています。今年の川柳高知大会には、投句者を含めて百余名という盛会でしたが、これも他柳社のご協力があったお陰で、心から厚くお礼を申し上げます。

本社 四月句会

四月八日(月)午後五時半
メンズファッションセンター

沿線の車窓に満開の桜を眺めながら会場に着く。すっかり暖かくなった八日定刻、八十八名の参加により四月句会は開催された。

はじめに黒川紫香氏が同期の親友である正本水客氏の卒寿を祝う句集「正本水客とその仲間」発刊記念誌上川柳大会の案内をする。

次いで本日席題の選者榎本信治氏の句集『道具箱』発刊記念川柳大会(五月四日)の案内が板尾岳人氏からあり、本日のお話へと続く。

話題は大阪駅ガード下をめぐらし、自作の短歌を色紙に書いて売りつつ生活しているつね子さんについて。その生い立ち、ホームレスに至る数奇な人生と短歌を紹介する。

私もまた人の子なれば貴方と同じ
家に住みたい着物も着たい
月間賞は田中正坊氏(豊中市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―森子・弥生)
(受付―金太・寿美・英壬子)

席題「自信」 榎本信治選

イントロでもう手を挙げている自信
場を踏んだ自信は敵を侮らず
育児書が頼り自信のないママで
七冠の自信が光る羽生の駒
自信ない素振りに油断してしまい
ライバルに勝てる自信がやつとつく
花むしろ妻が自信のちらしずし
よっぽどの自信 敵に塩おくる
自信喪失それから角がとれました
職人を依怙地にさせている自信
梅も桜も枝に自信を持っている
吉日の鏡に等身大の自信
窓際の一人がもっている自信
盲導犬自信を持たすほめ言葉
自信過剰の男とヨットには乗らぬ
自信過剰の僕に揺れてる芭蕉
自信よくつき練つてみる広辞苑
未来豊か自信をつけた甲子園
やつと自信ついたか背筋伸びている
練習が私に自信つけさせる
経験に裏打ちされている自信
先ずやろう自信あとからついてくる
自信過剰だったと悔む救急車
ハイヒール男なんかに負けません
自信あるから一番は走らない
下積みで鍛えた腕にある自信
自信過剰そろそろ臺がたちますよ

重人 射月芳 章久 狸村 千秀 白溪子 正坊 度 保州 柳宏子 元紀 森子 柳宏子 絹子 美子 萬的 寿美子 英壬子 昭子 射月芳 度 洋 希久子 楓 美津留 弘直

自信には遠い万年筆を持ち
二次会で少うし自信取り戻す
酔うとすぐ自信過剰が出て困り
皆勤賞ならきつと頂ける
自信のないに背中をポンと叩かれる
自信などないがスタート台にいる
自信ない脚だがばちばちついてゆく
責任は私が持つと言う自信
執刀医寡黙の裏にある自信

人 女の嘘ぐらいで踊らない自信
地 超スローボールの中にある自信
天 逆上がり出来た自信を糧にする
軸 自信あるかたちで冬木立がならぶ

兼題「子供」 高須賀金太選
赴任する親を元気づける子
今日よりも明日と加速する子供
廃校のうわさをよそに子ら跳ねる
少しずつやさしい膝へ寄る子供
お日様はいつもまっ赤な子のクレヨン
大人より何でも知っている子供
キャンプから戻って子供脱皮する
襲名を肩に背負った梨園の子
父母の決意を迫るお腹の子
夕焼けてむすかり出した子供の絵

智子 吐来 満州 桂香 丹吉 月子 満津子 あやめ 雅文 重人 智子 信治 弥生 信治 一二三 茜 絹子 あやめ 美津留 隆 吐来 白兎

叱った口調で子から又叱られ
子供部屋触れるとなにか動き出す
十五の春泣かずにボクは働いた
時として大人を裁く子供の眼

友達のような親子で平和なり
育児法通りでモヤシの子に育ち
親の敷くレールを逸れていく子供
両親が子供に嫉られている

母さんのコビーじゃないの反抗期
子供にも事情があつて妥協せず
パチンコに遊ぶ大人を見て学び
公園で遊ぶ子供の影がない

大きくて乗車の度にひっかかり
エレベーター礼儀正しいよそのお子
住専の話は子どもでも笑う
子供には子供の世界 義理もある

子が迷う道は父にもあつた過去
空想の世界へ扉持つ子供
介護する子も腰痛に耐えている
いつまでも子供九十の母が居る

肩抱けば母は子供の眼にかえる
古稀の子が白寿を祝う高齢化
住

国境をもたない子供のボール舞つ
子沢山にあこがれているひとりっ子
運転がとて上手な僕のパパ
弟ができて姉ちゃん甘え出す

叱られる子供にもある一分の理
人

満州

満津子

一歩

寿美

いわゑ

メ女

源一

みつ子

月子

鬼遊

風云児

かすみ

あやめ

ダン吉

房子

勇太

希久子

楓楽

笛生

絹子

射月芳

弥生

満州

重人

たもつ

シマ子

芽吹く頃子供は部屋に鍵をする

地 王様の裸を子供だけが知る

天 冷静な目で父ちゃんに味方する

軸 ピカピカの一年生に春がある

兼題「絵葉書」

西出楓楽選

絵葉書でバリもローマも見えています
あの頃の四季を絵葉書しやべり出す
絵ハガキで旅の気分をおすそわけ
絵葉書の場所を捜してハイポーズ
絵ハガキの海にふるさとだけ残る
絵葉書の隅にボツンと恋がある
絵葉書の通りだったとバスポート
絵葉書に春の便りをてんこ盛り
いたずら盛り鬼の絵葉書出してやろ
説明が下手絵葉書を見せておく
絵葉書の隅に洩らしてある本音
アリバイのように絵葉書やつてくる
絵葉書に自然破壊を画いておく
絵葉書の名所で想う留守の猫
軽い絆で絵葉書が届いている
旅立ちのわけ一枚の絵葉書で
絵葉書でお見舞を書く軽い義理
絵葉書で見慣れた景に立ちつくす
絵葉書に心の隅の一句おく
絵葉書に書けるぐらいいの意思表示

鹿太

元紀

月子

金太

満津子

寿美子

絹子

利武

元紀

桂香

房子

射月芳

典子

美津留

稚代

ゲン吉

金太

森子

智子

洞庵

正坊

紫香

とし子

智子

絵葉書が最後になったチョモランマ
絵葉書の絵より寄せ書き温かい
絵葉書のようにならない絵を画く
絵葉書に華厳の瀧の音を聞く
払つても払つても絵葉書に溜る雪
半分を絵に語らせてくれる葉書
絵どころが官製はがき画布にする
かくや姫から絵葉書届く星月夜
沖繩の絵葉書怒ってる便り
絵葉書の景色の中に沈んでる

住 絵葉書の富士はいつでも笑つてる
絵葉書の軽さと続く淡い仲
絵葉書の滝へ想いがまだたぎる
絵葉書に長崎の鐘鳴り止まず
絵葉書にワイン匂うてくる古城

人 絵葉書は蟹がうまいとしゃべり出す
原爆の絵葉書バリに売ってない
絵葉書が二人の明日を乗せてくる
若者に絵葉書の景食い足りぬ

兼題「散る」

小池しげお選

散骨なら花咲か爺に任せたし
散り初めの乱れ鏡に論される
ひめゆりの塔へ散りたし紅椿

ゲン吉

柳宏子

東雲

シマ子

美子

絹子

希久子

千秀

柳弘

いわゑ

落児

希久子

朝子

隆

洋

一風

東雲

吐来

楓楽

吐来

楓楽

吐来

楓楽

吐来

洋

千秀

秀

万朶のさくら三日のちには散る覚悟
 散るは夜桜 セクハラの手を払う
 その時がくればいつでも散る覚悟
 明日散つてもよいように咲いている
 ポトリ散る椿が庭を盛り上げる
 終章に散るシナリオは書いてない
 今日今日の貌で散ります春一夜
 明日は散る花をきれいな絵に残す
 桜散る下へ散骨して欲しい
 散り散る美学を一つ心得る
 散り下手で入退院をくり返す
 散り際の歩幅教える哲学書
 紅しょうが散らせて母の祭りずし
 散る花を見る病棟のものの思い
 散った桜に徒然草が生きている
 散るためにさくらは躊躇などしない
 花が咲き花散り一人の飯を炊く
 爽やかに散るから桜惜しまれる
 散り際の美学を花は歌つて
 咲いて散る方程式が解けぬ僕
 離合集散ひとの情けの薄いこと
 明日散る花戀命に咲いている
 桜散る頃に訣れを切り出そう
 本望だらう風もないのに散る桜
 花が散る明日はきっぱり別れよう
 惜春賦さくら散る頃嫁に行く
 散りぎわの科白大事に温める
 散ることを知って大事に今を生き
 散り際の美学を信じない造花

房子 希久子 希久子 智子 愛論 洞庵 森子 諷云児 千秀 月子 楓楽 正雄 英壬子 信治 元紀 諷云児 志洋 鹿太 射月芳 みつ子 佳秋 度 正坊 美津留 寿美 昭子 保州

佳
 サンキューとみんなに言つて散りたいな
 散る用意してから日もちしています
 散つてなお花はやさしさを忘れない
 泣きながら散つたさくらもあるだろう
 パツと散るには背景が悪すぎる
 人
 散りぎわを大事にぼくは生きてます
 地
 人知れず散つた桜も美しい
 天
 散りぎわに言えますようにありがとう
 軸
 散る時は空に笑われないように
 兼題「居間」 安藤 寿美子 選

三男 朝子 弥生 稚代 月子 金太 金太 満州 しげお 智子 東雲 女 洋 月子 森子 頂留子 柳宏子 章久 丹吉 柳弘 いわゑ 英子

気がおけん友で茶の間にいりびたり
 それぞれに定位置がある居間楽し
 春つらに居間に座れば眠くなる
 片付かぬりフォーム好きな母の居間
 朝夕に読経流れる母の居間
 三浪のサクラが咲いて弾む居間
 ぼろぼろの父権が居間に落ちている
 家庭史の喜怒哀楽を知る居間だ
 茶だんすにお菓子がはいあった居間
 四畳半の居間は我が城我が砦
 陽の当る居間は鉢植え占領し
 愛犬があるじ顔して座る居間
 赤ちゃんが主役で居間の灯がぬくい
 年金通知居間が一日あたたかい
 パパは小さくママは大きくなって居間
 全員集合居間にメロンが鎮座する
 孫の絵をあたにかまわず貼つた居間
 日々平和居間にも父の席がある
 佳
 狭かった居間からみんな翔んだった
 袋小路の風を逃がさぬ京の居間
 友達が何時も来ているうちの居間
 姑の居間静かすぎて気にかかり
 うまいものないかと居間へ寄ってくる
 人
 それぞれに書き入れる居間のカレンダー
 銀行が来てはる 居間は閉めてある
 天

月子 三男 正坊 かすみ 鹿太 恭昌 美子 半蔵門 絹子 希久子 義子 あやめ 重人 信治 典子 正雄 諷云児 典子 元紀 智子 志洋 茜 冬葉 弥生

母さんがいつでも居間にいる安堵

昭子

曾祖母は明治の顔で居間に居る

寿美子

兼題「土産」

橋高薫風選

土佐の土産言わずと知れた鯉節

たもつ

手土産の御座候がまだ温し

しげお

みやげ話熱い焙じ茶飲みながら

みつ子

お土産を出すたび妻のひとくさり

ダン吉

土産屋を梯子して行くバスツアー

射月芳

お土産に振り回されたハネムーン

恭昌

何はさておきお隣さんに買う土産

たもつ

難波駅で赤福買うと決めている

三男

留守中に娘が来てた置き土産

ベ女

手土産の倍持つて去ぬ里帰り

愛論

春先の土産は母の草団子

久峰

手作りの味噌は重いが里土産

正雄

旅づかれ土産話は明日のこと

シマ子

古里のニユースを提げた友が来る

悟郎

大ボラを土産に友の長い尻

章久

孫の手を孫が修学旅行から

かすみ

母は土産を待つてゐるわけでない

智子

まあまあとあてにしていた旅みやげ

とし子

土産店買う気さらさらない試食

満津子

おみやげは地酒と決めた酔いごち

重人

賞味期限切れた土産を戴きぬ

頂留子

手土産の箱から匂う下心

稚代

何かあるとではずんでゐる土産

射月芳

お土産に水抱瘡をおいてくる

西

後遺症という有難くない土産

白兔

無事な顔土産にクラップを降るる

希久子

キオスクであたふたパバが買う土産

西

隣からの土産と同じ値を探し

路児

旅土産妻迷つてゐるうしげに

一二三

旅なれた人は持たない土産物

冬葉

忘れない土産をくれた客の顔

東雲

役に立つ土産貰ったことがない

英子

だんだんと粗末になつてきた土産

度

修学旅行土産に地酒とは流石

佳秋

一つだけ秘密に渡す旅みやげ

隆

母にだけ最後に重味のある土産

弥生

天国へ土産話がたとある

保州

お土産のように赤ん坊渡される

寿美子

天

自分への土産 地酒と決めている

正坊

俺を知る友だち絵葉書の土産

薫風

軸

(清記・希久子)

ふあうすと賞決まる ふあうすと川柳社は

平成7年度ふあうすと賞に上村さな恵、同佳

作に藤井高子・森田栄一・宮川蓮子、紋太賞

に谷川定子、同佳作に湯田臨江・佐々木義雄

の各氏を決定、4月21日に表彰した。

「正本水客とその仲間」 発刊記念誌上川柳大会

川柳塔社相談役正本水客氏のお見舞と
卒寿を祝つて、句集「正本水客とその仲
間」を皆様の協賛により発刊いたしたい
と存じます。協賛金は一人三千円で、同
句集に自選句五句を掲載するとともに、
句集を贈呈いたします。

さらに句集発刊を記念して左記により
川柳塔社の後援で誌上川柳大会を開催い
たします。

課題と選者(各題2句・2名共選)

「汽車」 中尾 飛鳥・阿萬 萬的

「緑」 小出 智子・西田柳宏子

「二人」 黒川 紫香・正本 水客

会費 1500円(句集・発表誌呈)

◎ただし、前記協賛者は不要

締切 6月30日(日)

投句先 〒600 京都市下京区諏訪町通り

松原下る弁財天町 都倉 求芽

用紙 所定用紙または同様の用紙

◎句集刊行は9月末を予定しています

「正本水客とその仲間」刊行委員会

柳界展覧

つている 政岡日枝子

〈総合成績〉

①鈴木公弘（県知事賞）

②野沢大漁（県議会議長賞）

③政岡日枝子（新日本海新聞社賞）④但見石花菜⑤林

荒介⑥新家完司⑦江原と

みお⑧土橋登

★朝日新聞では、4月から

健康・医療・スポーツ・病

気・ダイエツトなどをテー

マにした「ヘルシー川柳」

欄（毎週月曜日掲載）を新

設した。選者は「天守閣」

同人の久保田元紀氏。

★高槻川柳文化連盟は、高

槻松坂屋5階プチサンクで

第15回川柳と川柳画作品展

を開く。前期は5月2日、

8日、後期は9日、15日。

★平成7年度の時の川柳作

家賞に喜福恵美香・河島い

ち子・恩塚治子・池田恵美

子の4氏が選ばれた。

★国民文化祭は平成14年、

鳥取県で開かれるが、川柳

部門の専門委員に次の14名が決定した。

新正子・上田宣子・大門

幸代・門脇かずお・小谷美

ツ千・新家完司・鈴木公弘

但見石花菜・谷口次男・徳

田ひろ子・中原颯人・西原

艶子・政岡日枝子・森田熊生

★第18回津山川柳大会は、

6月2日午前10時から津山

市総合福祉会館（津山駅か

らバスまたは徒歩20分）で

開く。宿題と選者は、夜

樋口仁▽奥▽村井見也子▽

約束▽高杉鬼遊▽手帳▽八

坂俊生▽時間▽八木千代▽

穴▽外山あきら▽虚▽墨作

二郎▽姉▽前田美已代（各

題2句）午前11時半締切・

会費1000円、各題特選

3句に呈賞、津山市教育委

員会主催。

★ふあうすと川柳社では第

41回全国川柳作家年鑑の参

加作品を募集している。句

稿は所定用紙を使用、都道

新同人紹介

須⁺郷^{ゴウ}井^{セイ}蛙^カ

— 甲吉・五楽庵推薦

上^ウ江^エ冽^{リョウ}勝^{ショウ}子^コ

— 薫風・節子・智子推薦

池^{イケ}田^{デン}寿^ス美^ミ子^コ

— 公一・典子・満津子・達子推薦

府県名・郵便番号・姓雅号 川柳講座の講師を担当。

年齢・職業・住所・電話番号 年報 ▲

号に作品7句を記載、6月 桑原喜風氏（元川柳塔社

末日までに参加費3000 同人・東大阪市）は4月10

円を添えて申し込むことと 日、老衰のため死去、本名

している。投句先は千61神 寅彦、94歳。

戸市中央区野崎通2丁目1 ▽芳志 ▲

15・伊佐次無成。

▽同人消息 ▲

■富田蘭水氏（出雲市）は 供養として金一封、拝受い

よみうり出雲文化センター たしました。

郵便受けに届く普通を待

分 林 荒介

★第19回鳥取県川柳大会は

3月31日、国民宿舎水明荘

で151名が参加して開か

れた。各題天位句と総合成

績は次のとおり。

鳥たちの休んでくれる樹

になろう 鈴木 公弘

湧き水がうまい地球を信

じよう 西出 楓楽

修羅越えた弓がだんだん

脆くなる 西原 艶子

父はやっぱりの鳴る方へ

背を向けた 江原とみお

絶対に悪口言わぬすごい

芸 新家 完司

本当に気ままになった棺

の中 灰原 泰子

流行に棹さしている村八

子 林 荒介

★国民文化祭は平成14年、

鳥取県で開かれるが、川柳

部門の専門委員に次の14名

が決定した。

新正子・上田宣子・大門

幸代・門脇かずお・小谷美

ツ千・新家完司・鈴木公弘

但見石花菜・谷口次男・徳

田ひろ子・中原颯人・西原

艶子・政岡日枝子・森田熊生

★第18回津山川柳大会は、

6月2日午前10時から津山

市総合福祉会館（津山駅か

らバスまたは徒歩20分）で

開く。宿題と選者は、夜

樋口仁▽奥▽村井見也子▽

約束▽高杉鬼遊▽手帳▽八

坂俊生▽時間▽八木千代▽

穴▽外山あきら▽虚▽墨作

二郎▽姉▽前田美已代（各

題2句）午前11時半締切・

会費1000円、各題特選

3句に呈賞、津山市教育委

員会主催。

★ふあうすと川柳社では第

41回全国川柳作家年鑑の参

加作品を募集している。句

稿は所定用紙を使用、都道

5 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(木)午後1時から 塗る・鼻・すみません・午後	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	3日(金・祝) 午後1時から 指・乱れる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 首・茂る・パズル・苦い	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後1時から 調子・自慢・従う	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 ねやがわ	12日(日) 正午から 用意・弁解・思案・自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 会 計 ・ 石 ・ 裁 く	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から 羽・こだわる・ちぐはぐ・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 包む・そろそろ・若い	豊中市立蛸池公民館 阪急宝塚線蛸池駅西へ150米 〒560 豊中市蛸池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卵 の 花	16日(木) 正午から 沈む・溝・バランス・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島鳳云児
南 大 阪 川 柳 会	17日(金)午後6時から 一理・刻む・指揮・忠実	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
京 都 塔 の 会	18日(土)午前10時半集合 蝶・誘う・参考	春の吟行句会 本文P100参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 正午から 身軽・無言・目立つ・文字	岸和田市“五風荘” 岸和田城横 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地埋村
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 鉛筆・困る・口惜しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	23日(木)午後1時から 糸・撫でる・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から マスコミ・紙・輪・磨く	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 民 会	26日(日)午後1時から フルムーン・ひがむ・中止・司会	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★「安全保障」という場合
に、いったい誰の安全保障
を意味するのかと言えば、
最終的にはわれわれ国民一
人一人の安全をどうすれば
守れるかという問題に帰着
する。つまり安全保障の主
体はわれわれ国民である。
われわれがどう死ぬか、ど
のように自分の生命を犠牲
にするかということの決定
権も、われわれ一人一人が
持っている。

★阪本義和元東京大教授の
安全保障についての所説を
紹介した。ところが一般に
「安全保障」とか「防衛」
について議論する場合、国
民一人一人の権利としての
安全保障ではなく、とかく
国の安全保障という話にな
る。現在、沖縄基地裁判を
めぐって、県民の安全や権
利よりも安保体制が優先す
るというのが政府の主張だ
が、これは先の所説からす
れば、完全に逆立ちした論
理と言うほかない。

★この問題で、村山前首相
や橋本首相が大田知事と会
談する模様が、かつてテレ
ビで放映されたが、この二
人がポストを取り替えてみ
たら、とふと思った。これ
は、両者の風格や貫禄もさ
ることながら、安全保障の
主体が国民にあることを確
信する立場と、国や同盟国
の安全保障という虚構にと
らわれる立場との相違によ
るものであることは明らか
である。

★五月十五日は、西尾葉名
誉主幹の一周忌にあたる。
追悼句会の準備とともに、
『定本西尾葉句集』の刊行
が着々と進んでいる。亡き
先生の「冥福を祈り、ご遺
徳を偲びたい。」

▼いよいよ五月の訪れであ
る。五月と言えば、「風薫
る」とか、「風光る」「五月
晴れ」などと、さわやかで
明るい、晴天のイメージが
非常に強い。

▼しかしその一方で、「卯
の花腐し」とか、「走り梅
雨」「メイストーム」など
の言葉があるように、結構
雨の日も多いのではないか
と、五月の大阪の平均降水
日数と降水量を、気象庁の

ひとこと

川柳とわたし

友達で紹介で川柳と出会ったのは数年前になります。その時はそれほど魅力もなく、気ままにお付き合ひしてきました。そして昨年三月、体調をくずして退職しました。それからボカんとした日々が続き、そんな時、そばにいてくれたのが川柳だったのです。川柳誌をめくっていると、いろんな人の思いが、わたしの心をゆりがとう。

この頃では、すっかり仲良しになり、わたしの心はまさに生きています。川柳よ、ほんとにあ

さぶりました。時には笑い、時には泣いてしまうこともありました。そしてやさしく川柳はわたしに手をさしのべてくれました。気ままなわたしを気長に見守り、空虚な心を満たしてくれようとするのです。

(大内 朝子)

統計で調べてみた。
▼まず降水日数(降水量が一〇・〇以上あった日数)は、五月が二・三日で一位。九月が二・三日で一位。これは台風シーズンなのと「秋霖」と呼ばれる秋の長雨のせいだろう。二位は六月の二・二日、言うまでもなく「梅雨」のせい。ついで三月の二・二日、これは「菜種梅雨」。そして五月の一・〇日と続くのである。

▼また降水量は、六月の二一〇・〇、七月の一八〇・七、九月の一七三・六、十月の一四三・〇、十一月の一三三・〇、十二月の一三三・〇、と続いている。五月は二二・二と、雨の日の多いことが実証される。

▼それで君は何を言いたいのか、と聞かれたら困るのだが、外見や印象で人を判断してはいけない、ということを書いたかったのだけれど、ちょっとこじつけが過ぎたかな？

(正)

(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（7月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

「川柳塔」への投句について

- ① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
- ② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。
- ③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。
- ④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

オール川柳創刊記念大会 '96

6/29

10:00
スタート

会場 三井アーバンホテル 大阪市港区弁天1-2-1 JR・地下鉄弁天町駅上
当日宿題 「蟹」大野 風柳選「時事吟」田口麦彦選「毒」森中恵美子選
(誌上参加も同題) 「煙」渡邊 蓮夫選「広 い」斎藤大雄選「レモン」橘高 薫風選
「川」北川絢一郎選「壁」西村在我選 (各2句)

事前投句 「劇」磯野いさむ選 (1句) (参加者に限る・6/10締切・官製ハガキ使用)
参加費用 当日参加2500円/誌上参加2000円 (6月1日締め切り)

※事前投句は①住所②氏名③電話番号④年齢⑤性別⑥懇親宴(7500円)の
出欠を必ず明記ください。又、誌上参加ご希望の方は作品(市販の原稿用紙使
用)と①~⑤を明記して参加費(小為替/振替)と一緒にご応募ください。

来賓: 仲川たけし・山田良行・高峰一郎・東野大八/懇親宴ゲスト: 難波利三(作家)
桂 歌之助(落語家)/オール川柳賞発表/討論会: 「よい川柳の条件」司会大木俊秀

その他詳細は『月刊オール川柳』4・5月号を参照 主催/月刊オール川柳

投句先 〒556 大阪市浪速区恵美須西2-9-15 まるいビル2F/3F

月刊オール川柳「オール川柳誌上大会係」

TEL 06-634-5548 FAX 06-636-3832 郵便振替 00980-2-22728

第11回国民文化祭とやま'96

川柳

作品募集要項

— 山と海と 存在のロマン —

一 応募受付期間

平成八年三月一日(金)〜五月三十一日(金)(当日消印有効)

二 応募規定

一人各題二句詠 (未発表作品に限る)
宿題(当日句) 立っ ロマン いきいき 蟹気楼 くすり 野仏

(1) 作品

一人につき一〇〇〇円

(2) 応募料

富山県実行委員会作成の「募集要項」を御覧のうえ、所

(3) 応募方法

定の応募用紙を使用して御応募ください。 富山県上野川町高内三六五

(4) 応募先

第11回国民文化祭大沢野町実行委員会 事務局「文芸祭」川柳係

三 運者(五〇音順)

(1) 第一次選者

石川 三昌 大木 俊秀 大野 風柳 加藤 翠谷

(2) 第二次選者

橘高 薫風 斎藤 大雄 佐藤 良夜 田口 麦彦

(3) 第三次選者

竹本龍太郎 藤本静子 細川 聖夜 森中恵美子

(4) 賞(予定)

文部大臣奨励賞 富山県知事賞 国民文化祭実行委員会会長賞

五 発表会場

川柳大会(入選発表・選評) 平成八年九月二十九日(日) 十時〜十五時

六 問い合わせ及び募集要項請求先

千九三〇 富山県富山市舟橋北町四一九(森林水産会館内)

千九三九

「文芸祭」川柳係(TEL〇七六四一四四一・二八五)

千九三九

富山県上野川町大沢野町高内三六五

「文芸祭」川柳係

(TEL〇七六四一六八一・二一一(内六七四))

七 主催者

文化庁 富山県 富山県教育委員会 大沢野町 大沢野町教育委員会 富山県川柳協会 富山県川柳協会 第11回国民文化祭富山県実行委員会 第11回国民文化祭大沢野町実行委員会

大沢野町実行委員会

大沢野町実行委員会

大沢野町実行委員会